

桐原静矢になったけどとりあえず最強目指す

田中

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二股かけて刺されて桐原静矢になっていた。

とりあえずステルスとか強すぎるんで最強目指します。

もちろんじゃんけんが決まる時があるかもしれないからじゃんけん必勝法の開発も忘れない！

結局何をしても勝てばよからうなのだあ。

## 目次

桐原君になりました。	1
破軍学園に入学しました。	6
七星剣武祭優勝しました。	13
【世界時計】と戦いました。	18
粛清しました。	23
お出迎えしました。	27
準備をしました。	34
審判しました。	40
新学期始まりました。	45
騒がれました。	52
夢を見ました。	57
制圧しました。	63
【落第騎士】と戦いました。	72
解説しました。	79
観戦しました。	84
【紅の淑女】と戦いました。	88
外食しました。	93
【深海の魔女】と戦いました。	98
盗撮犯を撃退しました。	105
弁明しました。	110
能力明かしました。	115
予選最終戦しました。	121
予選最終戦観戦しました	127
団長押し付けました。	134

任命式に出るだけ出ました  
学園が襲撃されました。

桐原君になりました。

「……俺は死んだ。」

特に何かを助けたりせず、不幸な事故とかそういういったことでもない。むしろ悪いことをしたのだから当然の報いではあると思う。俺の死因とは二股をかけていることが発覚し、片方の女性が激怒。すぐさま刺される。こういった流れで俺は死んだ。後悔はあまりしていない。だがやはりというべきか1人を選べば良かったかとは思いう。というか死んだ筈なのになぜこのような思考ができるのか。

「てか意識あるし目が見えるんだけど」

意識がはつきりしている。というか立っているという実感がある。いったいなぜ？と思うがなぜかすぐ側にあつた鏡を見ることで大体察した。

「憑依転生ってやつね」

俺の姿は将来イケメンになる可能性が高い少年になっていた。ふむ、こういうったものは暇つぶしによく読んでいたが体験するとは少しも思わなかった。てか普通はしない。あれはフィクションなのだ。つまり俺の存在はフィクションであるということがわかる。ふむ、物語の主人公か主人公の咬ませ犬かどちらだろうか。イケメンになりそうだし主人公かな。

「静矢。支度したなら早く来い。今日も弓術の練習するぞ」

初老の男性がやってきた。いかにも武術を修めていますって顔だ。弓術って言ってたし弓術が凄いのだろう。てか俺の名前静矢って言うのか。静雄とかだったら強そうだったのと思う。俺ってここでは弓術するのか、剣術だけなら自信あったんだが弓術は流石にいわ。

「何を黙ってるんだ。ほら行くぞ」

この間僅か0.1秒とかじゃないのかい。ま、ここは大人しく付いていく。歩きながら家の内装を見るが結構古いと思う。少なくとも木造であるとはいえる。扉は襖だし部屋は畳だし、結構年季入ってるのも目でわかる。

「今日はどうした。いつもと違って静かではないか」

いつもの俺は静かではないらしい。こんなに困るなら赤ん坊から始めさせるよ！なんで少年期からなんだよ！

「そ、そうかな？それより早く弓術しようよ」

外によくやく出たのだが何も無い。結構広い。

「ほう、積極的だな。いいだろう。なら【固有霊装】を出せ」

デバイス？何それ、そんなもの身に付けてないよ。

「ぐずぐずせず早く【朧月】を出さんか。【伐刀絶技】の練習もするぞ」

この瞬間俺に電流が走る！静矢、デバイス、朧月、ノウブルアーツ。俺は桐原静矢になったようだ。今からじゃんけんの練習でもしとくか（適当）

「出し方忘れたとは言わさんぞ。昨日教えたばかりだろう」

「逆に言うなら昨日しか教えてないからまだ慣れてないんだよ」

子供といえればいい訳という意味不な理論から噛み付く。てか桐原君ってこんな時期から使えるようになったんだ。初めて知った。

「気合を入れて【朧月】と言うだけだろう。忘れる要素はないぞ」

そんな簡単なのね。そういや固有霊装って心の中で言ったりしても出てくるのかな？【朧月】………無理みたいだ。だからあんな恥ずかしいこといつも言ってるのか。

【朧月】

声を出せば手に弓が握られる。何これ面白い。消すときどうすんだろ。消えろって念じるのかな？消えろ消えろ。

「折角だしたのに消してどうする！」

【朧月】

大体分かってきた。伐刀絶技がどんなものであるか知っている俺はすぐ使えるだろうし応用も考えられる。原作ブレイクをするために一輝君をぶちのめす対策も考えられる。強力な人って大体出るもんね。アドバンテージがありすぎてこれから楽しみかもしれない。なににせよ今は修行だな。この少年期から頑張ればあの【雷切】にも勝てるだろうし最強を目指せるだろう。能力は反則級だからいけないという道理はない。

【狩人の森】

アニメと同じように指はっちゃんもしてみる。原作の方では森なんてなかった。だがアニメでは森ができた。俺はアニメの可能性を信じた。その結果は樹海が出来上がった。

「はっ。」

初老の男性は惚けている。どうやら昨日の桐原君は【狩人の森】を使えていなかったらしい。

「まさか、たった1日で【伐刀絶技】を使えるようになるとは少しも思わなかった。しかも能力が樹海の生成だけでなくステルスもとは、もしかしたらかなり優秀な魔導騎士になれるかもな」

さて、ここからが能力の実験の本番だ。俺のやりたいことはステルスのON、OFF、矢のステルス、樹海の一部のステルス、そして樹海を使用して木の剣の生成。この4つだ。なぜ木の剣の生成がしたいかといえば一輝君を単純な剣技で倒したいと思うからだ。

「兎も角、矢の精度を確かめようか」

弦を引つ張れば矢は出てくる。その矢を放ち、その後すぐに思い切り引つ張り矢を放つ。前に放った矢にあたり、壊して突き進んだ。そして狙い通りの場所へ当たる。おそらく補正がかかっていると思われる。

「そろそろ姿を現せ」

初老の男性が言ってくる。実験のため自分だけのステルスをOFFにしようと念じる。初老の男性がこちらに近づいてくるということは成功だろう。

「この状態をどれくらい維持できる？」

「まだはじめてだからわからない」

「そうか。ならこれからは維持する練習をするといい。長く維持できるようになら呼べ。模擬戦をするぞ」

そう言って去っていく。とりあえず俺に教えることはないみたいだ。つまり自分で能力の開拓をしていけというわけだ。出てきた技を全て試してみたらさらに目標を達成させようと心に決める。

実験結果を発表しよう。いや、先に今の年齢などを報告しようと思う。今の年齢はなんと13歳になった。つまり憑依してから5年だ。え？あの時の年齢なんて知らない？そんなことはどうでもいい。5年の年月を経て、俺は自分の才能が怖くなった。あの実験は結局1年で終わった。なら4年間何をしていたかだがあらゆる武術を習得していた。桐原君の体はスペックが高い。なぜ咬ませ犬になったんだ……と思えるほど高い。才能と努力をフル活用した結果だが……。

非公式ですが黒鉄王馬倒しちゃいました。テヘペロ

なんか幼少期の黒鉄王馬的なやついたから声かけたら本物で、だから勝負挑んだのだが俺のことを吟味して快諾してくれた。その結果は先に言ったが俺の勝ち。桐原君の弱点と言われていた広範囲への攻撃だが矢で吹き飛ばすという方法で攻略した。ぶっちゃけ風吹かせても風を切り裂いて進む俺の矢の前では無意味だった。最後は名刀と同じくらいの切れ味を誇る木刀を使い接近戦をした。首元に木刀を当てることで俺の勝ちとして終わった。勝つことでライバル認定を受けたがあれ以降接触はない。

あと3年後原作が始まり、2年後には破軍学園へ入学する。そうそう、最初に出てきた初老の男性は俺の父親だった。通りで似てると思った。あ、1番大事なこと言い忘れた。なんか俺の魔力原作より高くなった。魔力量Aになっちゃった。今の俺をランク付けするなら

【伐刀者ランク】A 【攻撃力】A 【防御力】E 【魔力量】A 【魔力制御】A 【身体能力】A 【運】B

ってところだろう。防御力は0に等しい。攻撃には攻撃をもって制する。それが俺のモットーだ。防御力0でも傷つかなければ意味がない。他はほぼAだが一応隠している。能ある鷹は爪を隠すってやつをやりたいのではない。ただ面倒事に巻き込まれたくないのだ。ほぼAランクの俺が裏に知れたらなんとしてでも入れたがるだろう。自意識過剰とかではなくまじで。公での俺は



【伐刀者ランク】C 【攻撃力】D 【防御力】E 【魔力量】A 【魔力制御】  
B 【身体能力】D 【運】B

となっている。これでも強いと思う。あと、じゃんけんの必勝法も習得したためじゃんけんで決めることになっても勝てるだろう。この必勝法の習得のため1年半費やしたのだ。習得後じゃんけんで負けたことはない。

そういや今何をやっているか言っていないかった。今俺は仮面ライダーのお面を付け、義勇兵として能力なしで【解放軍】と呼ばれるテロリストを屠っている。能力なしでも余裕で倒せる。強いやつは強いがなんとかなっている。先程も1人伐刀者を捕らえたし、今も水出すだけの能力の伐刀者を捕らえた。義勇兵として参加しているのにお礼と言ってお金を少々くれるためやる気が上がる。とりあえずはヴァーミリオン皇国のアジトは制圧した。終わったし桐原静矢はクールに去るぜ。

そして2年後へと続く。

## 破軍学園に入学しました。

時は飛ぶけど俺は破軍学園に主席で合格した。俺ほどの実力者ともなれば余裕である。入学式の時の挨拶を一応したのだがあまりうまくできたとは思えない。だが、アドリブで考えたにしていた。方だと信じたい。そういえば入学式の時一輝君を見た。原作だと彼を退学にするため何かとやらないといけないみたいだった。それをそつなくこなし、学園に対しての印象をあげたい。そして、俺の目標は七星剣武祭1位。ここまでくれば厄介事を誰にも迷惑かけず自分1人で対処できる。

「君がFランクの10年に一度の劣等生かー。僕の名前は桐原静矢。よろしく黒鉄君」

嫌味つたらしく言えただろうか。言ってるに違いない。入学式から数日後、学園長からのミッションを早速頂いた。クラスでの居場所をなくせとのことだ。ならこの煽りが効果的はず。まあこの程度でいなくなるはずはない。対して嫌われず、だが学園長からは真面目にミッションをしてるように見せる。そんな立ち回りをするのが目標。主要キャラに嫌われたら嫌だしね。

「よろしく桐原君」

一輝君は俺の目を見て本気で言っていないと分かってくれていいはずだ。だって主人公だもん。そのくらいの見る目はあるよ。凄まじくやらされてる感を出してるもん俺！出してるよね？うん、出してる。

「黒鉄の家に生まれておきながら劣等生って、中々恥ずかしいよねえ。多分居場所なかったでしょ？ここでもそうなると思うよ。だって能力が足りなければ実技の授業を受けられないんだから。ソースは理事長」

ハハハと笑いながら一輝君を蔑むようなフリをして情報を渡す。

早いうちに自主練だけで頑張っていく方が良いよと言つてあげてるのだ。さらに、理事長は一輝君を退学にさせる気満々であるということも伝える。なんて慈悲深いんだ俺は。倒置法である。

「そうなんだ。それでも僕は魔導騎士になりたいんだ」

「まあ頑張ると良いよ。才能が全くない劣等生。僕のような才能ある伐刀者は何もせずとも高みを目指せるのさっ」

きつと今の俺の言葉を一輝君は完全に嘘だと見抜いているだろう。見る人が見ると俺は明らかに特訓をし続けている人間に見える。まあ一輝君が嘘と見抜いても周りは本当だと思ひ込むから良い。

「みんなも劣等生なんかには構わず僕と切磋琢磨しようじゃないか」

一輝君を退学に追い込む役は俺一人です。多ければ多いほど面倒なことになっていく。一輝君の自主練中に邪魔させるわけにはいかないしね。

「じゃあ僕はもう行くよ。せいぜい僕の邪魔にならないようにすることだね」

決まった。このクラスであいつすげーやつだという地位と理事長の好感度をゲットした。その代わりもしかしたら一輝君に嫌われたかもしれない。ま、いいけど。ごめんなさいあまり良くないです嫌わないでください。

—————

来る日も来る日も一輝君の邪魔？をすることで理事長から俺はかなり気に入られていた。あの理事長、頭大丈夫ですか？結果出さないのに気に入ってバカじゃないんですか？

「桐原君、七星剣武祭に出たくないかい？」

「出ます。僕も伐刀者としてその高みになりますからね。まあ才能ある僕が出ちゃえば優勝しちゃいますけど」

俺の言葉に理事長は呆れるが次の言葉を告げようと口を開く。

「じゃあ、君の弓で黒鉄一輝を死なない程度に撃つてください。彼が反撃してくれば退学に持ち込めます」

「つまり、反撃させるよう誘導してくれというわけですね？」

「はい。彼も桐原君のことをかなり嫌っているはずです。それを利用して彼に反撃させます」

無理なんだよなあ。主人公はこの程度でやられはしない。やられるにしても俺の手で、ステージは七星剣武祭で、そういう場所で戦いたい。いや、模擬戦とかもやってみたい。来年ならさせてくれるかな？

「わかりました。では放課後に実行しますね」

無意味だけど一応やる。どうせ結果は同じだろう。俺がやろうとしていることも原作と同じであるため、本当に原作と同じ結末となるのであった。尚、七星剣武祭には出場させてくれるらしい。やったぜ。

—————

時はさらに進み、七星剣武祭が始まってしまい、順調に勝ち進むむこと準決勝。そこで【雷切】こと東堂刀華さんと戦うことになった。ここまで俺は手の内を出さず全て樹海を出しての近接戦闘のみで戦ってきた。ステルスは一切使っていない。それだけ俺は強いのだ！途中原作で今年優勝するはずだった諸星雄大さんを剣技で倒すこととでかなり注目されたし、倉敷蔵人も戦い、剣で勝った。今大会最大のダークホースと呼ばれ、【森の剣鬼】とかいうダサイ名前と呼ばれ出した。【狩人】の方が俺的には好みである。

話が逸れてしまった。俺の次の相手は東堂さん。正直クロスレンジで勝ちたいと思う。なぜって？そこにロマンがあるからだ。クロスレンジ最強にクロスレンジで勝てば俺がクロスレンジ最強になる。最強という響きが俺はだいすきだ。情報量では俺が圧倒的に有利。あちらはステルスがあるとも知らないし本来は弓で戦うことも知らないという圧倒的に不利な状態なはず。

はつきり言おう。この試合は弓を使えば勝ち確定だ。その上で

東堂さんに挑戦する。真つ向からの真剣勝負が大好きなんだ。そのために強くなった。この強さがどこまで通じるのかを確かめたい。

『準決勝は同じ破軍学園！【雷切】東堂刀華VS【森の剣鬼】桐原静矢』

新聞に書いてあった。特に興味はないが東堂さんの画像のスクリーンの中身が見えそうなため見えないのが分かっていてもローアも書いてある。剣での戦いにおいては俺が圧倒的に不利と書かれており、ほぼ東堂さんの勝ちが濃厚と言われている。だが、そういった前評判を全て覆ってきているためどちらが勝つかわからないと書かれている。つまり、誰もどちらが勝つかなんて予想できないのだ。予想できないのが当たり前ということはない。前大会は予想が発表され、それ通りになったらしい。準決勝前となればインタビューがあるわけでその受け答えをした後に試合というよくわからないシステムがある。今から思い出すのはインタビューのハイライトである。

『東堂選手をどう思いますか？』

「東堂？強いよね。序盤、中盤、終盤、隙がないと思うよ。だけど……僕は負けないよ」

これだけで笑いが起きた。皆将棋好きなのだろう。わからない人は序盤、中盤、終盤、隙がないと思うよ。で検索すれば出るだろう。

あとは雷切に対しての対応や、対策を聞かれた。それには行き当たりばったりですと答えておいた。兎も角、そろそろ戦場に行かないとな。

「どうも東堂先輩。僕は前から貴女のことを気になっていました。もちろん剣士としてですが」

会場の中心で2人は顔を合わせる。何気に初めての会話であるが俺はもう東堂さんのことを知っている。それはもちろん相手も俺のことを知っているだろう。

「私もです桐原君。貴方が弓で戦うのは学園のデータで知っています。しかし、剣士としての誇りがあるのがわかります。だからこそ、

剣士として、貴方に弓を使わせませす」

「弓を使って欲しいんですか?」

「欲を言えば剣で勝てないと思わせて弓を使わせたいです」

「中々キツイことを言いますね東堂先輩。なら俺の剣技を越えてください」

lllll go ahead

試合開始の合図と同時に俺も東堂さんも動く。一瞬にして樹海を構築して剣を取る俺、刀でこちらに斬りかかる東堂さん。動きは東堂さんの方が早かった。俺は斬られないよう後退しようすることで、東堂さんが眼鏡を取っていることに気づいた。つまり後退しようとしていることは閃理眼によって読まれていた。なら後退しようとする態勢で剣を振るだけである。剣を振る速度には自信がある。感じてからでは遅いはずである。

振った剣は空を斬った。だがそれは東堂さんが追わず引いたからである。もしあのまま追っていけば東堂さんを斬れた自信が俺にはある。そして東堂さんもそれを感じ取ったのだ。流石だと思う。序盤の戦闘では同等だと思われる。お互い一步も引かない。

「次はこちらから行きますよ」

俺は東堂さんのように抜き足はできない。だからこそ身体を鍛えることで視認できない速さで動くことにした。クロスレンジにはまだはいらず、樹海の樹を足場にして接近し、背後から剣を振る。東堂さんも抜き足とは違う純粹な速度による攻撃に驚き、防御するのが手一杯の様子。この樹海において圧倒的に俺が有利である。

余裕がなかった東堂さんも俺の速度に慣れてくる。慣れることで余裕も生まれる。それが反撃につながる。お互い一步も引かず剣を振る。俺の上段からの一撃は下段からの振り上げにより弾かれ、その隙に横薙ぎが来る。それを俺が剣を縦に添えることで防御する。一進一退の攻防だ。全ての意識をこちらに向けておかなければ獲られるという危機感も感じる。こんな戦いは諸星さんとの試合でも、蔵

人君との試合でも感じられなかった。本当に強い。

いつの間にかクロスレンジで真つ向から斬り合っているが俺も東堂さんも互角である。雷切は使われていないというよりか、使うまでの余裕を与えない。雷が襲ってこようと樹海が避雷針となり自動で避けてくれる。だからこそお互いに純粋な剣技によつて試合が運ばれていく。

このままでは埒があかない。予想ではこのままだと、ずっと斬り合うことになる。それは時間の無駄である。タイムアップで勝敗が決まるなんてクソくらいだ。それなら俺はアーアー弓を使う。

【朧月】

距離を取るため渾身の力を入れ剣を振り、防がせることで距離があく。その隙に俺の愛弓朧月を発現させる。

「東堂先輩、誇つていいですよ。あのまま僕と斬り合えば引き分けになっていた。このような決着になるのは本当に残念です。今ならじゃんけんでもいいですよ？」

「ふざけないでください。私は嬉しいです。クロスレンジであるのにまともに斬り合わされ、そして互角に戦う人がいることが、本来の武器である弓をとらせることができたのが、本当に嬉しいです。だからこそ、貴方の本気を私の本気で打ち砕く」

「では、1発で決めましょう。僕のほぼ全ての魔力を込めた矢を貴女へ向けて撃ちます。これを避ければ、砕けば、貴女の勝ちです。後は本当にじゃんけんでしか勝ち目はありません」

「良いでしょう。私も見せます。最強の一撃を」

東堂先輩は眼を、脳を、身体の全てを俺の矢へと向ける。対する俺も魔力を込めきつた最強の矢を作り東堂さんへと向ける。鞘に収めた刀から放たれる威圧は凄まじいものだ。結構離れているのにピリピリする。

「これが僕の最強の伐刀絶技【崩月】！」

矢は放たれた。東堂さんはその矢を見て驚き、居合する。

【雷切】！

バリバリと辺りに雷を散らし放たれた一撃は俺の矢とぶつかり合

い、静止する。俺の矢も東堂さんの刀も全く動かない。ここまでは互角である。

だが、俺の【崩月】は星を破壊することができると一撃。具体的に言えば何処ぞの十六夜君の本気レベルの一撃だ。次第に東堂さんの刀に亀裂が入り、刀が碎ける。碎けた瞬間放った矢を幻想形態に切り替えることで東堂さんを傷つけることなく貫いた。その代り、東堂さんの意識は刈り取られ、倒れ伏した。

『勝者、桐原静矢選手!!!』

審判の声を聞くと共に右腕を上げる。だが魔力の使いすぎにより、そのまま倒れる。意識は倒れた拍子に手放された。何にせよ優勝まであと一つである。



## 七星剣武祭優勝しました。

目を覚ませば病室にいた。魔力の使いすぎで倒れたと医者に言われたけどそんなこと本人が1番よくわかっている。それよりも問題なのは明日の決勝までに俺の魔力は回復しきらないことである。魔力がAクラスでも回復力が普通なら回復しきらないのだ。これは仕方ない。

決勝の相手だが名前は城ヶ崎白夜という。二つ名は【天眼】彼の能力は厄介で相手を瞬間移動させるみたいだ。俺のイメージはどこぞのシヨタコンの能力のような感じだ。だが、欠点として動いている人間には一度固有霊装での攻撃を当てなければいけない。俺は魔力も戻らないし最初から弓矢による勝負をするつもりだ。最後は本物の桐原君みたいに狩人として白夜さんを狩る。彼が天眼なんてカッコいい二つ名を持つ理由だがそれは相手の情報を集めてその情報を読み取り、相手の行動を読むことからきているらしい。原作の一輝くん曰く、一輝くんの完全掌握よりも分析の精度が高いらしい。

正直強敵だが、決勝という大舞台で本邦初公開である、伐刀絶技【狩人の森】を使う。これを読むことは不可能である。学園にも樹海の召喚が俺の伐刀絶技ということになっているし、誰1人として知らない。これを最後まで使わなかったのにはこういった理由があったのだ。ナメプをしていたわけではない。ただこうなることを知っていたから切り札として置いておいたのだ。勿論矢のステルスは使われない。そこまで手の内を晒さなくても確実に勝つ自信があるからだ。ナメプをするのではない。次の戦いに備えて与える情報を極力少なくしているのだ。

「桐原選手、決勝進出おめでとうございます！次の相手は【天眼】城ヶ崎白夜選手ですが意気込みの方をお聞かせください」

トイレに行きたくなり、外に出ると人が多くいた。準決勝とは違い、今インタビューを行うのね。桐原静矢として盛大にファンサービスをしてやろうではないか。

「僕のファンの皆の為に優勝します」

ウインクとともに言う俺の姿を思い浮かべると少し鳥肌が立つが立派なファンサービスを行えただろう。というか俺のファンなんているのか？いや、イケメンだからいるだろう（確信）

「相手は分析してくると思われませんが対策などは練られていますか？」

「僕は1分、1秒ごとに強くなります。そうすることで城ヶ崎選手の分析を超える。僕の進化を分析できるのならしてみたいですね」

イケメンスマイルで答える。人は1分、1秒で急激に強くなることはないが上手い返しであると思う。ここまで来るまでにインタビューを結構受けたから慣れてきたのだろう。

「なるほど、では最後に一言お願いします」

「優勝まであと一步。ここまで戦って負かした相手の為にも優勝してきます」

もう桐原君の面影が残っていないが評価はうなぎのぼりだろう。これで女性ファンのハートをがっしり頂いたな。まあその代わり漏れそうなくらい辛いんだけどね。トイレに行きたいのにインタビューするからマジ漏れそう。

時が経つのは早く、会場に立つ俺と城ヶ崎さん。沸き起こる歓声はいつもより大きく、うるさい。特に男の野太い声は耳に響くからあまり叫ばないでいただきたい。特に接点はないため、何も話さない。お互いに目を見るだけだ。決勝戦が始まりかければ歓声はおさまり、意識を相手にのみ集中することができた。

l i i g o a h e a d

【朧月】

開始の合図とともに俺は固有霊装を出す。それだけでなく、樹海を召喚と牽制に矢を放つがそれは当たらない。だが牽制として成功したため伐刀絶技を使う隙にはなった。

【狩人の森】

俺がステルスすることにより、実況も観客も、城ヶ崎さんも驚愕し

ている。これこそが俺の切り札のステルス。桐原くんが【狩人】と呼ばれていた所以。樹海に身を隠しゆつくりと城ヶ崎さんを狙う。全て1発で決めるつもりで放つ。第1矢はギリギリで回避された。それだけでなくこちらに近づいてくる。分析が得意なだけありすぐに位置を特定されてしまった。だが、落ち着いて移動する。途中罨も張り巡らしているため、目標である俺しか見えていない城ヶ崎さんはこれの対処ができない。

初めに俺が作った地雷に引っかけり、ダメージを受けた。次に転がしておいた爆弾が至近距離で爆発し、ダメージを受けた。罨を警戒したところで矢を撃つ。罨の警戒をってしまったためモロにくらってしまう。幻想形態にしていなかったため矢は城ヶ崎さんの足に突き刺さる。地雷、爆弾、矢と立て続けに足を狙われることでもかなり機動力を失っている。ここで城ヶ崎さんの頭上に飛ぶ。

### 【驟雨烈光閃】

先端に珠のついた矢を頭上から放つ。驟雨のような大量の矢が閃光のごとく城ヶ崎さんを襲う。完全に対応の遅れた城ヶ崎さんは回避しようとするが足の傷から無理だと悟り固有霊装で全て撃ち落そうとする。だが、俺のトドメは驟雨烈光閃ではない。次の一手として城ヶ崎さんの隣に移動し、弓である朧月を腕に纏わせる形に変形させる。もし、驟雨烈光閃を乗り切った場合のために用意しておくのだ。

### 【大樹崩】

一応防ぎきってしまったため、トドメの一撃として横から放つ。放たれたものはアニメで「そうだ！ジャンケンで決めよう！」という名言と同時に放たれた一撃と同じ、覚醒桐原くんの技である。驟雨が止むと同時に大樹のごとく巨大な矢を飛ばす。トドメの一撃をまともにくらい、城ヶ崎さんは吹き飛ばされる。

試合終了の合図が響く。それと同時に歓声も湧き上がる。俺も樹海を戻し、目の前の全身から血を出している城ヶ崎を見て、生きてると判断した後控え室の方へ戻る。城ヶ崎さんの敗因は自分の分析を上回られ、少しでも驚いてしまったからだ。勝負は始まる前から決

まっていた。孫子の言う通りである。

控え室の前にはマスコミが大勢立っており、俺を見つけたと思えば速攻で襲ってきた。質問の内容はどこもステルスについてが多かった。なぜ今まで使わなかったのかという質問に俺は今日この日のためと答え、残りの質問も優勝の気持ちは？や何が決定的でした？など様々であり、それぞれ超気持ちいい。やはり【狩人の森】です。と言ってやった。優勝した後何をしたい？というのには取り敢えず無能を学園から排除したいと言っておいた。ここで言う無能というのは黒鉄の圧力に負けた現理事長のことである。兎に角表彰までインタビューを受けていた。

表彰も終わり、破軍学園の方へと戻るのだがその前にやる事がある。神宮寺黒乃さんへの提案だ。今の破軍学園の統制。実力があるのに授業を受けられず留年した生徒を挙げ、神宮寺黒乃さんを理事長にする。元々破軍学園の七星剣武祭での成績が悪いから神宮寺黒乃さんが理事長となったのだが今は俺が優勝してしまったためおそらくその話はない。なら、俺が作り上げればいい。七星剣武祭優勝者の権限を使い、理事長を変える。それが俺の優勝したかった理由である。一応臨時講師として西京寧音さんも呼ぶつもりだ。

「僕のような若輩者の為にお時間いただきありがとうございます。神宮寺黒乃さん」

「そういうのはいい。用件を話せ」

「貴女に破軍学園の理事長をして貰いたいのです」  
「断る」

「いいえ、聞いてもらいます。学園のランク主義の統制を変えるためにも貴女にやってもらいます。魔導騎士連盟の圧力にも耐えられるであろう人、戦いで磨き上げられたその眼。それが必要です」

「私以外にもできる奴はいるだろう」

「貴女が1番可能性があるのです。破軍学園には黒鉄一輝という生徒がいます。彼は伐刀者としてのランクが低いため黒鉄家から魔導騎

士になることを阻止されている。そのため実力があるのに授業に出れず今年は確実に留年です。それはあまりにも不憫じゃないですか」「私はその黒鉄一輝というやつを知らんが七星剣武祭優勝者のお前が強いというなら強いのだろうか」

「そこは保証します。戦ってみれば分かります。一度、破軍学園に来ていただければ……」

「わかった。ではこうしよう。私とお前が戦い、お前が勝てればその黒鉄一輝というやつとハンデ戦で戦おう。黒鉄一輝が勝てば理事長というのをやってやる」

「言いましたよ?」

「お前にやるハンデはない。あと、私の新宮寺は神宮寺ではない。間違えるなよ」

……素で間違えてたわ。てか言葉から字がわかんのね。さすが元世界ランキング3位。てか、俺にはハンデくれないのかー」

「ハンデをくれないならもう一つ呑んでもらいたいことがあります」

「一応聞くだけ聞いてやろう」

「おそらく、貴女を呼んで学園を改革すれば先生が居なくなりますので臨時講師として西京寧音さん呼びたいです。その口添えをお願いします」

「……分かった。なら表へ出ろ」

外で戦うのね。一応魔力も全回復してるから戦えるけど世界ランキング3位を相手にするのは辛いものがある。何よりも銃を使うところがいけない。完全に弓の上位互換だ。負けるんじゃないやね。

どうなんのこれ?

## 【世界時計】と戦いました。

新宮寺さんとの勝負。ここで負ければ原作と大きく離れ、一輝君は来年も留年することになり、退学する確率が高くなる。それは流石に面白いそう。だから俺は新宮寺さんにどうしても勝たなければならぬ。

まず、新宮寺さんの固有霊装は二丁拳銃。伐刀絶技は時空を崩壊させたりする。壊れた空間はそのままになる。なにそのチート？笑えないんですけど。二つ名が【世界時計】なだけに時間も操る。いうならディアルガとパルクアを足した感じかな？ なにそれ、そんなチートや！チーターや！

だがチートでは俺も負けていない。なぜなら姿が消え、気配も消える。チート能力があらうと攻撃ができないはず。そこに勝機はある。

「勝負は一回きり、霊装は幻想形態でだ。それでいいな？」

「はい。そちらの方が都合がいい」

「ならこのコインが地に着いたら開始だ」

新宮寺さんはそう言ってコインを取り出し、コインを弾いた。コインは綺麗な放物線を描き、地面に落ちる。てかコイン五百円玉じゃないか！勝負の途中で拾っておこう。

【朧月】！【狩人の森】！

姿を消して五百円玉を拾い、距離を取る。この五百円玉は返さないつもりだ。と、ふざけるのはここまでにして、ここからは頭を切り替えなければならぬ。打倒【世界時計】へ向けて前準備だ。城ヶ崎さんとの戦いでも使った地雷や爆弾を使ったトラップを作成する。その後元の場所へ戻り、新宮寺さんをおびき寄せ、倒す。これが最善の策だ。

「そちらから何もしないのか？しないならこちらから行くぞ？」

そんな声が聞こえたと思えば銃声が響く。それと同時に先ほどトラップを仕掛けていた空間が削り取られている。おいおい、あの人適当に撃ってるのにいい線行き過ぎだぞ。幻想形態と分かっているも当たりたくない。

「分かりましたよー」

新宮寺さんの後ろへ移動し、矢を放つ。撃つた後はすぐに場所を移動して潜伏する。1発撃てば移動して潜伏を繰り返せば普通負けない。相手が普通ではないのでどうなるかはわからないけどね。銃と弓で銃撃戦をやるよりはマシだ。

「ほう、矢は見えるのか。そこがお前の弱点というわけだな」

無視して撃って移動した。先程までいた場所の空間が削り取られている。つまり、矢が見える状態に適應してきたということだ。それは、俺の作戦通りにいっている証拠でもある。原作の一輝君は矢が見える状態に適應したからこそ矢が見えなくなった状態に戸惑い、ボコボコにされたのだ。それと同じことを新宮寺さんにやる。相手は自分が格上であることを理解しているため、油断が少ないだろうが生まれている。そこに付け入り、一輝君ルートを歩ませる。ただそれだけだ。

「【驟雨烈光閃】」

頭上に移動して発動する。矢は見えているが広範囲にわたる矢の雨は確実に新宮寺を捉える。だが、まるで新宮寺さんの時間が早まったかのように高速移動をして回避し、それだけで俺に対して攻撃まで与えてきた。放たれた銃弾は3発。それぞれ右足、右肩、横腹に当たり、挟られた気分になる。

地面に落ちると同時に受け身を取るが落下予想地点を決めていたのか新宮寺さんが銃を撃つ。それについては一応察知していたため、転がることで避けられるが完全に見えているようだ。

「ほう。まだ終わらないか」

悪魔め。俺を痛めつけて楽しんでやがる。いや、勝負自体を楽しんでいるのかもしれない。今の俺にできること、それは矢も消してしまいうしかない。まだ早いかもしれないがこのままでは何もせずにはやられてしまう。

「【大樹崩】」

弓を腕に纏わせ大樹の一撃を放つ。視認不可能な一撃であるため避けるのは不可能といい。だが、また新宮寺さんの時間が早

まったく思えば大樹の矢を避けていた。まさか見えていたのかと思っただがそれはない。なぜなら大樹の矢が当たった木が倒れるのを見て多少は驚いているからだ。つまり、直感だけで回避行動を取り、俺の【大樹崩】を回避したのだ。やっぱチートですわ。

「今のは危なかったぞ」

よく言う。全然余裕そうじゃないか。本当にこの余裕そうな顔が腹立つ。非常に不愉快だ。

「なら、次の一撃で終わらせませすよ。次が当たらなかつたりすれば、意識失うんで俺の敗北は確定です。良くて引き分けの一撃ですよ」

「ほう。なら私もお前の力を認めて禁技を見せてやろう」

げ、なんか新宮寺さんがやる気になつてる。禁技って【時空崩壊】だよね？空間を破壊する技だよね？チートですなはい。こちとら単純に全魔力込めて放つだけなのに。

「本当に嫌になる」

新宮寺さんの目の前に行き姿を表す。真つ向から放ち、【時空崩壊】を突き破る。これしか勝機はない。これでも勝利する確率は10%もないだろう。だがもしこの真つ向勝負で負けてしまっても悔いはない。それが実力差つてただけだ。

「中々いい心構えだな」

「真つ向勝負は嫌いじゃないですよ」

「そういえばお前から名前を聞いてはいなかったな」

「そういえば自己紹介してませんでしたね。今年の七星剣武祭優勝者の桐原静矢です」

「知っているよ桐原。私は元KOK世界3位新宮寺黒乃だ」

「知ってますよ新宮寺さん。ではいきますよ。……【崩月】！」

「禁技・【時空崩壊】」

2つの技はお互いにぶつかり合う。凄まじいエネルギーのぶつかり合いにより、辺りの地形に影響が出てくる。地面はめくり上がり、暴力的な風が木々を薙ぎ倒す。ドラゴンボールの一面を見てるのかのような凄まじい情景である。

次第に魔力の欠乏により意識が離れていく。【崩月】の補足説明を



すると、【崩月】は矢を放った後も魔力を吸い上げる。そのお陰で威力が衰えないのだ。同じ出力で続けるにはそれなりの維持費がかかるのは何においても同じ。維持費を払い続けている俺だからこそ、この勝負は拮抗した時点で勝ちが決まったようなものだ。

徐々に俺の矢が破壊されている空間をさらに破壊しながら押していく。そのことに新宮寺さんは驚いているのかどうかはもう見えていない。俺はこの一撃に五感へ向けられている魔力も賭けている。確実に何処ぞの爆裂魔法の使い手のようにしばらく倒れたままになつてしまおうだろう。——だがそれがどうした。

まだ回せる魔力があるなら今は回せ。心臓の動きが止まってでも、肺の動きが止まってでも、今は全てを賭けるべき時だ。指先がピクリとも動かなくなつてもいいんだ。これはたつた一度だけの勝負。たつた一度だけのチャンスなんだ。逃すわけにはいかない！

肺が破裂しそうなほど苦しい。心臓の動きが小さいせいで体に力が入らない。それでも体の中の魔力を放出しきつた。

そんな俺が最後に見たのは、霞む視界に映る横たわっているようにしか見えない新宮寺さんと思わしき人だった。

完全に相打ちだった。

—————

目を開ければ見慣れぬ天井だった。首を動かそうにも体が動かない。手も足も視線さえも固定されたままだ。

「起きたか？」

耳は聞こえるみたいだ。だが話すことができない。【崩月】による後遺症がここまでとは思ひもしなかった。話すことくらいはできるだろうと思っていたのだが無理みたいだ。仕方ないので瞬きをすることで答える。

「耳は聞こえているみたいだから言うことだけ言ってやろう。あの日から3日経った。そして桐原に初めに言わなければならぬことが、破軍学園次代理事長として、【崩月】の使用を禁ずる。あれは私の

禁技を上回り、その後遺症がこれだ。命も危なかったのだぞ。危ない真似はやめろ」

いきなり【崩月】の使用を禁止させられてしまった。……あれ？ 今次代理事長って言ったよね？ ってことはこの3日で一輝くんと戦い、一輝くんも勝ってくれたということか。良かった。本当に良かった。

「西京寧音についてだが、臨時講師を快く引き受けてくれた。これで満足か？」

これで、原作を始められる。俺も今以上に楽しめる。一輝くんに一々突つかからなくて済む。本当に良かった。

「桐原、お前はゆっくり休め。おそらく1週間はそのままだぞ」

新宮寺さんの声に瞬きを一度だけして目を瞑る。先程目が覚めたばかりなのに安心したからかすぐに眠れた。

肅清しました。

あれから数ヶ月経った。俺は1週間は寝たきりだと覚悟していたのだがなんと、1ヶ月間も寝たきりだった。どうやら魔力が完全に欠乏すれば回復が遅いみたいだ。今では前と同じくらい動けるため関係はない。ただ新宮寺さんに言われなくても【崩月】を使うのは控えるだろう。流星にエーデルワイスとかが出てくれば使わなければ勝てないだろうし使う。

で、今俺が何しているかというところと新宮寺さんと共に現理事長の部屋へと向かっている。何しにと言われれば解雇宣告しにしか言えない。七星剣武祭優勝者という権力を存分に使わせてもらう。

「理事長、新宮寺黒乃さんを連れてきました」

表向きには見学ということでも来てもらっている。かの有名な【世界時計】の訪問を断る学校なんてないだろう。破軍学園もそれに習っているだけだ。

「通してください」

新宮寺さんと顔を見合わせ部屋に入る。

「【世界時計】が我が破軍学園を見学に来てくれるとは、どのようなご用件で見学に参られたのですか？」

理事長の言葉に新宮寺さんがこちらを見てくる。俺に話せというわけだろうか。

「今回新宮寺黒乃さんがこちらに来たのは前々から理事長の方針である能力主義というものに興味があつたかららしいです」

今回のこの訪問の目的は理事長の不正をレコードに収め、その上で理事長リコールに対する生徒4分の3以上の署名を提出。焦る理事長を指差してプギヤーと言つてやる。その後、新理事長として新宮寺さんを添える。素晴らしい作戦である。このことは理事長一派以外の先生も知っており、すでに上に受理されている。つまり、理事長にトドメを刺しに来ただけである。

「そうですか。我が校は魔導騎士連盟日本支部長黒鉄巖殿の思想を尊重しております」

「黒鉄殿殿と関り合いはあるのですか？」

いきなりブツコムなこの人。流石に理事長も怪しむだろう……：……  
と思っていたのに全く怪しんでいない。本当に無能である。

「勿論あります。ここだけの話ですが黒鉄家の汚点である黒鉄一輝という学生がいるのですが彼を退学に追い込もうとすればするほど良いことが起きるんですよ。それをその桐原君にも手伝わってもらっています」

おいバラすなよ無能。口滑りすぎだろ。これじゃあ賄賂もらっているので下僕のように頑張つて一輝くんを退学に追い込んでいますと言っているようなものだ。新宮寺さんも流石に呆れている。いや、内側には怒気が隠れている。生徒を大事に思っていないからだろう。

「貴方はその黒鉄一輝は実力がないと言うのですか？」

「はい。全くありません。授業も受けていないのにあるはずがありません」

冷たさの籠った目で俺を見てくる。これは新宮寺さんが限界を迎えたか。この人は原作でも生徒の事を大事に思っていた。だからこそ未来ある生徒に対する過小評価が気に入らないのだ。いや、理事長に至っては評価すらしていない。理事長は一輝くんを少しも見えない。授業を受けれていない間も自己研磨し続ける一輝くんを少しでも見れば評価は変わったかもしれない。だがそんなifの話があつたとしても今は違う。

「その黒鉄一輝ですが、ハンデ戦とはいえ私に勝ちましたよ」

新宮寺さんの言葉に理事長は一度黙る。だがその後すぐに笑い出す。理事長にとって今のは新宮寺さんの冗談だと思つたのだろう。

「こんな性格してるから自らの駒に裏切られるんだ」

「は？」

「破軍学園理事長である貴方の所業を録音させていただきました」

「おい、どうということだ」

「まだ分からないんですか理事長？いや、元理事長。貴方はとつくに詰んでいるんですよ。新宮寺さんがここに来た時点で貴方はもう理事長ではなくなっているんです」

俺からの言葉に理事長は驚愕する。追い打ちとして持ってきた書類の束を元理事長の前に置く。

「これは破軍学園生徒の理事長変更に対する署名です。貴方に代わりこの新宮寺黒乃さんが理事長の席に座る。勿論4分の3以上集まっているので有効です。後言いますとこれはコピーですので、燃やしても無駄ですし本物は提出して受理されているのもう終わりですよ」「だが教師の署名は集まらないはずだ！私の一派は半分以上だぞ！」「何のために僕が貴方の一派として工作を行ってきたと思うんですか？勿論寝返つてもらいましたよ。教師の署名も半分以上あります」

「な……こんなのは認められない……………」

「でももう書類上破軍学園の理事長は新宮寺黒乃さんとなっているんですよ。ですよね？」

「そうだな。これが証拠だ。あと、残ったお前一派も全員辞めてもらうことになっている」

新宮寺さんの見せる書類を見て理事長は固有霊装を取り出し紙を切りにいく。理事長の短刀では届く前に新宮寺さんに取り押さえられるだろうがここは俺が取り押さええる。短刀を持つ腕を掴み背負い投げをする。勢いよく倒されたにも関わらずしつこく暴れるので1本1本短刀を掴む指をへし折り徴収する。指を折ったことで少し大人しくなるが今度は声がうるさいので署名のコピーを口の中に突っ込んだ。

「前から思ってたけど、僕より弱いの上から命令してくるのが本当に不愉快だ。ずっと元理事長のような無能は消えて欲しいと思っていたよ」

「フガフガ…」

「話そうとしても言葉を出せないのを理解しろよ。ま、元理事長が気になっているのであろうことをいくつか話してあげよう。まず、この計画は七星剣舞祭に出場した時点で僕の中では出来上がっていた。何が決定的になったのかと言うと、俺を七星剣舞祭に出したことだね。1番気になっているであろう俺の裏切りの理由。それは無能が統治するこの学園が気に入らなかつた。ただそれだけだ」

俺の言葉に元理事長は啞然としている。先程まで抵抗していた腕は力なく、諦めてくれたようだ。

「貴方の次の職場ですが地下労働施設にでも行っていればいいんじゃないですかね」

俺の笑顔に新宮寺さんは若干引いている。誠に遺憾である。元理事長は全てを諦めたように目が死んでおり、もう抵抗もないと判断したため解放する。なんにせよこれで破軍学園の改革が終わったことになる。今年は留年するだろうが来年は上がってくれるだろう。といつでも七星剣舞祭の頂を譲ろうとは少しも思わなかったため卒業できるかどうかは別である。

この後は大粛清を行ったり勉学に励んだりしているとあつという間に時が過ぎ、席次一位で最後は終わった。

——こうして、俺の破軍学園1年の幕は閉じた。

お出迎えしました。

日本では今、1つの話題で持ちきりになっている。その話題とは、ヴァーミリオン皇国の皇女ステラ・ヴァーミリオンの日本の留学だ。人類最高峰の魔力を持つている彼女は幼少期からニユースなどで見たことある。来日の際にはかなり多くのマスゴミが現れるのは約束されている。破軍学園入学に対して理事長がインタビュー受ける時点でお察しだろう。たかだか1人の少女が留学するだけというのにお祭り状態である。

ニユースで見たが、彼女は日本で何したいかと聞かれれば「ヴァーミリオン皇国に隠密していた解放軍を根こそぎ排除した仮面ランナーにお礼を言いたい」と答えていた。一体仮面ランナーとはなんだ!?!と思う人もいるだろう。その正体は俺である。仮面ライダーの仮面をつけて走って去っていく姿からそんな名称になったらしい。ちなみに目立つのはあまり良くないため、名称がつくと同時にお小遣い稼ぎであった解放軍潰しは止めた。

兎も角、ステラ・ヴァーミリオンの留学には破軍学園でもわざわざわしていた。特に話題になっていたのは七星剣舞祭優勝者である俺とステラ・ヴァーミリオンのどちらが強いかという議論だ。当事者である俺のいないところでやってほしいと思うがクラスの中核であるため俺もその議論に無理矢理参加させられている。

「実際のところ俺と、ヴァーミリオンさんが戦えば魔力の差で俺が負ける可能性は高い」

何度目の敗北宣言だろうか。同じ言葉を昨日も今日の朝も言ったと思う。いつもそう言った後に俺を保守しようとするやつらが「それでも桐原君は透明になれるわけだから」や「範囲攻撃に晒されても身軽だから避けれる」などとトンデモ理論で俺を勝たせたがるせいで数時間後にはまた同じ言葉を言うことになるのだ。無限ループって怖くね？

実際やってみれば五分五分だろうと思うし、日本人特有の謙虚を発動すれば負けると言ってもいいだろう。おそらく、相手が最初ナメプ

してれば初手で勝てるだろうが中途半端に長引けば俺が負ける。だが長期戦となれば体力の差で勝てる。やはり五分五分である。といつても、五分五分の戦績になると思うのは原作の七星剣舞祭決勝で戦っている時の彼女である。今の彼女には絶対に負けないだろう。

「理事長から呼ばれているから、僕は行くよ」

早くこの場から消えたかったというのもあるが、普通に新宮寺さん……理事長に呼ばれているため、逃げるように会話から離れていく。なぜ、こういふどちらが強いかという話題で盛り上がれるのかわからない。高校生もまだ子供であるということを意識させられる。

「私の代わりに空港へ行つてステラ・ヴァーミリオンをここまで連れてきてくれ」

理事長室に入ればすぐに言われた。もつと説明がほしい。なぜ俺が抜擢されたのか。なぜ従者の1人や2人連れてきていないのか。なぜ理事長が行かないのか。分からないことだらけである。

「なぜ僕なんですかね？僕なんかより暇な人は沢山いるでしょう」

「ステラ・ヴァーミリオンに興味ないだろう？だからだ」

なるほど。少し考えればすぐ分かることだが興味のある人だったらちよつかいかけたりして外交問題になったり、少なくとも浮れるためまともに相手はできないだろう。その点俺は全くもってこれっぽっちも興味ないため、普段通り接することができる。

「理事長は行かないんですか？」

「マスコミの相手が嫌だ。その点お前は慣れてるだろう」

いや、貴女は元KOK世界3位でしょう。俺なんかよりもよっぽど慣れてるだろ。と言つてもどうせ俺が行くことになるのだ。なら早めに折れよう。

「で、いつですか？」

「明日だ」

俺の疑問への返答が早すぎた。だからこそ聞き取れなかったのか



もしれない。もう一度聞いてみよう。

「いつ？」

「明日だ」

聞き間違いではなかった。なぜこんな大事なことを前日に、しかも午後と言ったんだ。無能な元理事長でも1週間前には言ってたぞ。

「でも入学式は明後日ですよ？」

「入学式当日に来日するやつがいると思うのか？」

「なぜ、もっと前から言わないんです？」

「桐原の焦る顔が見たかったからな。ほら、車の手配とかしておかないと明日困るぞ」

鬼！悪魔！どうしてこんな人が結婚できたんだ！世の中おかしい！と、とりあえずあれだ。車の手配とボディガードの手配。俺たち伐刀者にはボディガードなんて必要ないだろうけどマスコミ相手には数が必要だからなあ。こんな仕事を一生徒にやらせるのは間違っていると思うが、新宮寺さんを理事長にしたのは俺であるからこういう仕事をさせられるのはしかたのないことである。

—————

次の日の朝、空港に着いてみれば人の数が異常だった。マスコミが多すぎて純粹に利用している人の迷惑にしかなくていい。カメラ持ってる人結構いるな。と、ポケーっと思っているとマスコミの1人が俺の存在に気づいたようで近寄ってきた。寄ってくるな！

「破軍学園の桐原静矢さんですよね？」

人違いですと言いたいが破軍学園の制服着ていてこの顔していたら誰でもわかる。むしろ聞く方が失礼なんじゃないかと思うくらいである。

「はい。先に言っておくと今日は予定がありますので取材の方はご遠

慮くたさい」

俺の言葉にマスコミは仕方ないとすごく帰るそぶりを見せた後、勢いよく振り返る。そのまま帰ってほしい。

「1つだけ、聞かせてもらえますか？ここにいらしたのはステラ・ヴァーミリオン皇女をお迎えに来たのでしょうか？」

それ以外に何があると言わせてもらいたい。俺のような学生がホイホイ空港にくることなんて中々無い。修学旅行くらいだろう。なぜきたかを知っていてこの質問をし、言質を取ろうとしてるのだろうか。

「その質問にはYesとしか答えられません」

俺の回答に満足したマスコミはもう一度群れの中へと戻っていった。戻ってから数分後、奥の方からシャッター音が聞こえ出した。つまり、ステラ・ヴァーミリオンが来たのだ。徐々にシャッター音が近づいてくることから取材には応じずにこちらに来ているのか、回答しながらこちらに来ているのかのどちらかだろう。どちらにせよ待ち時間が短くなるためこちらとしてはありがたいものだ。

始めに見えたのは炎のように赤い髪。次に見えるのは……目がいつてしまったのは豊満な胸。これは男の性なので仕方のないことである。次に顔、一輝くんがベタ惚れするのもわかるほど美人である。この容姿で強いつて天は二物を与えずとか言うけど三物以上は与えるんだねってくらいだ。

「破軍学園から迎えに来た者です」

「ありがとうございます。待たせるのも悪いので早く行きましょう」

ステラ・ヴァーミリオンの合図で俺は斜め前を歩く。もちろん今は従者として接しているため彼女の荷物は俺が持つ。前日に車を手配しておいてよかった。待たせることになったら大事である。

空港から出て車に荷物を詰め、後部座席にヴァーミリオンさんに乗せて俺は運転手によりしくと伝えてバイクに乗る。なぜバイクかというと行きもタクシーなどを使うと余計に学園の予算を使うことになるためである。予算使うのは帰りだけで良いのだ。とにかく走り出した車の後ろを追走し、道中何事もなくヴァーミリオンさんを破軍

学園まで送り届けるといふ任務を完遂した。

「破軍学園へようこそヴァーミリオンさん。僕は二年になる桐原静矢。これ以降はあまり接触ないだろうから覚えなくてもいい」

バイクを置いてきて挨拶をする。緊張の色もない俺に怪訝な顔をするがすぐに普通になる。なんで一瞬怪しまれたかを問い詰めたいがやめておく。もうすぐここに来るであろう理事長に怒られたくない。

「知ってると思いますが私はステラ・ヴァーミリオンです。ステラと呼んでください」

はい知ってます。彼女に興味がないのも考えものだ。全く話の話題が出てこない。もうすぐ理事長が迎えに来てくれるのは確かなのだ。だがその時間に会話なしなんて気まずい。どうにかならないものか。「わざわざ日本に来た理由ってあるんですかね？」

何か会話をするため必死に出した話題がこれだ。これは知ってる。たしか皇国にいても伸びないから、自分より強い伐刀者を求めて来たと言っていた気がする。

「皇国にいると上を目指せなくなるからです」

うん知ってる。特に反応を示さずへー程度にしか思わない俺にイラつとしたのか自分のことを語りだした。

「皇国では国民の皆が私を褒め称え、第二皇女様は天才だとよく言われました。最初はその言葉が誇らしく思えて、誰にも負けることはない。何でも出来るという気持ちでした」

仕方ないので聞いてやることにする。早く理事長こないかなー。と思いつながら知っている内容を聞きながす。

「でも、その思い上がりが自分を押し込んで気力が削がれるのだと気付いたんです。誰かに褒められることは確かに嬉しい。でもその言葉を聞くことで知らないうちに逃げ道が出来てしまい、上を目指す努

力を忘れてしまう」

俺を真正面から見えてくるその表情はかなり真面目なものである。たしかに俺には褒めてくれる人間が少なく、それを嬉しいと感じるが頻度が少ない。だが彼女はその頻度が多すぎるのだ。そんな環境なら俺も努力せざるまったりと暮らしていたことだろう。そして、今も尚留学なんて手段は確実に使わなかったと言える。彼女の覚悟は強いと思う。

「それじゃ駄目なんです。愛する皇国を守るために、私はもっと強くないといけない。だから自分より強い伐刀者を求めて日本に来たんです」

ああ、本を読んでいる時とは感情の移入が違う。今の俺には才能はある。だからこそ彼女の凄さというのがわかってしまう。国民のために強くなる。そのために日本という遠い国に来て己を磨くとは凄いことだ。応援したくなってしまおうではないか。

「なら、少なくとも破軍学園に来て正解だよ」

意識せず言ってしまった俺の言葉に真剣に目を向ける。なぜと聞きたいのだろう。そんなこと聞かれなくても答えてやる。

「この学園には剣術の鬼がいる。クロスレンジにおいて負けを経験したことはない虎もいる。そして、七星の頂に立った人もいる。この学園は強者には全く困らない」

「その通りだヴァーミリオン」

背後から理事長の声が聞こえ、振り向けばやはりというか理事長が立っていた。気配も音もなく近くのやめてくれませんか。ステラさんがビクつてなっていましたよ。

「理事長。僕はここで失礼します」

言葉を残して去っていく。理事長も俺の任務は完遂しているため、感謝の言葉を俺に伝えて許可してくれた。てか、好きでもなんでもない女の子の話が続かないというのは前世も今も変わらない。今後生きていく中の課題となりそうだ。

「桐原先輩、ありがとうございます」

背後からヴァーミリオンさんの 声が聞こえた。背を向けながら

手を振ることでも返事をする。後ろから理事長の中二病という言葉が俺に突き刺さるが、この行動は普通にカッコいいと思う。かくして、俺の『朝』の仕事は終わった。

準備をしました。

ステラさんを理事長に引き渡した後、理事長室の隣の部屋で雑務……データの整理を行なわされる俺。俺のことを良く思っていないやつからは理事長の犬とまで言われている。そういうプレイはあまり好きではない。俺は虐められるより虐める方が……と、雑念が入ったせいでミスった。とにかく春休み期間中はずっとこんな感じで仕事を回される。理事長は鬼だ。だがそれも今日までである。明日は入学式だから春休みは終わる。ここまで学校が恋しいのは俺くらいではなからうか。ちなみに、理事長は隣の理事長室で俺のまとめた入学者のデータに目を通してている。100以上の新入生のデータを全てまとめてしまうのは中々に骨が折れる。

データを整理すること数時間、放送で一輝くんが呼ばれた。何をやらかしとんねん！と思うがこれが原作開始の合図だろう。おそらく一輝くんは部屋に戻るとステラさんの下着姿を見ることになり、それが原因で呼ばれたのだろう。原作通りである。今回は俺には関係がないため残りのデータ整理に取り掛かる。

後少しで終わるなーと思えば大声で叫ぶ男女の声が聞こえてきて、その後すぐにこの部屋に理事長が入ってきた。絶対に面倒だし面白そうだからって逃げてきたな。

「桐原、順調か？」

逃げてきて何言うとんねんこの人。おっと、関西弁が出たな。順調なのは当たり前だ。昼飯も食べずにずっと入学者のデータ整理してればそりゃ順調だろう。入学手続きを受けに来る人が今も来ているため増えたりもするが少なくとも今日までには終わるペースである。

「余裕です」

俺の言葉に満足した理事長はパソコンの画面を見て抜けがないか確認している。抜けがないように確認しながらしているのではないと思うがもしあって見つけられればしばかれるんだろうな。

急に火災報知器が作動した音が聞こえてきた。十中八九ステラさんだろう。時期に収束するだろう。

「桐原、模擬戦の審判とかしてくれないか？」

なぜ俺が？と露骨に嫌そうな顔をするが理事長は澄まし顔で……いや、少し怖い顔をして『やれ』と言ってくる。こわい。このひとちよーこわい。

「やるのは構いませんが誰と誰のですか？」

「惚けなくてもいい。どうせ黒鉄とヴァーミリオンであることは知ってるだろう。そもそも部屋割りをこうするよう打診したのはお前だ。こうなることも織り込み済みだろう？」

原作通りにしたかっただけだが、結果的にこうなることを知っているから織り込み済みと言って良いのだろうか。ここで審判に抜擢されるとは思わなかった。本来なら寧音さんと観戦しようと思ったのだが仕方ない。ここも俺が折れて引き受けるしかないだろう。

「分かりました。生徒にやらせることじゃないと思いますがやりましょう。それで、幻想形態で戦闘不能になったら負けでいいですよね？」

これが模擬戦においてのオーソドックスなルールである。七星剣舞祭とは違い常に幻想形態で戦うのが模擬戦。致命傷を受けても死ぬことはないが精神へのダメージで意識を刈り取れる。外傷を与えないですむ決闘方法だ。

「それで問題ない。ではいくぞ桐原」

「……わかりました」

データの整理を途中で止め、横に置いてあるタブレット型のPCを持って理事長について、部屋から理事長室に入る。理事長室に入れば、火災対策の水が地面に撒かれていることからステラさんが火を出していたことがわかる。理事長室が凄い水浸しだ。これを掃除する人がかわいそうだ。俺と理事長の前には体を濡らした制服姿の男女、一輝くんとステラさんが立っている。制服が黒いから透けブラはしていない。なんとも残念だ。

「そういえば、君達はルームメイトだ。今日からな。私に文句言わず言うなら桐原に言ってくれ。桐原が1年生の部屋割りを考えたからな」

「どうしてAランクのステラさんが落第騎士である僕とルームメイトなんですか？」

「桐原、答えてやれ」

「それは、ステラさんの能力に合う新生がいなかったからかな。流石10年に1人の天才と言われるだけあるよ。で、困った僕は真逆の10年に1人の劣等生の黒鉄君をルームメイトにすれば刺激があるんじゃないかと思ってね」

「だ、男女が同室なんて間違いがあったらどうするんですか」

「ほう、どんな間違いが起きるのかね？」

理事長、それはセクハラです。てか男女を同じ部屋にしなければ能力が同じくらいの者同士を同室にすることができないのだ。だから男女混合で部屋割りを作るのがベストというわけである。

「君たち以外にも男女でペアになる者はいる。嫌なら退学してくれても結構」

理事長は容赦がない。流石サディスト。相手が嫌がることを平然と言う。

「同じ部屋で生活するなら3つ条件があるわ：話しかけないこと！目を開けないこと！息しないこと！」

「最低限息させてよ！」

「嫌よ！私の匂いを嗅ぐつもりでしょ変態！」

「口で息するから！」

「私の吐いた息を味わうつもりでしょ変態！」

なんだこの茶番。ステラさんの発想が変態そのものである。話の收拾がつかないことに理事長はため息を吐く。

「ではこうしよう。模擬戦をやって、勝ったほうが部屋のルールを決めるんだ」

「それは公平でいいですね」

「言って悪いけど、私はAランクよ。勝てると思っているの？」

「そのための努力はしてきたつもりだよ」

一輝くんの言葉にステラさんの顔が曇る。相手の努力という言葉が嫌なのだろう。



「いいわ。でも負けた方は一生服従！どんな命令でも犬のように従う下僕になるの！」

しぶしぶだか一輝くんもこの模擬戦を承諾した。正直こんな条件で模擬戦でできることに羨ましく思う。俺が一輝くんなら容赦なく叩き潰して下僕にするだろう。そしてあんなことやこんなことを……。 「そうか。なら1時間後に第三闘技場で模擬戦を行う。審判は桐原にやってもらう。絶対に行けよ」

理事長からの脅しがとても怖いです。言われなくても頼まれた仕事は絶対にやり遂げる性格だからするのだが、度々脅されるのが怖い。

「桐原先輩よろしくお願いします」

「まあ部屋割りを作ったの僕だしやることはやるよ」

こうして、1時間後に模擬戦を行われることになった。原作通りなら一輝くんが勝って終わるため、俺にとっては流しイベントである。あー、俺も戦いたい。

一応審判をすることになったため早めに闘技場へときた。俺が来た時にはすでに数人観客席に座っている。その中で最も目を引くのは東堂さんだ。おそらく黒鉄の剣とステラさんの実力を見れるから来たのだろう。審判という仕事がなければ俺も観客席で見たいと思う。俺の視線に気づいたのか微笑みで挨拶してきた。お辞儀することで挨拶を済ませ、手に持ったタブレットを天井に付けられている4つのモニターに同期させる。模擬戦をするときでも選手の情報は開示しないといけない決まりがあるためこの作業は重要である。

「ちゃんとやっているようだな」

理事長が観客席から俺を見下ろす。できることなら理事長もこちらに降りてきて手伝って欲しい。そもそも審判するのは初めてというわけではないが、この作業は久し振りなのだからミスがあるかもしれない。だから確認くらいはして欲しいものだ。

「大丈夫だ。方法はあっている」

確認してくれていたみたいだ。流石理事長。俺の思考を読んで行動してくれる。と、模擬戦するための準備は無事に終了した。まだ15分くらい余裕がある。余裕はあるのだが一輝くんが来た。15分も早く来るなんて大人っぽい対応だ。一輝くんと俺の仲だが良くはなく、とても気まずい。理事長が変わってから関わっていないが、変わる前はイジメのようなことをしていたからどう接していいかわからない。

「勝てると思ってるのかい？」

前と同じような憎まれ口を叩いてしまう。一輝くんに対してはこのやり方が慣れてしまっているため仕方がないと思う。

「勝てる勝てないじゃないんだ。僕は七星剣武祭で優勝しなくちゃならない。優勝すれば、能力値が低くても卒業させてくれると、理事長が言ったから。ステラさんは七星剣舞祭に出場して勝ち上がるだろうから。だから勝つんだ」

「そうかい。能力値が低いのも大変だね」

生まれの才能でここまで追い込まれるとは本当に可哀想な奴だ。剣の腕は俺と張り合えるようになる……もしかしたら俺より上になるかもしれない。それ程の腕になれるのに七星剣舞祭で優勝しないと卒業できないとは不憫な主人公である。

「……………」

「なんだよ。その意外なものを見る目は」

「いや、桐原くんが本当の意味で同情するのは初めて見たから。なんていうか意外だなんて」

「僕がいる時点で、黒鉄くんは優勝できないから同情もしてしまおうよ」  
「それは、戦ってみないとわからないよ」

一輝くんが好戦的な目で見てくるんだけど、これって誘われてる？ やれるならやりたいが少なくとも今日は無理だろう。たしか今日は一輝くんが一刀修羅使って倒れるはず。

「いつでも挑戦するといいよ。前の理事長は消えたから模擬戦なら受け付けるよ」

「それはとても魅力的だから今度お願いしてみようかな。今回はステ

ラさんとの勝負を楽しみたい」

圧倒的なランク差でも試合を楽しむとは、ただの戦闘狂、倉敷蔵人くんと同類じゃないか。

「待たせたみたいね」

ステラさんが到着した。よし、時間ほぼぴったりだ。

「それじゃあ模擬戦を始めるから、真ん中に移動して」

俺の言葉に2人とも従い、闘技場の中心にいつてくれた。タブレットを操作して試合開始の合図を出すことのできる画面にする。

「噂を聞いたわ。アンタ、能力値が足りなくて実践の授業を受けることすら出来なかったそうね。魔導騎士を目指すのなんて諦めた方が身のためなんじゃないの」

「そうかもしれないね。でも、この試合を辞める気は無いよ」

「努力すれば才能に勝てると思う口かしら。あなたも」

「そうありたいとは思ってるよ」

「……まるでこっちが努力してないみたい」

「え？」

2人が話しているから黙って室温の管理を一応してたけど早くしてほしい。こうしている間にも入学手続きを終えた生徒が増えて俺の仕事も増えているのだ。さっさとやれ。

「なんでもないわ。桐原先輩を待たせるのも悪いし早く始めましょう」

「そうだね」

「会話は終わりでもいいかな。じゃあ、これから模擬戦を始める。わかってると思うけど固有霊装は幻想形態で展開してね」

そう言いながら照明を切り替える。せっかく客がいるのだから楽しんでもらおうよう演出もしなくちゃいけない。これがエンタメデュエル！

「きてくれ【陰鉄】」

「傅きなさい【妃竜の罪剣】」

二人とも自身の固有霊装を展開したため、開始の合図を鳴らす。

Let's Go Ahead

審判しました。

開始の合図で真っ先に動いたステラさんが剣で一輝くんを斬りかかるもそれを避ける。避けたことに賞賛し、自身の能力の説明をし出すステラさん。説明は負けフラグである。説明後にさらなる追い打ちを行うステラさん。一撃一撃が重そうに見える。だが、一輝くんはそれを容易くとは言わないが受け流している。あの程度なら俺でもできるので俺は驚かないが観客席の生徒の中には驚いている人もいる。

「こんな面白そうな模擬戦やるなら呼んでくれたらいいのに桐やん」

西京先生が来た。俺の後ろの観客席から体を乗り出している。危ないからやめなさい。

「聞き付けてくるのは分かっていたし、貴女がいると準備長引きそうだったんで仕方ないかなと思いました」

「そういうことを正直に言うところ直した方がいいよ」

「西京先生だから正直に答えてるんですよ」

実はこの人がとても苦手である。おちやらけてるように見えるのに隙が無い。抜き足を普段から使うから、いつの間にか近付かれて反撃で攻撃して怒られる。まあ遠目で見ていたことが抜き足を受けてしまった原因だし、抜き足されるかもしれないと分かっているから見ても見してしまうのだ。別に女性として好きだから目で追っているわけでは無い。動きを参考にしたいから見ていただけだ。

「桐やんはどっちが勝つと思う？」

「黒鉄君が勝つと思います。これは賭けてもいい」

「ほう、なぜそう思う？」

理事長まで会話に入ってきた。というか普通に考えれば一輝くんが勝つに決まっている。データでは圧倒的にステラさんが有利。だが体術や剣技の載っていないデータなんて意味無い。圧倒的に身体能力の差が結果を出す。

「黒鉄君の身体能力は僕や東堂先輩と同じくらいですよ？この程度の動きしかできないステラさんは真っ先に伐刀絶技を使って倒すべき

だった。長期に渡って剣をぶつけ合えば観察眼が優れている黒鉄君が有利になる。だから黒鉄君が勝つんですよ」

「去年まで虐めてた相手をそこまで言えるのは桐やんくらいだよ。どちらが勝つかは概ね桐やんの言った通りになるな」

「自分の意思ではなかったんですが」

「それでも虐めてたことには変わりないだろ」

理事長まで俺を苛めつ子呼ばわりだ。解せん。だが事実であるから反論はできない。

「はいそうですね。僕が悪かったですよ」

「それだけでなく、私を理事長にしたりと人の人生を狂わせすぎだな」  
「いやいや、貴女満更でもないでしょう。狂わせていないですよ。少

なくとも俺のおかげで黒鉄君は救いのチャンスが生まれたんですよ」

「俺？」

「桐やんはたまに裏が出るから面白いけど、もっと上手く隠さないとだめだな」

いや、めっちゃ上手く隠してますよ。隠してなけりやクラスメイトに好かれたりしてないし、ここまで人が寄ってくることなんてない。

「肝に銘じておきますよ」

「桐原、お前が何を企んでるのか。どこまで想定通りなのかは知らないが生徒を巻き込むことだけは許さないぞ」

「なぜそれを今言うんですかね。でも誓いますよ。僕は犠牲を出すような道を選びません」

「それならいい。桐原、試合が動くぞ」

「目が変わりましたね。これ、もう剣技を見切ったのか……速いな」

一輝くんの目が守りから攻めに変わることと状況は一変した。まず、ステラさんが攻めることができなくなった。一輝くん程の剣客を相手にギリギリ防いでいるのだから凄いと見えるが、もう剣を見切られたステラさんには攻める手立てが無い。自分がさっきまで使っていた剣技で攻撃してくることに驚愕と焦りが見える。故に自分の剣を変えなければならぬと錯覚し、変えてしまう。しかし、太刀筋を変えて切り掛かったところで一輝くんは防がれる。

「太刀筋が寝ぼけているよ」

名言である。そして次の瞬間には一輝くんの刀がステラさんの体を肩から斬った……ように見えた。だがステラさんの伐刀絶技である「妃童の羽衣」がステラさんを守る。これは剣技でステラさんが勝つことはできないという意味を持つ一撃だ。つまり、ここから先はステラさんは伐刀絶技を使ってくる。だがそれは一輝くんも同じだ。「…認めてあげるわ。この一戦、私が勝てたのは確かに魔力の才能のおかげだって」

ステラさんはすでに勝った気でいるようだ。ま、そう思うのも無理は無い。相手は魔力が少ない。魔術戦になれば勝てると思ってしまおうだろう。

「イツキ、貴方の努力を認めてあげるわ。だから、最大の敬意を以て、倒してあげる。——蒼天を穿て、煉獄の焰!!」

ステラさんを中心に炎が吹き荒れる。観客にまで被害がいきそうなくらいだ。ちなみに俺は大丈夫だ。魔力というのは便利であり、それを障壁として使っているためダメージはない。

「さすがの魔力操作だねえ。桐やんありがとう」

西京先生もついでに守れるよう障壁を伸ばしている。西京先生程になると普通に守れるがそれは面倒に思うだろう。だからこそお礼を言ってくれるのだ。

「確かに、僕は魔道士の力を持っていない…でも、ここから退くわけにはいかない」

決意した目だ。きつと一輝くんは使ってくれよう。伐刀絶技「二刀修羅」たった1分だけで全魔力を使い、身体能力を極限まで上げる技。今日この模擬戦の審判に対する報酬と言える。「一刀修羅」を使っている状態の一輝くんを見ることで自分の剣がどこまでいけるのかを見極める。

「天壤焼き焦がす竜王の焰!!」

「だから考えた。最弱が最強に勝つためにはどうすればいいか。そして…至った」。——「一刀修羅!!」

なるほど、魔力が上がったと錯覚する感覚がわかった。確かに魔力

を一気に消費するようになればそう見えるのも分かる。ステラさんは魔力が上がったと感じているみたいだ。掲げていた炎の剣を一輝くんへ向かって振り下ろす。振り下ろされることで高密度の炎が一輝くんを襲う。だが、そこに一輝くんはいない。すでに移動していた。ちなみに、炎は射線上にいた俺に襲いかかってきたが全力で防いだためダメージは無い。だが疲れた。そう何度も耐えられる威力ではない。

ステラさんは一瞬で自身の背後に回った一輝くんに気づいた。

「在り得ない！魔力も、上がってる!？」

「上がったんじゃない。なりふり構わずに、全力で使ってるんだ！」

「だからって、そんな急激に身体能力が上がるわけなんてない！」

ステラさんの気持ちもわかる。俺もタネを知らなければそう感じていただろう。一輝くんの魔力量からするならば二倍にすることすら、時間制限が付く。普通ならばそこで満足し、それを行使する。だが、一輝くんは普通では無いことをやってのけた。

「それもそのはずさ。だって僕は、『その文字に偽りなどない全力』を使っているのだから」

「二刀修羅」を思いつくなんて流石主人公だろう。俺は桐原くんに憑依して3日目くらいに同じことをしようとしたが、体への負荷が大きすぎるところではなく、加減ができなかった。それは魔力量が多いから起きることで、一輝くんの魔力量がベストなのだ。黒鉄一輝のみが使える技だ。

それでもステラさんは諦めず炎を一輝くんに当てようとする。だが、それに当たることなく距離が縮まっていく。

「僕の『最弱』を以て、君の『最強』を打ち破る！」

ほぼ零距离になり刀を振り下ろす。その刀は先ほどと違い、「二刀修羅」により強化されているのでステラさんの「妃童の羽衣」ごと体を切り裂いた。といっても幻想形態なので外傷はない。そして、斬られたステラさんはその場に倒れる。

「勝者、黒鉄一輝！」

俺の宣言に観客席の歓声が湧くということではなく、ポカーンとして

いる。まさか落第生が紅蓮の皇女たるステラさんに勝てるとは微塵も思っていなかったのだ。観客から見た二人をドラゴンボールで例えるならヤムチャがSS悟空に勝ったようなものだ。啞然とするのも分かる。観客の反応を見ていたら一輝くんも倒れた。魔力が無くなったのだろう。どこぞの爆裂魔法を使う少女を彷彿させる。

「理事長か西京先生のどちらかはステラさんを運んでください。僕は黒鉄くんを運ぶので」

俺が言った瞬間、西京先生は消えた。出口を見れば逃げていく姿が見えた。そのことに理事長はため息をつき、フィールドに降りてきてステラさんを丁寧に運ぶ。文句一つ言わずやってくれるとは……ま、俺が運んだら色々まずいだろうし当然か。

倒れている一輝くんを背負い、俺も闘技場から出て行った。



## 新学期始まりました。

模擬戦で倒れた一輝くんを部屋に寝かしてから新入生のデータをまとめることで1日が過ぎ次の日の朝、俺はステルスしながら走るという日課をこなしている。ステルスをするのには理由がある。ステルスに対する慣れと、努力しているところを見られたくないという理由だ。俺も一応中二病を患っているのだからこういう努力する姿を見られるのは恥ずかしい。一輝くんの模擬戦を見てより気合が入っているの、より恥ずかしく感じるのだ。努力することは恥ずかしくないとと思うが、これは俺の性格というものであるから仕方ない。恥ずかしがり屋なのだ。

走っていればいつも通りジャージ姿の一輝くんが走っている。今日はステラさんも同じくジャージ姿で走っている。もうすでに結構走っているのかステラさんは結構疲れている。徐々に一輝くんとの距離が開くがそれに気づいた一輝くんが少しスピードを緩めることでまた距離が縮まった。流石、面倒見がいい一輝くんである。ま、もうすぐ広場だからそこで終わるだろう。俺も一旦そこで休憩しよう。もちろんステルスで。

広場に一足ついた俺はストレッチをする。別に二人を待っているわけではない。普通にこうするのが日課なだけだ。いつもならこの時間はすでに一輝くんが刀を振り回しているのだが今日はステラさんがいるから少し遅いだけ。と、ストレッチしていたら一輝くんが到着し、しばらくしてステラさんが到着する。一輝くんは日課だから余裕そうだが、ステラさんは今にも倒れそうなくらいゼーゼー言っている。やはり原作と同じで体力がないのだろう。

「お疲れ様、ステラさん」

「ステラよ」

どうやら一輝くんは呼び捨てを許されたらしい。確かこの時点で落ちていたんだっけか。流石チョロイン。

「僕は毎日20km走ってるけど、ステラはついてこなくても」

「平気よ。このくらい」

見る限り平気そうには見えない。俺も今では30kmなど余裕だが初めの方はキツかったので気持ちにはわかる。負けず嫌いだな。

「負けず嫌いなんだな、ステラは」

そう言つて水筒をステラさんに差し出す。え、それつて間接キス……いいなあ、俺も美少女と間接キスしたい。

「それつて……間接キス……」

意識しておるな。一輝くんはステラさんの態度で勘付いたみたいだ。

「あ……僕が口つけたのなんて嫌だよね……ごめん」

初々しい。なんだこのやりとり、口から砂糖吐き出しそうだ。朝っぱらから見せつけんなよ。そうか、本人達は俺がいることわからないから見せつけてるわけではないのか。でも敷地内でやんなよ。

「別に嫌だなんて言つてないでしょ……むしろ逆つていうか」「え?」

難聴系主人公やめろ。そして誰か俺にブラックコーヒーください。

ステラさんは一輝くんの水筒を取り、飲んでいる。結構長いこと飲んでる。舐めまわしてんじゃないの?つてくらい長い。そのあとの水筒を言い値で買おう。

「今日妹が入学してくるんだ。会うのは4年ぶりだね」

「その妹さん……血が繋がってないとか、そういう設定じゃないでしょうね……?」

設定とか笑つてしまう。量産型ラノベへの批判か!さつきからステラさんの言葉聞いてたら完全に一輝くんのこと好きになつてるじゃないですかヤダー。

「いや、ごく普通の血縁兄妹だけど」

「ならよし」

それは視聴者や読者の言葉を代弁してくれたんですかねステラさん。でも日本にはヨスガるといふ言葉がありまして、日本の闇は深いのですよ?」

「そういえば昨日聞きそびれたけど、一輝はこの学園でどのくらい強

いの？今私がどれくらいなのか参考程度に教えて欲しいわ」

「僕は授業出れてないから誰がどれくらい強いかはわからないけど、下から数えたほうが早いんじゃないかな」

嘘つけ。一輝くんは上から数えた方が早いだろ。何謙虚になってんだ。トップ10には入るよとか言ってもいいくらいだ。ま、1位は譲らないけどね。

「桐原先輩が言ってたのだけど、七星剣舞祭優勝者がこの学園にいるのよね？」

俺の話題出すなよ。disられたら立ち直れないぞ。でも耳を傾けちゃうんだよね。

「あー、桐原君がそう言っていたのか……。自分で調べてみたらいいと思うよ。きっと驚くかも」

「そう。ならそうする」

なんだよ。disったり褒めたりしないのか。てか一輝くんは良い奴だな。きつと俺がばれたくないと思ってバラさなかったんだろ。でも誘導すんなよ。

二人の会話を聞いているとストレッチも終わったので、俺は帰路に立つ。

学期の初めというものは自然と気分が高揚するものだ。新しいクラスメイト……。といっても見た顔ぶれが多いな。なんでこんなに知った人多いんだよ。俺が知らない人は俺のことを芸能人を見るような目で見てくる。最近いろいろあつて意識してなかったけど俺って七星剣舞祭優勝者なんだよな。だからこんなに注目浴びるのか。で、先程から担任が話しているがその内容をまとめる。

1、今年から学内選抜で七星剣舞祭に出る人を決める。2、3日に1回くらいの頻度で戦う。3、1人10戦以上する。4、戦績上位から選ぶので1敗しても諦めるな。5、頑張れ。

とのことだ。俺は原作知識で知っているため別に興味ない。きつ

と今頃折木先生が血を吐き出ししているだろうとしか感じない。

先生の話が終わると今日は終わりだ。早く終わるところが学校初日の良いところだ。終わったので早めに帰ろうとするとクラスメイトに囲まれた。大変面倒くさい。面倒くさいので伝家の宝刀である『理事長に呼ばれている』を使い切り抜ける。ちなみに、新入生のデー々整理をやったおかげでしばらく仕事のことと呼び出さないと理事長から言われている。これからが俺の休暇なのだ。

通路を歩いていると一輝さんとステラさんとあと金髪ショート眼鏡っ娘がいた。しかも眼鏡っ娘は抱きついている。

「私、先輩の大ファンなんです！模擬戦見ちゃったんです！先輩強いですね！」

あー、この娘模擬戦の観客席で見たわ。写真撮ってたな。原作にもいたよーな、いてないよーな……でもきつといたのだろう。16年経ってればどうでも良いことは忘れてしまうのだ。

「私、新聞部を作ろうと思つて。是非、取材させて下さい！」

うわ、面倒くさそうだ。てかステラさんのオーラが物凄い。周りの生徒も「修羅場か!？」とか言つて立ち止まって見てるし。ちなみに俺も立ち止まって見ている。

「ようやく見つけました」

奥から銀髪の小柄な少女が出てくる……。げ、珠雫だ。ぶっちゃけあまり原作勢に関与しないようにしたのだがこの娘とだけは少しあった。いや、少しではないのだがあまり言いたくない。子供の思ひ出である。

見つけたと言つた珠雫は一輝くんの方へ近づいた。

「お久しぶりです。お兄さま」

一輝くんと再会したことを嬉しそうにしている。

「珠雫、見違えたよ。大きくなつたね」

一輝くんは感慨深そうに珠雫を見る。てか今の発言完全に久しぶりに甥っ子が来たおじさんの反応だよ。俺去年実家帰ったら叔父がいてこんな反応してたよ。だから間違いない。一輝くんはおっさんだ。

「お兄さま……」

そう言つて一輝くんを押し倒す。押し倒したことに周りの野次馬はウオーと騒がしくなる。そして、珠雫は一輝くんに抱きついた。……あれ、ディープキスは？おい、ヨスガれよ。せっかく写メろうと携帯出したのに抱きつくだけかよ。つまんね。だがそれだけでもステラさんは固まっていた。

「ずっと、お会いしたかった……」

「ちよつと待ったあ！」

ステラさんが止めに入った。

「なんですか。兄妹のコミュニケーションを邪魔しないでください」

ちよつと冷えた声で言う珠雫。だがステラは引き下がらない。ご主人様を取られてムキになっているのだろう。

「そんな甘い声出してたら兄妹のコミュニケーション以上のことをしそうに感じるでしょう！」

「は？皇女様は何を勘違いしてるんですか？コミュニケーション以上上つて一体何すると思つてるんですか？」

「それはその……キスとか……」

「皇女様っていうのはませてるんですね。確かに、お兄さまにならキスしても良いですけどね。もちろん、コミュニケーションとして」「え、珠雫？」

徐々に珠雫の顔が一輝くんの顔に近づいていく。いいぞいいぞ！  
ヨースーガ！ヨースーガ！

「ダメー！」

一輝くんの口を目標に突き進む珠雫をステラさんは引き剥がす。邪魔されたことに珠雫は不機嫌なようだ。

「どうして邪魔するんですか？貴女には関係ないですよね？」

「関係あるわよ……一輝は私のご主人様で……私は一輝の下僕なんだからあー！」

周りの空気が死んだ。今の言葉で盛り上がっていた空気も凍結した。そして、珠雫が無表情になった。

「特大スキャンダルキターーー！創刊号の見出しは……俺の腕の中でM

O G A K E ! 鬼畜なルームメイトと奴隷な皇女の淫らな密室72時間  
間に決定！」

この空気を打ち破ったのは珠雫が来るまで一輝くんの腕に抱きついていた眼鏡っ娘だった。てかこの眼鏡っ娘、思い…出した…。綴る！ではなく、普通に思い出した。こんなキャラいたわ。なんでここまで濃いキャラを忘れていたのかわからない。原作でも思ったがセンスある見出しだ。

「長いよー！」

いや、ツツコムところはそこじゃない。もつと別にある。的外れなツツコミである。

「一輝、言ったじゃない。『ステラ、俺と同じベッドで寝ろ』って」

「本当ですかお兄さま？」

無表情のまま、一輝くんに問う。一輝くんはそれに少し頬を赤くする。肯定しているようなものである。

「一応本当かな…2段ベッドのことです…」

「お兄さま…今、自由に…」

流石にこれはヤバイ雰囲気だ。固有霊装出したら面倒なことになる。だから出す前に止める。

「無許可で固有霊装出そうとするな」

「イタツ」

そう言って珠雫の頭にチョップをかます。当たると同時にイタツと聞こえたがあまり強くしてないつもりだ。

「誰ですか私の邪魔をするの…は…は…」

振り返って俺を確認すると固まった。

なぜ、原作と違い、問答無用で一輝くんの唇を奪わなかったか。

それはすぐわかることになった…。

「静矢さん…」

そうやって珠雫は俺の唇を奪った……………。

騒がれました。

ズキユウウウン!!!

突然キスされた。とりあえず情報を整理しようと思う。今、俺はキスをされた。というか現在進行形でしている。久しぶりに唇同士でキスをしたが柔らかく、気持ちいい。というかなぜ時と場所を選ばない。だが可愛いから許そう。

「【七星剣王】の彼女か!?!」

「でも、さつき皇女様と修羅場っていなかったか?」

「今北産業。何がどうなってるのかわからない。説明よろ」

「今【七星剣王】とキスしてる女の子がさつきまで落第生を巡って、皇女様と修羅場ってたけどなぜかこうなった」

「意味わかんね」

「俺もわからん」

パシヤパシヤパシヤ。

おい、今写真撮ったやつ誰だ。SNSで拡散したらマジで心臓撃ち抜くぞ。というかいつになったら唇離してくれるんですかね?俺も突然だったから息がそろそろやばいんですが……。

限界を感じた俺は珠雫の肩を押して離れる。まさかキスで死にかけるとは思わなかった。

「これで2回目ですね。静矢さん」

「……………いや、唇同士は初めてでしょ。珠雫」

以前、頬にキスをされたのは覚えている。だけど唇は初めてだ。とか周りもまだ騒がしい。ま、俺も部外者だったら騒ぎ立てるだろうけどね。

「ねえ一輝。あの二人の関係ってなんなの?」

「あー……………本人達に聞いたら?」

先程まで珠雫と揉めていたステラも毒気を抜かれ、一輝くん聞く。ちなみに一輝くんも一応は知らないはずだ。少なくともこの学校に来る以前は俺と会っていない。知っているなら珠雫が言ったの



だろうか。

「あなたと桐原先輩の関係ってなんなの？」

「夫婦です」

「許婚的なやつ？」

違う言葉を言っているが内容はほぼ同じである。そう、何を隠そう俺と珠雫は許婚になっていたのだ。糞とか思っただろう。もつともな理由があると思っただろう。だが、これが真実である。

中学に入る少し前、黒鉄王馬を倒したということ覚えていてだろうか。それを見ていた黒鉄巖が俺の将来性から黒鉄に相応しいと決めつけ、珠雫を俺の許婚にした。その時のことは今でも覚えている。珠雫を物のように扱うのに腹が立ったのも覚えている。

珠雫に初対面で冷たい睨みをされたことも覚えている。

懐かしすぎる記憶である。

「シズクは一輝のこと好きなんじゃないの？」

「それはあくまで家族としてです。お兄さまと久しぶりに会えて嬉しかったのは本当ですよ。家族としてお兄さまを愛してますから」

「じゃあなんでキスしようとしたの？」

「皇女様の様子が面白かったのです。ですが家族間での挨拶としてキスをして問題ないと思います」

「問題あるでしょ」

俺とステラさんがハモった。たしかにアメリカではしたりするだろうがここは日本。見る人が見れば近親相姦の一種に入れられる。

「あの桐原先輩！二人の馴れ初めとか詳しくお願いします！」

眼鏡っ娘がグイッと下から出てきた。顔が近い。珠雫の方をチラツツと見れば今にも固有霊装出すんじゃないだろうかと思うほど殺気が出ている。怖い。

「こういうことを記事にするのは良くないと思うよ。一応は双方の両親が認めた仲で、僕達も認めているからこの件は放っておいて欲しいな」

言いながら距離をとる。やっぱり女の子に近寄られたらどの歳に

なっても照れてしまう。

「うーん、【七星剣王】のスクープは大分盛り上がると思うんだけどなあ。……頼まれてしまったら仕方ないですね。このことは記事にしません。といっても、他の生徒が広めると思いますが」

「いや、記事にされないならいいんだ。噂なら言い逃れができる」

「静矢さん、言い逃れなんて必要ありませんよね。むしろ付き合っていることを公にした方が悪い虫がつかなくて良いと思うんですが」

「はは、俺から平穏を奪い取るのはやめてくれ……」

原作から珠雫のことを知っているが、珠雫は一途に想ってくれる。こういうところは同じなのだろう。違う点はただ愛情を向ける先だけだ。きつとそうだ。身内へ向けての愛じゃないから遠慮しなくなつたとか感じるのは俺の気のせいなのだ。

「二輝はこのこと知っていたの？」

「うん、黒鉄では珠雫しか話し相手がいなかったから。その時に聞いたんだ。王馬兄さんを打ち倒す天才が婚約者になつたって。その時の珠雫の嫌そうな顔は今でも覚えてるよ」

「兄様、それは言わないでください。今は嫌なんかじゃありませんから」

珠雫が慌てて発言する。少し頬を赤くしてる。可愛い。

「珠雫は嫌だったのか。俺もその時は黒鉄の剣に興味があつたという理由だけで承諾したから同じようなものか」

そう、当時の俺はただ強くなりたくて剣術や弓術にのめり込んでいた。その過程で黒鉄王馬を倒し、戦利品として黒鉄の剣術を教わるこゝとができる立場を手に入れた。珠雫を道具のように使っていた黒鉄殿に腹を立てたくせに自分も同じようなことをしていたのだ。滑稽である。

「え、じゃあ桐原先輩は珠雫さんのこと好きじゃないんですか？」

眼鏡っ娘がまた下からグイツと現れる。そうすることでまた珠雫が殺気を垂れ流す。だが先程と違いすぐに一歩下がったことにより顔が近くなることはなかった。

「まあ……うん、そうだね。恥ずかしいけど、好きなんだと思うよ」

こういうことを言うのはすごく恥ずかしく、顔が熱くなる。目を向けると珠雫は満足そうな笑みをしている。

『Foooooooooooo!!』

周りが俺の発言に反応して盛り上がる。てかいつの間にかギャラリー多くないですかね。ギャラリーの中に西京先生いるんですが……。このネタでしばらく弄られる（確信）。

「好きとか言いながら5年間も会いに来なかったんですね」

珠雫がジトト一つと俺を見てくる件。これには単純明快な訳がある。黒鉄本家は遠いのだ。子供が会いに行くななんて早々できないのだ。『だから僕は悪くない』。

「こうして会いに来てくれて嬉しいよ珠雫」

誤魔化しも兼ねて珠雫を抱擁する。珠雫も嬉しそうに胸に頭を埋めてくれるので誤魔化しは成功だろう。抱擁したことでまたギャラリーが騒がしくなる……。というか西京先生が真っ先に扇動している。この人は本当に祭り好きである。

「ねえ一輝、私達って邪魔じゃない？」

「うん、そうだね。それにしても珠雫があんなに嬉しそうな顔してるのは初めてかもしれない」

「確かに、とても嬉しそうですねシズク」

一輝くとステラさんがこの場から去っていく。そしてそれを追いかけて眼鏡っ娘も去っていった。いいな、俺も帰って寝たい。

「珠雫、僕はもう帰ろうと思ってたけどどうする？」

抱擁をやめたら珠雫が残念そうにしている。俺も結構残念だが、昨日まで仕事していたせいでかなり眠い。だから仕方ないのだ。

「それなら部屋を教えてください。相部屋ですか？」

「生憎僕のレベルに合う伐刀者がいないから今年から一人部屋なんだ。ただ、結構な頻度で人は来るけど」

「それで部屋はどこですか？」

「いや、結構な頻度で人が来るから……」

「部屋は？」

「203です」

珠雫の声がどんどん強くなったため、俺が折れた。人がいる時に凸ってきたらどうしよう。もし、そこに女性がいたらどう言い訳しようか……。

「後で行きますね」

珠雫は俺の部屋に来るらしい。いや、教えた時点で来ることは知ってたけどね。

「寝てたらごめん。起きないと思うから3回チャイム押して何もなかったら待たずに諦めて帰ってね」

「はい。その場合は仕方ありませんので帰ります」

「なら良かった。珠雫を外に置いとくなんてできないからね。これ僕の連絡先だからいつでも送って。じゃあまた」

懐から連絡先を書いてある紙を一枚珠雫に渡す。珠雫は一々嬉しそうにしてくれる。その姿を見れば俺も嬉しい。

「はい。また会いましょう」

最後に珠雫の頭を撫でてから別れる。だが、振り返ればいつの間にかギャラリーが増えていて周りが囲まれていた。帰り道を防がれていたが帰ろうとすれば一気に2つに分かれて道が出来上がり、そこを通ることができた。統率取れすぎ。

寮に戻ったらシャワーを浴びてすぐに寝た。

夢を見ました。

――夢を見た。

木々に囲まれた場所で剣を振る少年。それが俺であるとすぐわかった。

木の陰には少女もいた。それが珠雫であることもすぐわかった。これは5年前の記憶だ。珠雫と久し振りに会ったからこのような夢を見たのだろうか。

これは黒鉄蔵によつて珠雫が許嫁となつてから1ヶ月くらいのことだ。まだ黒鉄家で剣を教わっている頃である。

「ここで見てる暇あるなら剣の1つでも振ったら？」と少年は言った。それに対して少女はバレていたことに驚き、一度隠れる。その行動のため息を吐き、再び剣を振る少年。それを静かに見る少女。黒鉄家ではこのような日々を過ごしていた。

「なぜ、そこまで強くなるうとするのですか？」

この日はいつもと違い、少女は今まで聞けなかったことをつい口に出した。なぜそんなことを聞いたのかと後悔している様子だ。

「最強になるため」

少年は迷い無くそう言った。少年を見る少女はその目を見て思う。この人は本気で言っている。見ている場所、目指す場所が違うと。

「そう言う許嫁さんはなぜ強くなるうとしてるんだい？」

少年の問いに少女は答えられなかった。ただ言えたのは「私の名前は珠雫です」という名前の主張のみ。自分の兄なら『父に認められるため』と答えられただろう。だが少女には目的がない。ただ父に言われるがまま強くなるうとする。『父に言われたから』とは答えられない。

「人形のようにだ」

少女は少年の心の内を見透かしたような言葉にピクリと反応する。凶星である。

「あなたに……何がわかるんですか……」

少女は何のしがらみもなさそうな少年に怒りが湧いた。自分が怒られるような真似をしても怒られず特別扱いをされる。そんな中で生活すれば嫌でもこうなる。

「わからない。でも、知ることはできる。僕は珠雫の許嫁だから。そういうものは知っていかなきゃならない。苦しみは半分、楽しさは二倍。昔の人は良いことを言う」

まさか分かち合おうとするとは思わず、少女は一步引く。少女は少年のことを心底バカであると思った。父の計画で勝手に許嫁とされたのに、相手を気遣う必要などどこにあるのだろうか。普通は気遣うことはない。だが少年は少女を尊重しようとしている。

「貴方はバカです」

「座学は未だに満点しか取っていないけど……」

「頭脳では無く、人間的な意味でバカと言っているのです。なぜ勝手に作られた許嫁を気遣うのですか。普通は放っておくものです」

「僕は普通じゃ無く天才だから」

「そういうところがバカなんです」

「ぐぬぬ……」

バカバカ言われることに少年は悔しそうにする。見た目は少年でも中身は憑依した青年。少女にバカバカ言われて悔しいのは当たり前である。

「ですが、貴方の……静矢さんと話したおかげか私も一つ目標ができました」

「ほう、どんな目標かな？」

「静矢さんに言う必要はありません」

「そうか。なら聞かないでおくよ。ただ、強くなるなら僕の相手をしてくれないか？」

少年は少女の心の内を見透かしたように頼んだ。少女はその頼みに、少し間を空け微笑む。

「はい。お願いします」

少年は少女の笑顔を初めて見た。その瞬間、少年は許嫁というものも

ありだなと、密かに思った。

「懐かしい夢だなー」

目が覚めればそんな言葉しか出てこなかった。確かあれから長い期間珠雫と特訓して実家に戻ったんだよな。その間に何度か戦って思ったのは『水の無い場所でこれほどの水遁を』ということが強かった。ちなみに卑劣様は結構好きだった。

負けたことは一度もない。珠雫との特訓がなければ水を斬るという芸当ができるようにはならなかっただろう。

「着信28件……」

携帯を見ればそう書かれていた。中身を見れば珠雫から5件。友人から3件。理事長から20件……。ヒエツ怖い！最後のメールなんて空メールだし、途中で『無視するな』とかあるし、理事長怖い。

珠雫は『珠雫です。これからも宜しくお願いします』というのが1件目、其処から『今から行きます』となり、『部屋の前にいますが、起きてますか？』↓『寝ているようなので帰ります』↓『おやすみなさい』という綺麗なメールである。理事長のような汚いメールは送ってこない。流石である。

珠雫には『申し訳ない。寝ていた。本当に申し訳ない』と返信し、理事長は無視することにした。友人もクラスで言えば良いので放置。

今日は早く起きれなかったためランニングができない。久し振りの二度寝を堪能することにした。

起きた後、学校へ向かえば理事長が待ち構えていた。逃げようとするれば回り込まれ、ヘッドロックをされた。痛いのでやめていただきました

い。

「で、言い訳は？」

「正直寝てました。朝返信するのも面倒だったので仕方ないです」

「ふむ、私も大人だ。その事はもう良い。メールには目を通したか？」

「空メールと無視するなつてやつだけしか見てないです。それ以外は見ずに削除しちゃいました」

「……………仕方ない。放課後部屋に來い。そこで話をする」

「また仕事ですか？」

「それは来ればわかることだ」

うわ…次はどんな仕事だろうか。ま、なんやかんやで充実した日々を送ることができてるから文句は言えない。

「おはようございます。静矢さん」

背後から声がかかった。声に気づいて振り返れば珠雫と横にキラの濃そうなオカマが立っていた。オカマの名前は忘れたが心は乙女と言っていたのを覚えている。

「おはよう珠雫」

「なんだ。黒鉄妹と知り合いだったのか。とにかく、放課後に来てくれればいい。私は行く」

そう言つて理事長は去つていく。今、俺はそつちに気を向ける余裕はない。オカマが性的な目で見てくるのだ。怖い。怖すぎる。

「あなたが桐原静矢先輩……聞いていたよりもイイ男ね」

サツと血の気が引き、鳥肌が立った。これは想像以上にきつい。そんな目で俺を見ないでくれ。あと珠雫、オカマにそんな殺意の宿つた視線で見ないでやつてくれ。さすがに殺人はいけない。

「大丈夫よ珠雫。私は狙つたりしないから」

「いや、そもそもおかしいのは男が男を見る目じゃないところだよ。で、君は？」

思わず声が出てしまった。なぜ男に性的な目で見られなくてはならない。俺はノーマルである。男で興奮するなんてありえない。

「あらごめんなさい。私は有栖院風、アリスつて呼んでちょうだい。珠雫のルームメイトをやらせてもらっているわ」



「やっぱオカマの包容力は凄いな。人見知りな珠雫が一夜にして慣れているなんて……」

「あら、抱かれてみる？」

「ノーサンキュー」

オカマ怖いです。今まであまり登録されていなかった怖いものリストにオカマを登録するレベルであの性的な目が怖かった。

「珠雫、一応良いルームメイトでよかったね」

「はい」

珠雫は良い笑顔で言ってくれた。教室に着くまで色々話していたがオカマがどんどん苦手になっていく時間であった。

放課後になれば猛ダツシユで理事長室へと駆け込んだ。ただでさえ昨日のことを聞いてくるクラスメイトに邪魔されて休憩が休憩じゃなかったんだ。このままでは理事長室に辿り着くことができない。だから授業が終わるとともに教室を出た。授業が終わってすぐだったため他の生徒はほとんどいない。おかげで足止めされず理事長室に辿り着いた。

ノックをすれば入れと声があった。

「失礼します」

扉を開ければいつものように椅子に座り、碇司令を彷彿させる体制をとっている。きつとエヴァが好きに違いない。

「来たか。思ったより早いな。長話もお互いのためにならないから単刀直入に言う。エキシビジョンマッチをしてもraitai」

「エキシビジョンマッチ？」

「ああ。七星剣舞祭出場を懸けた選抜戦を行う前に、【七星剣王】の強さを見てもらおうと思つてな。新入生に戦いというものがどういうものか見せるのにちょうどいい」

なるほど。折角【七星剣王】である俺がいるのだから頂点の実力を見せてモチベーションを個々に高めてもらいたいのか。勿論バツチ

こいである。

「別にその程度なら良いですよ。それで相手は？」

「お前が決める。もちろん私でも構わない。選ばれば拒否権はない」

理事長でもいいとか凄いな。でも理事長に勝つちやえば生徒から不信感が出るかもしれないからやめておくけどね。そもそもいつまでに決めればいいんだ。もう来週からは選抜戦は始まる。初戦の直前だとしても長くて5日しかない。

「いつまでに決めればいいですか？」

「今、決めてもらいたい。もし生徒が選ばれるなら通知をしなければならぬからな」

「そうですか。僕としてはもう決まっていますよ」

心の中では決まってる。ずっと一度戦いたいと思っていた。憑依してからずっと、戦ってみたかったんだ。

「ほう。それ程戦ってみたいやつがいるのか」

当たり前だ。なんのために理事長を貴女にしたと思っている。彼と戦うためにはそれしかないからだ。主人公ってやつとずっと戦ってみたかった。

「黒鉄一輝。彼をエキシビジョンマッチの相手に指名します」

制圧しました。

エキシビジョンマッチの相手は一輝くんということで理事長も承諾してくれた。とても楽しみだ。この戦いで俺の強さを確認し、さらに上へ行く。本当は魔導騎士とかには興味はない。一輝くんの様に強くなる目的というのはまだ見つけていない。ただ、強くなりたいから特訓をする。そろそろ目的が欲しいものだ。例えば海賊王になるんだ！とか火影になるんだ！のような少年漫画のような熱い目的が欲しい。

考え事をしていればメールが来た。差出人は理事長からだ。内容は2日後の休日にエキシビジョンマッチ並びに選抜戦の準備をするから来いとの話だった。また仕事か。人使いの荒い人だ。はいわかりましたと返信する俺は社畜の鑑だな。休日出勤？残業？いつもの事ですから。返信したらすぐ着信があった。理事長からだと思っただが珠雫からだった。内容は2日後の休日にショッピングに行かないかとの事であった。……あと少し早く来ていれば理事長の方ではなくこちらへ行つたのに。不運である。

……というかこのショッピングって襲われるやつじゃなかったかな。最後桐原くんが人質の中に紛れ込んでいたやつ撃ち抜いたやつじゃなかったつけ。あれ、マズくね？これ俺行かなかったら面倒なことになるくね？

……午後には行けるようにしよう。そうすればタイミグよく現れることができるだろう。

メールが来てから2日後、つまり準備をする日になった。正直準備舐めてた。闘技場の整備はされていたが解説のための部屋へ色々持

ち込んだり、モニターに映す設定などをしなければならぬ。それを4つもだ。先生もやつてくれていても時間がかかりすぎる。絶対にこのままじゃ午後間に合わない。本当はあまりやりたくないが心優しいクラスメイト達を使うか。

スマホを取り出しクラスのライティンググループにヘルプを求めた。すぐに既読が20ついた。こいつら暇人かよとは思うが暇で助かった。

『桐原には色々助けてもらったからいいぜ!』  
『任せろ』

『どこから取り掛かれればいい』  
『桐原さんのためなら何でもするっス』

『彼女とデート中だからいけません。申し訳ない』

『ああ? 桐原さんと彼女どっちが大事なんだよ?』

『おい、その究極の二択はやめてくれ!』

『俺達が行けば1人くらいは大丈夫だろ。彼女を大事にしろよ』

『くっさ』

『くっさ』

『くっさ』

『やめてやれよ……とにかく俺ら今から行くんで待っててください』

こいつら良いやつじゃん。これでクラスメイトの数人来てくれるだろう。午後までに帰れそうだ。帰れなくても俺だけステルスして行こう。

作業を続けていると俺のいる第4闘技場に人が集まった。俺の予想を超えて25人来てくれた。クラスラインは未だに既読22なのだが後の3人は一体何なんだ…。

『みんな来てくれてありがとう。これで早く終われるよ』

『野暮ったいですよ。俺ら桐原さんにお世話になってるんで当たり前です』

今更だけど何なんだこの俺に対しての忠誠心。カリスMA目指せるんじゃないか? 聖杯戦争に参戦できるんじゃないか? アーチャー枠だな。間違いない。宝具は【朧月】になるだろうけどランク低そう。

「じゃあ半分は第3闘技場に資材室に用意されてる物を運んで、残りはこちらに運んでくれ。僕はモニター設定するから」

「野郎共行くぞ！」

1人の掛け声で半々に分かれて出て行った。こいつ、俺よりカリスマ大きくなりそう。というか微妙に女子がいなくて傷ついた。女子は俺を助けてくれないらしい。これで絶対に午後には終わるだろう。

午後になった。今俺は例のショッピングモールのあるデパートの前にいる。クラスメイト達の異常な士気のおかげでスムーズに終わり、理事長に報告して先生方と一緒に解散した。クラスメイト達には一人一人礼を言った。その度に涙を流す者もいたのだがホモの波動を感じた。

兎に角デパートの前に来たのは良いが既に事件は起きていた。入り口に立っている銃を携帯する2人の男。面倒なのでステルス使って横を堂々と通りました。

通路を歩いていると着信が来た。辺りに人がいないことを確認して電話に出た。

『桐原、今何をしている？』

理事長からである。このタイミングで電話してくるといふことはこの事件に関係しているだろう。

「仮面ライダーの面をしてショッピングです」

『なるほど。お前は犯罪者グループが来ることを知っていたのだな』

「そりゃあもう。仮面ランナーには独自の情報網がありますからね」

嘘だ。全くない。ただの原作知識です。だが、かの高名な仮面ランナーであればあると言われても不思議ではない。理事長もそう思うだろう。

『なら桐原の学外での固有霊装の使用を許可す…「別にいらぬですよ。刃物は持ってきてるんで」なんだと？』

「仮面ランナーは単純に手持ちのナイフで制圧してるんです。それを変えようとは思いません」

『そうか。それでも一応許可しておく。人質もいるらしいから気をつけろ』

「誰に言ってるんですか。僕の実力なら伐刀者を含んでいても余裕です」

『それを聞いて安心した。切るぞ』

そう言っただけで切れた。理事長は俺を便利屋か何かと勘違いしてるんじゃないですかね？これ俺がここにいてなかったら保険としてとか言っただけでここに来させたでしょ。本当に人使いの荒い人だ。

「誰だ！」

ステルス解いていたから見つかったしまった。それでも問題ない。ただ相手を消すだけだ。

「か、仮面ランナーだ?!」

振り替えると驚かれた。ま、犯罪者にとって仮面ランナーってのは厄介な相手だろうけどね。

銃を持っているの先に無線機で報告しようとしたので瞬時に距離を詰め腹筋に拳を叩き込んだ。叩き込まれた犯罪者は手に持った無線を床に落として吹っ飛んだ。手応えはあったので意識は刈り取っただろう。

そこから犯罪者を素手で気絶させながらようやく広場に着いた。そこには一箇所にまとめられた人質と銃を持つ頭の悪そうな顔をした犯罪者。そしてすでに固有霊装を出しているステラさんがいた。まだ敵に伐刀者はいないみたいだ。

「銃を下せ！」

声と共にやってきたフードを被った男。確実に主犯格である。というかうろ覚えだがこいつが伐刀者じゃなかったっけ？

「これはこれは、ヴァーミリオン皇国第二皇女のステラ様！」

能力はたしか吸収して放出みたいな感じの能力だった気がする。多分あってるはず。記憶力にはそこまで自信ないから心配である。

「人質には手を出さなって言っただよな！」

「でも…あのガキが俺にアイスを……」

おい犯罪者。そこは俺の服がアイスを食っちゃったようだとか

言って金を渡してやれよ。器が小さいんだよカス。スモーカーさん見習え。

「…羨のなつてねえガキつてのは、つまるところ親の責任だよなあ。罪には罰を。罰には許しを。それが俺のモットーでしてねえ」

罪人が何言つてんだよ。というかそろそろ制圧しようか。見たところ8人だけだしすぐ片付けられる。たしかステラさんが飛ばされるから飛ばされた後に4人削つて出て行こう。ステラさん、俺のために犠牲となつてくれ。……つてあれ？全裸土下座要求するんじゃないで良かったっけ？どうしょ。生で下着まで見れるんならまだ行動しないで良いかな。しかし、もたもたしてるとまた見つかるし……。

俺の中の性欲という化物が理性を冒していく。が、俺は負けない！今時女性の全裸なんてググれば1発で出るし美少女もググれば出てくる。なんてことはない。今見なくても後悔しない。後悔しないんだ！

自分の中の性欲と戦っているとステラさんがリーダー格に飛びついて飛ばされた。それと同時に闇に紛れて中心から離れている4人を片付ける。脳を揺らして気絶させるだけだ。一般のテロリスト相手なんてナイフすらいらぬのだ。

「これが俺のデバイス、ジャッジメントリングでさあ。その特性は罪と罰…。左は俺に対するあらゆる危害を罪として吸収し、右はその力を罰として相手に放出する」

長い能力の説明は……。4人やられても気づかず説明するとか負けフラグ建築士の鑑ですわあ。

「罪と罰っていう割にはガバガバな能力じゃないか」

リーダー格の取り巻きを始末すると同時に現れる。残るはリーダー格とザコ2人。余裕な仕事だ。

「お、お、お、お前は仮面ランナー!?!」

ザコが大袈裟に叫んだ。一々大袈裟なんだよ。仮面ライダーの仮面被ったただの模倣犯かもしれないだろ。模倣犯ではないのだけども。

「へ解放軍へだな」

「さすがは仮面ランナー。我々のこともお見通しというわけですか。私は〈解放軍〉のビショウです」

「いや、知らないからカマかけた。やはりそうなのか。一応、投降した方が命の危険がなくて済む」

「…貴方の頭はおめでたいですねえ。こちらには人質がこれだけいるんですよ。どれだけ貴方が強かろうと、数でもこちらが有利です」

余裕そうにするこの男が全く気に入らない。別にこいつ死んでも良いやつだよな？殺しちやつて良いかな。

人質の方に目を向けると珠雫が集中しているのがわかる。人質を守る技の発動まで1分というところか。1分もかける気はないけどね。

「1つ聞いても良いですかね。仮面ランナーは『七星剣王』の桐原静矢じゃないかという推測が軍の中で有力なのですが、どうなんですかね？」

ご本人です。何が原因で推測されたのかは知らないけどあれだけ暴れば特定もできるだろう。俺の戦闘データなんて軍にもあるだろう。しかし優秀な管理者がいるのか、特定が意外と早かったな。まだ3年はバレないと思ってた。

ビショウへの返答はナイフを取り出すことで違うというアピールをしておく。そして銃をこちらに向けるザコ2人を斬った。3人も俺から意識を外すタイミングが同じだったからつい抜き足を使ってしまった。

「う、腕ガアアアア」

「アアアアアアアア」

片方は両腕を斬り落とし、片方は足一本と銃を持つ腕一本を斬り落とした。地に落ちた銃は端へと蹴り飛ばし、その後ザコ2人も蹴り飛ばした。これで残りはビショウのみである。

「い、今何をした？」

「ただ斬っただけだよ三下。折角の固有霊装も見えなかったら意味ないでしょ。だってその固有霊装はダメージを吸収して放出する固有霊装なんだから吸収できなければ意味がない」



「なぜ私の固有霊装を……」

「先程の攻防見てたら誰でもわかるよ。さて、長話もここで終わりにしよう。上にいる2人もこちらに降りてくるみたいだしね」

そう言つて上の方にいる一輝さんとオカマを見る気付いていたことに2人は驚き、降りる。これも原作知識があるからできることだ。正直あんなに離れていたら気配なんて感じない。

「よし、ではビショウ君。君に3つの選択肢をあげよう。まず1つは人質に紛れている名誉市民も含めて全員自首する。2つ目は君だけ逃げる。3つ目は全員死ぬ。もしくは死んだ方がマシなくらい重症を負う。さ、どれがいい？僕としては1番を選んでほしいな」

「選択肢？そんなもの……4のお前が死ぬだあ」

この広場の隅の方から俺に向かって銃を撃ってくる。弾幕の量からして2人しかいないだろう。その弾幕に対しては全て走ること避ける。自分で言うのは恥ずかしいが俺の速度は速い。速さが足りない！とは絶対に言われなくらいに速い。俺の速さにまたビショウは驚愕する。あつという間に弾幕を開いてる2人に近づき、腕とおさらばさせる。汚い悲鳴が聞こえるがなんの感情も湧いてこなかった。

「死ねえ！」

背後からビショウが殴りかかってきた。だが、腕を切り落とすことで回避。腕が無くなることでビショウはたおれた。さらに目をナイフで抉る。

「お前、もういいよ。早く気絶した方が身のためだよ」

目を抉られているビショウは悲鳴とともに力なく腕を上げて俺の被る仮面ライダーのお面を剥いだ。別に隠しているわけではないので剥がされてもいい。

「お前は化物だ……」

ウザいからもう片方の目もナイフで抉った。

悲鳴が汚い。見るに堪えないのでナイフで首元を掻っ切るために首へ近づける。だが、途中で止められた。

「桐原君、それをやったら戻れなくなるよ」

一輝くんに止められてしまった。よくよく考えれば今俺は人を殺そうとしていたのかもしれない。別にそこまで恨んでるわけでも殺意があるわけでもないのに殺そうとしたのか。どうやら俺は正常ではなかったらしい。

「やだなあ黒鉄くん。冗談だよ冗談。殺そうとしたおかげでこの人気絶しただろ。脅しただけだよ。本気にしたかい？」

いつもの上辺だけの笑いを浮かべながら一輝くんの方を向く。その時に見た一輝くんの表情はなんとも言えない。一生忘れないだろう。本当に微妙な表情だった。

「さて、人質に紛れた名誉市民をサクツと片付けて今回の事件は終わりだ。というわけでその女の人。銃に手を伸ばそうとせず投降してね。君が銃を撃つより僕が【朧月】を出して撃つ方が早いから抵抗は無駄だ」

「うるさいー！うぐく…」「射ぬけ【朧月】があー！」

人質を盾に助かろうとしたのだろう。忠告は無意味に終わってしまった。幻想形態で展開した【朧月】の1撃が名誉市民の女性に当たり、倒れた。

「黒鉄くん。後始末は君に任せるよ。正式に理事長に頼まれたのは君だ。僕は休憩してるから頼んだよ」

人質の中にいる珠雫にバイバイと手を振って現場から離脱する。

今回の事件で何か人として大切なものが欠如していることに気づいた。前世も合わせれば40歳位になるが精神が成熟を通り越してサイコパスになったようだ。全く笑えない。自覚あるだけまだマシンだとは思うが流石に人を殺すのに躊躇いがないのはダメだ。今度からは少し躊躇うように努力する。だが簡単に殺されるようなヤツも悪いと思う。殺されたくないなら強くなれよと思う。俺は少しだけしか悪くない（確信）

「桐原くん、さつきはありがとう。あのままならきつとステラは……」

ベンチで座って考えていると一輝くんが来た。少し離れた場所にステラさんと珠雫とオカマがいる。わざわざ礼を言いに来るのは本

当にマメである。一輝くんの良い所だ。

「弱き者に手を差し伸べないと……とかは言わない。ただ、僕としてはもつと早く黒鉄くんに登場してもらって制圧してほしかった。君にならできただろう?」

「……それはどうかわからない。確かにあの伐刀者には勝てたかもしれないけど僕じゃ人質に紛れていたとは思わなかった」

「そこは経験の違いさ。そういうえば生徒手帳は見てくれたかい?」

「生徒手帳?」

一輝くんは自分の生徒手帳を出した。そして画面を見る。

「君には僕とエキシビジョンマッチとして戦ってもらおうよ。残念ながら拒否権はない」

「……なぜ僕を選んだか聞いても?」

「落第したからとかではないよ。単純に一度戦いたかったからかな」

「僕も…僕も桐原君とは戦ってみたかった。楽しみにしているよ」

「ああ、じゃあ気をつけて帰ってね。珠雫にもよろしく」

「わかった。じゃあ次は闘技場で」

一輝くんが珠雫たちを連れて離れていく。珠雫はこちらに来たそうにしていたが俺も1人で考えたいから首を振って来ないようにしておいた。

俺の一人反省会は夜まで続いたのであった。

【落第騎士】と戦いました。

観客席にはほぼ全校生徒が自主的に集まり席を埋め、立って見る人も現れるくらいに集まっていた。闘技場の中心にまだ誰もいないが、いずれメインとなる者達が現れる。何があると言われればそれはエキシビジョンマッチ。【七星剣王】が行うものである。それだけで興味が唆られる。さらにその相手はAランク騎士ステラ・ヴァーミリオンに土をかけたFランク騎士。誰もが見せしめであろうと思った。圧倒的な力を見せてくれる気持ちの良い試合になるのだろうかと思った。会場の九割九分九厘がそう思っているだろう。

「シズクとアリスも来たのね……」

「お兄様と静矢さんの試合となれば見るのは当たり前です」

「私も個人的に【七星剣王】の実力が気になっちゃってね。ここにいる人は皆そうだと思うわ」

「シズクはどちらが勝つと思ってるの？」

「……ステラさん。この試合で聞く言葉間違っていますか？お兄様には悪いと思いますが、聞くのはお兄様が静矢さん相手に何分持つか……です」

「!? 一輝にだって勝つチャンスは……」

「自分に勝ったお兄様を評価するのはわかります。私も静矢さんのためにもお兄様に勝ってもらいたいと思っています。ですが静矢さんの負ける姿が想像つかないのです」

悲しそうな顔をする珠雫を見てステラは悟る。本当に一輝に勝つチャンスはないのだろうかと考える。

「剣でなら一輝に分があるんじゃない？」

「はつきり言っただけ今の静矢さん相手に剣で戦うのは勝てません」

「モールで一瞬だけ見たけど確かにあれには勝てなさそうね。あれで本気を出してなければ正真正銘の化物ね」

「ならどうして桐原先輩は一輝をエキシビジョンマッチの相手に選んだというの？」

「多分静矢さんは初めからお兄様と戦って見たかったのでしよう。あ

の人はあれで戦闘狂なところがありますから。お兄様の剣を認めているからこそ選ばれたのかと思います」

「ねえ、珠雫は一輝が何分で負けると思ってるの?」

「1分ちよつとです。お兄様の一刀修羅が切れると同時に終わると思います」

「それは一刀修羅の状態なら互角に戦えるということ?」

「……おそらく、ギリギリ互角になれるかどうかだと思います」

「一体どれだけ強いというのよ桐原先輩は……」

「理事長にすらハンデなしで勝ってるみたいですからもう魔導騎士として完成されていると思いますよ」

3人が話していると他の観客が騒ぎ出した。闘技場の中心の舞台に2人が入場してきたのだ。

「逃げずに来てくれてよかったよ黒鉄君」

「こんなチャンス自分から逃すわけがないよ」

「それならいいよ。観客がこんなに集まってるんだ。あまりはやく倒れないでくれよ」

「桐原君には悪いけど勝たせてもらうよ」

2人の話し合いは観客には聞こえない。だがそこに不正が働いていないことだけ把握したため気にならない。

『1年生にして【七星剣王】にまで上り詰めた天才桐原静矢選手のエキシビジョンマッチ。対する相手はまさかの落第生である黒鉄一輝選手!解説には西京先生に来てもらっています。どちらが勝つと思われませんか?』

『しずやん鬼強いからなー。しずやんじゃね?』

『やはり黒鉄選手には勝ち目がないというわけですか?』

『いんや、勝てる可能性は0.3%くらいかね。普通にやったら勝てない』

『では特殊な方法であれば勝てるというわけですか?』

『わかんね』

適当な解説をする西京先生。だがわからないのも仕方ないことだ。1年間同じクラスにいたのだからある程度の情報はある。さらに公

式戦のデータがかなり残っているのだ。対策しようと思えばいくらでもできる。

「来てくれ【陰鉄】」

「【朧月】」

『さあ、両者位置につき、固有霊装を出しました。間もなく始まります……』

l i l l e t , s g o a h e a d

2人の戦いが始まった。

「【一刀しゆ…】」

一刀修羅を使おうとした一輝は息を飲んだ。ありえない。そう、開幕で速攻を仕掛けるのはありえないと思っていたのだ。

だが、既に静矢は目の前に移動しており、拳を放っていた。

驚きと緊張で一輝は避けることができず一撃を鳩尾に叩き込まれ、飛ばされる。

「試合は始まってるんだ。悠長に待つわけがないだろう」

会場もいきなりのこと静まり返っていたが静矢の言葉で歓声が生まれる。

場外ギリギリまで飛ばされた一輝は立ち上がる。

「【一刀修羅】！」

自身の身体能力を上げる。だが一輝自身これで勝てるかどうか危ういと感じていた。先程の鳩尾のダメージは深かったのだ。

「桐原君が中国の拳法を使うとは思わなかったよ」

静矢の背後へ瞬時に移動して斬りつける。だがその一振りを手を掴まれることで防がれる。単純に強い。一輝はそう感じた。少し前に戦ったステラとは比べ物にならない程強いと感じてしまった。

「黒鉄君。初めての公式戦で緊張するのは分かるけどこれは公式戦のじやなくエキシビジョンマッチなんだ。そんな緊張せずかかってきてよ。そうでなければ君を選んだ意味がない！」

腕をつかんだまま蹴りを横腹へと叩き込み再び一輝は飛ばされる。一方的な光景に観客は再び静まり返った。

飛ばされた一輝は静矢にダメ出しをされた自分を反省し、立ち上が

る。そして自分の頬を殴る。

目が変わった。頭の中を切り替えたのだ。それを確認した静矢は好戦的な笑みを浮かべ、「朧月」の能力の副産物である木刀を取り出す。

「此処からが本当の勝負だ！」

一輝が先程と同じように背後に回り斬りつける。今度は木刀で受け止めようと刀の軌道に合わせるが途中で軌道が切り替わる。変則的な剣戟に即座に対応し、一撃を防ぐ。この一撃で先程とは一味違うことを認識し、反撃に一撃繰り出す。刀で受けられ、一撃を繰り出される。それを再び木刀で防御する。

時間にして3秒。その間に起きたことである。闘技場で繰り広げられた攻防に観客は息を飲む。予想していた【七星剣王】の圧勝とは違い同等の実力に見えるからだ。

だが、そう見えない者も一部いる。そのほとんどは実力者である。実力者の見解は拮抗ではなく、一方的である。

『信じられません！私の目には【七星剣王】と【落第騎士】が拮抗しているように見えます！』

『いんや、全く拮抗してないよ。正直こんな技術トッププロですらできるかどうかわからない』

『それは黒鉄選手のことでしょうか？』

『しずやんだよ。完全に黒坊の動きを誘導してる。パターンから抜け出そうと黒坊は本来の動きから離れないギリギリで頑張ってるけど、これは無理かね。まるで鳥籠に閉じ込められた鳥を見る気分だね』  
『桐原選手が黒鉄選手の動きを操作してるという、いったいどうやってですか？』

『さっきからしずやんの防御パターンがほぼ同じになってるのに気づけば分かる。ほら、黒坊は色んな攻撃の仕方をしてるけど全て弾き返され、しずやんはギリギリ防げる場所に攻撃することで黒坊を消耗させてる』

『その結果が動きを操作しているというわけですか』

『そういうこと』

(どうにか桐原君から優位を取らないとやられる)

前にステラ相手に剣技模倣をし、その結果太刀筋が乱れ一撃を入れることができた。これはそれと同じなのだ。相手が本来の動きと違う動きをすれば容赦なく潰しに来る。鳥籠から出ても再び捕らえられるか殺されるか。2つに1つだ。

(これを破るには2つある。1つは桐原君の反応速度を超えて一撃を与える。2つは決死の覚悟で一撃を受ける)

一輝の思考はすでにこの2つに絞られていた。だが初めの一撃が祟り、1つ目の案は確実に行えない。そもそも、万全の状態でもできるか危うい。詰まる所1つだけなのだ。

「今、一撃喰らおうと思わなかったかい？」

「っ!？」

凶星だ。思考を読まれたことに冷や汗をかく。これも操作されているのかと焦る。

「いや、それはこの技から出るには打って付けの案だ。その対応は考えていないからね」

静矢の言葉に成る程と納得する。もし、ダメージを受ければ確実に決定打を奪われることになる。それは敗北を意味することである。

既に30秒間も斬り合いを続けられている。見てる側には一瞬だが攻防を繰り返している2人にとってはとてつもなく長い。そして【一刀修羅】の効果時間から考えて一輝に焦りが見え始めた。

「焦れば焦るほど抜け出せないよ？ほら、今こそ限界を超える時だよ黒鉄君。まだ出せる物があるはずだ」

一輝は考えた。どうすればこの技から抜けられるか。どうすれば勝てるか。そして答を導き出した。

まだ出せるものはある。何を1分で全魔力を使うという悠長な真似をしている。そんなもの桐原君相手に意味ないだろ。残り30秒。そんなもの5秒：いや、3秒でいい。体が付いてこない？無理やり引っ張ればいい。

「いくよ桐原君。僕の最弱を以て、君の最強を打ち破る！」

それは【一刀修羅】を超えた【一刀修羅】。名付けるならば【一刀夜



又」。本来ならこのような物語序盤で出る技ではない【一刀羅刹】の応用である。だが出した。それはつまり自身の限界を破ったということである。

先程までとは比べものにならない速度で木刀を持つ左腕を切り落とした。そして次は右腕を切り落とそうとすると顔面に裏拳が入る。いや、これは裏拳とは呼べないだろう。なぜなら切り落とした左腕を右手で掴み振り回したのだから。

常人なら思いつかない手段で、思いついても実践しない手段で攻撃した静矢に一輝は少し戸惑う。だが残り2秒しかないと考え、再び突撃する。だが：

次に見た光景は天井だった。何をされたかわからない。置かれてあるモニターも目に入る。なぜ自分が倒れているのか理解できていない。

まだ魔力も一秒分ギリギリ残っている。なのになぜ……。

その答えは立ち上がりとしたことで分かる。

両足がない。なぜこんなことになった。体が付いてこなかったのか？……違う。断面は綺麗な切断面だ。それはつまり——桐原君が斬った？

「いや、僕の技……名付けるなら【鳥籠】から抜け出し、あまつさえ左腕も奪うとは見事だった。でも、それじゃあ僕には届かない」

一輝が最後に聞いたのはそんな言葉だった。

『試合終了!!勝ったのは【七星剣王】桐原静矢選手！強い！強すぎる!!両足を斬った時なんて私には全く見えなかったです！』

『しずやんは予想をはるかに超えて強かった。それは黒坊も同じ。予想をはるかに上回っていた。特に【鳥籠】を抜ける時の動きは此れ迄とは違う。でも、最後のしずやんの一撃は避けるのほぼ不可能だったよ』

『それはどうしてですか？』

『あまり言いたくないけど私にも見えなかった。【狩人の森】を使って見えなかったのか速すぎて見えなかったのかはわからないけどね。しずやんの底がまた見えなくなった』

中心で左腕を拾う静矢を楽しそうな目で見る。そして担架で運ばれていく一輝にも目をやる。

『2人ともこれでまだ成長するんだから恐ろしい』

最後に本音を漏らして解説が終了した。観客達も試合のレベルの高さに静まり返っている。一輝を、【落第騎士】が自分達より強いと認識してしまったのだ。どれだけ努力しなければあの高みにいけるのか検討がつかない。そう感じていた。

それはステラ達も同じだった。一輝の【一刀羅刹】それだけでも凄いと感じたのにさらにそれを上回る不可視の斬撃。これが【七星剣王】なのかと思ひ知らされた。

「静矢さん。去年の七星剣武祭の時より格段に強いです。あれでまだ【狩人の森】を使っていないとなればまさにチートですね」

「何よあれ。一輝をコントロールしてやつと抜け出したと思えばあんな一撃。どれだけ研鑽すればあそこまでなれるのよ」

「彼、学生から逸脱してるわね。強すぎるわ」

「仮面ランナーとしての活動が実戦経験を産み、成長させたのだろうな。どうだヴァーミリオン。日本に来ることで大きな目標ができたんじゃないか？」

「一輝を超えることを目標にしましたがけど、私はさらにその上、桐原先輩を超えることを目標に頑張っていきます。本当に日本に来て良かったと思いますよ」

いつの間にか現れた理事長に全く驚きもせず答える。ステラのその目は熱く燃えていた。

解説しました。

「ここは……」

一輝が目を開けるとそこはあまり見慣れていない天井。すぐそばのカーテンで病室であることが分かった。そしてどうしてここにいるのかを考え、思い出した。

「そうか…僕は負けたのか………」

負けた。これがもし選抜戦であつたならチャンスを逃すことになつていた。エキシビジョンで良かったと心から思うと同時に勝てない悔しきからか涙が出てきた。

「僕と桐原君にはあそこまで差があつたのか」

悔しい。負けたのが悔しい。努力が実らなくて悔しい。差がありすぎて悔しい。勝てるビジョンが思い浮かばないのが悔しい。

思い返せば終始静矢のペースで試合が行われていた。何がいけないかと言えば沢山ある。その中で最も痛手であつたのは初手の不意打ち。「二刀修羅」を使う前に受けた八極拳と呼ばれる中国の拳法を用いた一撃に全てを持って行かれた。その一撃が【鳥籠】への切符。その後の一輝は酷い有様だった。初めから掌の上で転がされていたのだ。

「自覚するとかかなりキツイな。でも、次は負けない。負けられない」

圧倒的な実力を見せられても尚、目に闘志が宿る。それは魔導騎士となり、父に認めてもらうためだ。そのための努力は決して惜しまない。

最初に考えたのは最後の「一撃」。「二刀夜叉」によって強化されていても見えなかったあの「一撃」がなんだったのかだ。ただ単純に振るのが速すぎて見えなかったという答えはありえる。だが【狩人の森】を使った不可視の斬撃だとすればしっくりくるのだ。それでも剣の速さは一輝より上なのは確かだ。あの時の一輝は観客も一部の実力者しか視認できていなかっただろう。そのような速度で移動している一輝を相手にそれを超える速度で剣を振っているのだ。【狩人の森】を使っていなければギリギリ見えただろうが回避をできたかと問わ

れば頭を横に振る。あの状態で見えていても回避は難しかった。回避したとしても態勢は崩れ、トドメを刺されていただろう。どちらにせよ積みだったのだ。

次に、「一刀夜叉」を初めから使えていれば勝機はあっただろうかと考え始める。静矢との試合の途中で導き出した新たな力。それが初めから使えたとしたら勝てただろうか。その答えは否。勝てないだろう。左腕を切り落とせたのは虚をつくことができたからだ。初めから使えても虚をつけなく、腕を奪うことができたかすら怪しい。

次に考えるのは次に戦った時の対策だ。打倒桐原静矢をするのにどうすればいいか。

この答えは全く出ない。考えられるすべての剣技を持ってしても勝てるビジョンが全く湧かないのだ。剣だけでもあれだけの腕であるのに本来の武器は弓だ。次に戦えば確実に剣ではなく弓を使うだろう。いや、どちらも使う可能性も高い。考えるだけで頭が痛くなるほどの手数多さに悩んでしまう。

「起きていたか黒鉄」

一輝が思考に耽っていると部屋に理事長が入ってくる。入ってきたまず足の部分を見、大丈夫そうだと判断したのか安堵の表情を作った。

「はい。おかげさまで足も正常です」

「それは良かった。……ボコボコにやられたな」

「そうですね。僕はどこか剣技であれば桐原君に勝てるかもしれないと思っていたのですが、結果勝てませんでした」

「次は勝てそうか？」

「……………次は勝ちます。そうしないと卒業できませんから」

「そう言うと思ったよ。そう言えば知ってるか黒鉄。桐原のやつはずっとお前に期待していたぞ」

「桐原君が？」

疑問符が付くのは仕方のないことだ。今まで接触といえば言うのが嫌そうに嫌味を言ったりすることだけだった。努力してる姿も見られていなかったと思う。それなのになぜ？と疑問に思うのだ。

「そうだ。なぜかは知らないがお前が相当な剣客であることを見抜いていたみたいだぞ」

「対策されてたんですかね……」

「初めの一撃は『一刀修羅』への対策だろうな。最初に使ってくることを読んでいた……いや、最初に使うしか選択がないことを読んでいたのだろう」

「敵わないな。『七星剣王』はそこまで強いのか」

「そうだな。私も今のあいつと絶対に戦いたくないと思う。だが黒鉄はあの試合で何か掴んだんじゃないのか？」

「はい。今までの自分の限界を超えることができました。まだまだ強くなれると感じれました」

「そうか。それなら大丈夫そうだな」

「ありがとうございます。わざわざ話に来てくれて」

「それじゃあ私は行く」

部屋から出て行こうと扉に手をかけた時に少し止まる。

「忘れていた。桐原から伝言だ。『次やるときまでもっと強くなれ』と言っていた。あいつなりの鼓舞なんだろうな。じゃあな」

そう言っただけで理事長は部屋から去っていく。静矢からの伝言を聞き、一輝は今すぐ修練したい衝動に駆られるが理性でそれを押さえつけ、からだの調子を戻すことを優先させる。その間はずっとイメージトレーニングだ。

一輝が目を覚ました頃、静矢は解説席に座っていた。

エキシビジョンマッチの後に普通の選抜戦が行われ、その解説役が回ってきたのだ。本来回ってくる事などなかったはずだが西京先生が逃げたこともあり、頼まれたのだ。まだ左腕が完全には付いていないにも関わらずそれを承諾し、今に至った。

現在試合しているのはステラと桃谷という男だ。桃谷の固有霊装は全身を覆う鎧であり、ステラとの相性は悪い。そのこともあり、桃

谷は動けない。

『なぜ動かないのでしょうか?』

『ステラさんと桃谷さんの相性は桃谷さんの方が若干不利ですからね。あとは実戦形式という事もあって死ぬ事もある。だから動けないのでしょうか。防御力が高い桃谷さんでも炎は防げません。下手に動けば熱が内部に渡り、ファラリスの雄牛を味わう最悪の事態になりますね』

当たり前感なく解説する静矢。その解説にだから桃谷は動けないのかと納得する観客。この場にいる誰もが桃谷の負けだろうと予想した。そしてその結果は

「俺の負けだ……」

桃谷の降参で終わった。

『勝者、ステラ・ヴァーミリオン!』

『桃谷さんには悪いですが流石に勝てませんね。勝ち筋といえば決死の特攻くらいでしょうが、消し炭になるかもしれないですからね。負ける可能性が高かろうとこの試合に出て、勝つ方法を模索した桃谷さんには尊敬しますよ』

降参に対して批判が行かぬようフォローをする静矢。後で自分で言った事を復唱されれば顔を赤くする事は確実だろう。

『次の試合は10分後に黒鉄一輝選手の妹の黒鉄珠雫対3年の垣下選手ですね。西京先生が帰ってこなければ次も解説お願いしてもよろしいでしょうか?』

『はい。もちろんいいですよ。ところでいつマイクオフにするんですか?』

『あ!忘れてました!もうオフになっているとばかり!』

『うん。その声を出す前にマイクオフにしようね』

『すいませ…』

2人のやりとりに会場が和み、実況は顔を赤くする。解説の静矢も苦笑いだ。この後試合が始まるまですいませんと謝り倒され、いいよいいよと許し続けることになった。

『では本日最後の試合、黒鉄選手と垣下選手の試合が始まります。どちらが勝つと思います？』

『そうですね。1年生と3年生ですから経験が違います。垣下さんの破壊力は凄まじいですが、公式戦に出ているのでデータはあります。だから攻略法を考える事もできます。その反面データの無い黒鉄さんの対策を練る事はできません。黒鉄さんが勝てる可能性は十分あるのではないのでしょうか』

『なるほど！対策していれば勝てるかもしれないですね！両者固有霊装を出し、万全の状態です』

l i l l e t , s g o a h e a d

垣下と珠雫の試合が始まった。垣下の固有霊装は大剣であり、珠雫の固有霊装は短刀。見た目では明らかに珠雫が不利に見える。

だが、この勝負は一瞬で決まることになる。

大剣を大きく振って珠雫に攻撃する垣下。それを短刀で軌道を変えてギリギリでかわし、顔に手を向ける。

「水牢弾」

水の玉が垣下の顔面に当たる。そして、張り付いた。

これには会場内も驚く。垣下もどうか水が顔から取ろうともがくが無意味であり、やがて息が続かなくなる。そしてもがけなくなり、倒れた。

『勝者、黒鉄珠雫！』

『これは可哀想ですね。水を貼り付けて相手を窒息させるなんて魔力操作が相当うまいのでしょう。垣下さんも水をはがそうとせず、息が続く限り黒鉄さんを狙っていたら勝機はあったのですが残念です』

『そうですか。それではこれで終わりたいと思います。ありがとうございます』

『ありがとうございます』

試合が終わり、解説から解放される。実況をしていた生徒に感謝された後、珠雫にメールでおめでとうと送りながら左腕を本格的にくっ付けるため i p s 再生槽へと向かった。

観戦しました。

「降参します!」

『勝者、桐原静矢!』

また、戦わずして勝ってしまった。この人達は当たって砕けるとい  
う気持ちはないのだろうか。きつとないのだろうか。誰だつて死ぬの  
は嫌だ。一輝くんのように両足を切られたりしたくないのだろうか。

『三連続降参勝ちです!やはり桐原選手には誰も勝てないのか!』

『可能性あるやつもいるけど大半は無理だろうね』

西京先生は相変わらず本音しか言わない。少しは俺を見習つて負  
けた相手への配慮とかもしてあげて欲しい。

「すまない桐原。どうしても勝てる自分の姿が見えなかった」

「いや、構いませんよ先輩。ギリギリまで模索したんですからナイス  
フアイトですよ」

本当は当たつてきてほしかったが出てきてくれただけマシだろう。  
相手の棄権で勝つなんて虚しいから。

「そうか。そう言ってもらえれば俺も報われる」

当たつてきてほしいと言ったが結局、先輩のハンマーでは機動力の  
ある俺に当てることは叶わないだけだね。そんな余計なことは頭  
で考えはするが口には出さない。なぜなら大人だからだ。

「お疲れ様でした」

そう言つて会場から離れる。今からならギリギリ第二闘技場で行  
われる珠雫の試合を見ることができよう。今までずっと相手を  
窒息させて勝ち進んでいるから今回も窒息させるのか気になるここ  
ろである。そろそろ「水牢弾」も対策させている頃だろう。

そう思つて会場に着いたのだがそうでもなかった。避けても避け  
ても出される「水牢弾」に追い詰められ、最後には当たる。相手が魔  
術戦をそれなりにできていれば「水牢弾」を壊すこともできるのだが  
練度の低い一年生には無理だろう。

もし俺が珠雫と戦うなら、真つ先に縮地で距離を詰めるか「狩人の  
森」で姿を消して攻撃するかの2つだ。水が張り付くという性質は非



常に厄介であるが水自体は脆い。出されても俺の剣撃でなら壊すことも容易いだろう。

「見てくださったんですね静矢さん」

試合が終わった後珠雫が観客席にまで来た。試合終わって10分くらいだが早すぎるだろ。

「珠雫の試合だからね。当たり前だよ」

「静矢さんはまた降参で勝ったのですか？」

「残念ながらそうだよ。中々戦ってくれる人がいないね。東堂先輩とマッチングしないかな」

「【雷切】ですか……」

「珠雫も僕と当たったら戦ってくれるだろう？」

「当たり前です！昔と違って成長したということを思い知らせます」

「それは楽しみだ。珠雫は強くなったからね。俺もとても嬉しいよ」

頭を撫でてやると嬉しそうにしてくれる。そこは昔と変わらない。本当に可愛い。彼女というより妹って感じだな。

「静矢さん。私、負けません」

意思のこもった声だったが誰に負けないのだろう。代表戦で勝ち残るといふことかな。それとも俺？ま、どちらにしろ

「うん。期待しているよ」

珠雫には期待をする。強くなる素質はあるのだ。サムライリョーマの血を引いてるといふだけで素質はある。王馬くんも素質あるし一輝くんも素質ある。だから2人は強い。珠雫にもあるに決まっている。もつと強くなるに決まっている。というか原作的には強くなる。

ここで原作と違うところを少し発表しようと思う。俺が原作開始前から介入したおかげで珠雫は魔術戦だけでなく剣も上手い。原作から飛び出ないだろうと判断して俺が教えた。一輝くんには届かないだろうが剣技だけならステラさんに完封できると思う。といっても伐刀絶技を使われたらどうなるかわからない。

原作通りいっていたら珠雫は東堂先輩と当たっていたが俺と一輝くんが選抜戦で当たっていない時点で離れている。東堂先輩と今の珠雫が戦うところを見てみたかった。

「どうかしましたか？」

黙々と考えていたら不思議そうな顔で聞いてきた。

「ああ、珠雫と東堂先輩が当たったら面白い試合になりそうだなって思っただけだよ」

「もしそうなたらどちらが勝つと思うんですか？」

「珠雫がまだ力を温存してるからわからないな。どちらが勝つてもおかしくないと思うよ。ただ、一度でもクロスレンジに入れば珠雫が負けるということは確かだよ」

俺ですらクロスレンジでは数回しか剣を合わせられなかったんだ。あの時は東堂先輩の「雷切」は打ち破れなかった。今はどうなるかわからないが俺が東堂先輩と当たれば弓を使わざるを得ない戦いになるだろう。それほど強い。

「わかりました。当たった時注意します」

「そうするといいよ。とりあえず帰ろうか」

「はい」

珠雫と手を繋ぎ2人で第二闘技場を出た。手を繋いだ時凄い顔を赤くしてたのがとてつもなく可愛かった。

時が過ぎるのは早く、すでに第8試合が終わっている。今のところ原作と違う点は俺、桐原静矢が勝ち続けていることなのだが大した違いではない。一輝くんもステラさんもオカマも珠雫も1年生の活躍には目を張るものがある。一輝くんの次の試合は前理事長の作った序列では3位（俺は6位だった）であり生徒会役員の兎丸さんとの試合。下馬評では兎丸さんの勝利というのが濃厚であった。確かに彼女のマツハ2の速度は攻略がむずかしいところがあるだろうが剣客からすれば攻略はできる。

ステラさんの相手の碎城さんも生徒会役員であり、彼のフルパワーの10tの斬撃は重い。昨年では俺もそれを体験したが普通に押し

返せたのでステラさんも力技で突破できそうだ。

そして俺の次の試合だが生徒会会計のカナタ先輩だった。原作ブレイク待った無しの組み合わせに現実逃避したくなるがすでにかなり原作と変わっているのですぐ吹っ切れた。久し振りに降参以外の勝ち方ができそうで嬉しい。

だが、剣で勝つにはどうするかは全く思い浮かばない。彼女の伐刀絶技相手に伐刀絶技無しで勝つにはどうするか決まらないのはかなり痛手だ。この段階から弓を披露するなんてエンターテイナーとしては憚れる。伐刀絶技もまた然り。【星屑の剣】は砕いた霊装の欠片を動かして内部から破壊するエグい伐刀絶技だ。目に見えないなら対応のしようがない。俺の【狩人の森】も見えなくなるから対応できないのだ。少し似ている。

なにせよ俺が木刀のみで勝つには無呼吸でなければならぬ。この時点でも難しいのにさらに、動き続けて狙いを定められないようにしなければならぬ。そして、ある程度を目で捉えなければならぬ。この3つをクリアすれば必然と勝ちを得られる。最悪手札を一枚切る価値はある。舐めてかかれる相手ではないが負ける相手ではない。勝つのは俺だ。

【紅の淑女】と戦いました。

この日の観客席も全て埋まっていた。校内序列二位である【紅の淑女】貴徳原カナタと【七星剣王】桐原静矢の試合だからである。今回は降参なんてありえない。黒鉄一輝との戦い以来一度も戦っていない静矢が戦うということだけで興味が唆られていた。カナタと静矢、2人のうちどちらが勝つかというのは言わずもがな静矢という予想が多い。だが弓を使わせるのではないかと予想されている。カナタとの試合において剣で戦うのは無謀とされているため七星剣舞祭でもたった二戦しか見せなかった弓が披露されると誰もが思った。

一輝も静矢の弓を見れるかとも思いこの試合を見に来ていた。観客席の前の方に陣取り静矢対策を見出そうとしている。その隣にはステラが座り珠雫、アリスが座る。三人も静矢の弓に興味があった。七星剣舞祭準決勝、決勝での試合はパソコンで見れる。そこで見た圧倒的な破壊力、応用性は三人と言わず誰もが興味津々だろう。故にこの試合の結末に驚愕が起こる。

『まず入ってきたのは八戦八勝！その全てが降参による勝利！今日も剣のみで戦うのかそれは王のみぞ知る！絶対王者【七星剣王】桐原静矢選手！』

静矢が会場に入ってくる。いつもなら湧き上がる歓声が湧き上がらなかつた。なぜ湧き上がらないか、それは明らかに闘気が違うからだ。放たれる闘気はこの場の空気を抑え込む。これが頂点の力の片鱗だと誰もが思う。

『次に入ってきたのは同じく八戦八勝！破軍学園生徒会執行部にして学園序列第二位！不可視の攻撃で相手を切り刻む！【紅の淑女】貴徳原カナタ選手！』

カナタが入ってくる。彼女も負けていなかった。片手にパラソルを持つ彼女は一見穏やかに見えるが放たれる闘気は静矢に劣っていない。お互いに実戦に出て戦ってきたからこそそのものだ。

「カナタ先輩、剣で勝たせてもらいますよ」

「桐原さんの闘気を見れば本気なのはわかります。いいですよ。切り

刻んであげます」

「怖いですね。胸を借りる気持ちで挑ませてもらいます」

「フランチェスカ」

「朧月」

お互いに固有霊装を出現させる。そして静矢が出したのはいつもの木刀であることに観客は少なからず驚いた。そしてどうやって攻略するかに興味が向いた。

『両者始める準備は万端です。さあ始まります』

l l l l e t , s g o a h e a d

開幕と同時にお互いに動く。レイピアを塵に変え距離をとるカナタ。そして塵を確認しようと木刀を蹴る静矢。

「偽・時雨蒼燕流攻式三ノ型遣らずの雨」

投げるよりも速く飛んでいく木刀はカナタまで2mのところまで切り刻まれた。この一瞬の攻防に観客は息を飲む。木刀を足で蹴るという形で相手の虚をつき高速の一撃を繰り出した静矢。それを容易く防御してみせたカナタ。またしてもレベルの違いが分かる試合となっていた。

静矢の前日に建てていた計画は根本的にダメであった。まず、目に見えない。今の一瞬で魔力操作の力量がわかり、どれだけ速く動いてもいつか捉えられることが発覚。故に戦法を手札を晒す方へと変えた。この判断の早さが結果を生む。

伐刀絶技「星屑の剣」の範囲を見た静矢は距離を詰めようとして走る。そして5m付近で横に思い切り回避行動を取った。この行動に全員が「星屑の剣」の範囲内に入ったことに気づいた。そしてそれを感じ取った静矢の異常性を感じた。

「偽・時雨蒼燕流守式四ノ型五風十雨」

この剣術を使った静矢は周りの目から見て、カナタの目から見ても明らかに異常であった。どこに攻撃が来るか分かっているかのよう  
に回避をし続ける姿に驚きを隠せない。これではまるで一輝の「完全  
掌握」ではないか。一輝を除いた全員の感想だ。

だが、一輝はこの技は相手の思考を読むのではなく、呼吸で攻撃の

タイミングを見てそれを読み取り回避しているということに気付いていた。そしてこの自分の知らない剣術を網膜に焼き付ける。

偽・時雨蒼燕流は静矢の持つ手札の一つだった。少年時代に、好きだった漫画の剣術の練習を繰り返して行うことで習得した剣術の我流。まさに偽という言葉が当てはまるに相応しい技だ。この世界には時雨蒼燕流なんてものは存在しない。周りからすれば新たな剣術を生んだようにしか見えていない。

「行くよカナタ先輩」

防御に徹していた静矢がそう宣言した。その言葉にカナタは少なからず焦りを見せた。こういう時の静矢は攻略法を見つけている時ということとは戦闘データから見れば明らかである。

試合時間はたったの2分。距離は3m。試合の終幕を予期したカナタは全方位からの攻撃を決行した。これは避けることが不可能だ。少し前まではそう思っていた。

「偽・秘剣——」

いつの間にか持つ木刀の長さが変わっていた。人1人くらいある長さの木刀へと変貌し、目を瞑り長い木刀を前に突き出していた。その間も理不尽な殺傷力を持った刃の檻は狭まる。観客も今の状態を察していた。次の一手でこの試合が決まる。

「——燕返し」

目を見開くと同時に剣を振るう。『神速』その言葉ですら遅く感じる程の速度に風が巻き起こり血が散った。

立っていたのは拳を握り手を挙げていた静矢だった。

静矢の前には斬撃を受け、血を流して倒れているカナタ。その傷の量に全てが驚愕する。

いくら速くても一度しか振れないであろう時だったのは間違いない。そこで三つの傷が残っていた。この剣術には一輝も目を見開く。一度に三つの斬撃を浴びせたようにしか見えなかったのだ。プロである寧音もこれには言葉が出ていない。

だがこれほどの技を出した静矢にもダメージはあった。まず腕は見るに堪えないほどの酷い傷を負っていた。手から肩まで走る裂傷

はかなりのものだ。

『しよ、勝者桐原静矢選手!!』

今更になつて実況が締めくくつた。だがそうなるのも仕方がないのだ。最後に見せた技で観客ですら全員驚愕している。むしろこの静寂を破るのは立派である。

「こんな剣術があるなんて……」

目を見開いて驚く一輝にはこれしか言えなかつた。自分には到底無理であると分かつていた。あの一撃こそが剣術の極致であるとも言える。今の一輝には実現不可能な技だ。

「あれも【剣技模倣】できるの?」

ステラの疑問には首を横に振ることではか返事ができない。明らかに自分のキャパシティを超えている。あの一撃を磨くのにどれ程の歳月をかけてきたか計り知れない。

「一度で三つの斬撃。あれも彼の伐刀絶技なのかしら」

「いえ、あの技は純粹な剣術です。確か多重次元屈折現象と呼ばれるものが起きて並行世界から三つの斬撃を放つ技だったはずです」

アリスの疑問に珠雫が答える。だが並行世界に干渉する時点で伐刀絶技であると思えないというのが本音である。

「珠雫はあの技を知っているのね」

「いつかやりたいと静矢さんが言つただけで見たことはありませんでした。まさかここまでの技とは知りませんでした……」

「それ以外にも偽・時雨蒼燕流と呼んでいたものも凄まじかつたよ。呼吸を見て攻撃を避けるなんて方法は前代未聞だよ。あれも桐原君の我流と考えると、天才という言葉じゃあ収まらないね」

感想を述べて4人は闘技場を後にした。

この試合を見ていたのは一輝達4人だけではない。生徒会執行部も全員が見ており、この結末に全員が驚いた。特に校内序列第一位東堂刀華は静矢の剣術に驚かされていた。

七星剣舞祭時に戦つた時よりも遥かに強くなつていてと感じた。一体この期間に何をしていたのか。どういった稽古をしていたのか

が気になった。そして、どうすれば桐原静矢を超えられるかを考えた。刀華は今のままでは確実に負けると確信していた。剣ですら互角ではなく押されることを理解していた。なのにあれ程の剣技を使っているのに本気は弓なのだ。世界最強を名乗ってもおかしくないだろうと冗談なしで言えそうだ。

1人の剣士としてそんな彼を超えたい。あの現実離れた剣術を使う彼に勝ちたい。そう思うのだった。



外食しました。

今日は御祓先輩とファミレスでご飯を食べていた。御祓先輩と俺との関係はただの漫画仲間ってやつである。それぞれ違う漫画を買って貸し借りをする仲だ。

「そういえば、刀華が次は勝つって意気込んでいたよ」

「マジですか…御祓先輩、僕に勝つなんて目標やめるようにできませんかね？ 東堂先輩と戦っていたらかなりの神経持って行かれるんですよ。カナタ先輩とも同じ理由で二度と戦いたくないです」

「それはできないんじゃないかな。戦うために地の果てまで追っつきそうな雰囲気だったよ」

「これだから戦闘狂を相手にするのは嫌なんですよ。本当にやってられないですね」

「それは言ってるね。あの二人に戦いを挑まれるなんて不幸以外の何物でもない。強く生きなよ」

「笑わないでくださいよ。あとこれ読み終わったんで返しますね」

袋に入った本を御祓先輩に渡す。読むの早いねと言われ、感想を話しあっていた。この平和は続かない。

「おお、絢瀬じゃねえか」

物騒な声が聞こえてきた。俺はこの声を知っている。貪狼学院の倉敷蔵人だ。

「悪いけど連れが嫌がっている。離れてくれないか？」

次に聞こえてくるのは一輝くんの声だ。この声を聞いて直ぐにああ、本編のイベントかと把握した。

「こういうのは無視に限るけどうちの生徒が手を出したら協力してね」

うちの生徒『に』ではなく『が』と言った。つまり一輝くんが手を出したら一輝くんを取り押さえろということなのだ。流星生徒会だ。こういう話には興味があるため俺が耳を澄ませば御祓先輩も耳を澄ませ始めた。

「悪かったなブラザー、食事の邪魔をしてよ。侘びの印だ。受け取っ

てくれ」

少し顔を出して様子を見れば隣の席の人から瓶の飲料を盗って一輝くんのグラスに入れている。仲が良さそうで何より、と思っていたら瓶の碎ける派手な音とともに一輝くんの頭に倉敷くんが振った瓶が炸裂していた。

「剣客が油断してんじゃねーよ!」

理不尽な理由だ。というか今の避けることができてたよね。穏便に済ませたいからって耐えるなんて流石としか言えない。御祓先輩が後で直してくれるだろう。

「このクソ野郎! 消し炭になる覚悟はできてるんでしようね!」

ステラさんの声を上げながら立ち上がったから顔が見えた。というかここで炎なんて出したら炎上騒ぎ起きるな。この場合ネットでの意味も含めてである。

と、他の客の様子を見てみれば逃げている。金払えや。今なら無銭飲食できるかなと思ってしまう。

「ステラ、彼の手がちよつと滑っただけだ。喧嘩するような事じゃない」

流石主人公。男前である。俺だったらとつくに手が出てたね。頭に一撃なんて受けたら痛いでしょ。

「いくら蔵人が怖いからって、プライドなさすぎじゃないですか?」  
倉敷くんの取り巻きのDQN3人が一輝くんを煽る。今時こんな化石みたいな不良がいることに俺は驚いている。

「止めだ。こんなチキンに絡んだら、こっちの格まで落ちちまうぜ」  
倉敷くんもこれ以上煽つても乗ってきてくれないことを理解したのか手を引いた。

「よかったなあ、蔵人が弱いものイジメしないやつで」

「弱くてラッキーでちゅね〜」

ウザい。取り巻きのDQNが一番ウザい。自分は学のない馬鹿ですと宣言するような言葉遣いも腹立たしい。帰って行ったから許してやろうじゃないか。

「どういうつもりよ、一輝! 最初の一撃だつてわざと避けなかったで

しよ！」

「こんな所で揉め事を起こすわけにはいかないよ。彼は相当強い」

一輝くんの言うとおりである。倉敷くんは実際強かった。反射神経が異常に発達しているのか攻撃がギリギリで避けられことなんて多かった。だが最終的には人が反応できない速度で斬ることで攻略したのだがそれはまた別の話である。

「いやあ、災難だったね。目に付いた人間に誰彼かまわず噛みつく貪狼学園のエース、【剣士殺し】倉敷蔵人に絡まれるなんて」

いつの間にか御祓先輩が接触していた。思い出に浸っていたから全く気づかなかった。

「でも君の判断は正しかったよ。彼は去年の七星剣舞祭ベスト8だからね。といっても負けた相手は君達も良く知る桐原くん相手だったから違う相手であつたならベスト4になれたかもしれない」

「まあ御祓先輩の言うことは正しいけど前回のベスト4の面子を見れば剣客は東堂先輩くらいしかないし東堂先輩の【雷切】に反応できると思わないからベスト8止まりだったんじゃないですかね」

俺も御祓先輩と合流する。俺達がいることにステラさん、一輝くん、もう一人の女の人が少なからず驚いている。

「確かに、そうかもしれないね。あと、君達まで暴れていたら桐原くんが全員を取り押さえなくちゃいけなかったから助かってよかつたね。さ、治療をしようか後輩くん」

御祓先輩が手を伸ばして頭を触ると同時にまるで怪我をしたという事実が無かつたことになったかのように綺麗になつていた。まるで週刊少年ジャンプに出てきそうなスキルですね。

「さすが生徒会執行部副会長ですね。後輩の怪我を治してあげるなんて優しい。御祓先輩、用事ができたので先いきますね。少し多いかもしれませんが代金は机に置いておきましたので」

「程々にしてよ？桐原くんは手がつかないからね」

「なんのことやら。僕は少し話をするだけですよ」

そう言つて笑顔で倉敷くんを追いかける。

「月が綺麗ですね」

「そういうのはイイ男ではなくイイ女に言うことだろ。桐原静矢」

すぐに追いついた。DQN達とはすでに別れたあとだから一人だ。

あのDQNいたら面倒だったからちようど良い。

「でも実際今日の月は綺麗な三日月だ。僕は嘘を言わない」

「嘘を言わない……？ならあの時お前が本気と言っていたのはなんだったんだ？お前は本来弓使いだろうが！」

倉敷くんが怒っているのか胸倉を掴んでくる。あの時とは七星剣舞祭を言ってるのだろう。いきなりキレられても困るだけだ。カルシウム足りてないんじゃないの？

「剣の本気だよ。倉敷くんには剣だけで十分だったということだよ」

「デメエー……戦え」

倉敷くんに殴られそうになったが拳は途中で止められた。

「殴らないのかい？」

「ああ、殴ったらそれでこの件は終いになる。だが俺はお前と戦いたい。剣だけでなく全てを使う本気のお前とな」

「本気の僕と？止めておいたほうがいいよ。下手したら死ぬよ」

「誰が殺されるか。本気で戦え。俺はお前を超える」

「言っておくけど今の僕はこの時より断然に強い。それでも君は超えられると思ってるのかい？」

「そうだ」

ああ、この眼は超えられると信じて疑わない眼だ。この時の俺は笑ったのではないだろうか。まさかこの眼をまだ見れるとは思わなかった。俺の全てを見せる……つまりそれはどんな手を使ってでも勝利を掴む本来の戦い方というのを見せることだ。それはあまりにダ

サイ。

「それでも今やつても無駄だ。君が僕に一矢報いることすらできないのは見ればわかる。強くなれ倉敷蔵人。そして七星剣舞祭で戦おう。その時僕の力を見せよう」

「……」

「そんな不機嫌そうな顔をせずともいわずれ戦える。俺は絶対に七星の頂に立つ。倉敷くんが勝ち残れば戦えるよ」

「忘れるなよ桐原静矢。次戦う時は全力だ。文字通り全ての力で俺と戦え」

「約束しよう倉敷蔵人。もし七星剣舞祭で当たることがあれば君は七星剣舞祭の中で僕から全力を出させた最初の一人だ」

俺の言葉に倉敷くんは好戦的な笑みを浮かべて俺に背を向け歩いていく。ま、原作通りなら倉敷くんと戦うことはないだろうし大丈夫だろう。

「そうだ倉敷くん！君が奪った道場に一人の剣客がくるだろうから楽しみにしているといいよ！彼は強い！」

大声で言っつてやると少しこちらを振り返りまた歩き出した。少し顔を見たけどすごい獰猛だ。野生の獣かと思うよ。

原作通りなら一輝くんが戦うから俺が出張ることはない。普通に敵と戦って七星剣舞祭に出ればいい。そうすればさらなる戦いを行える。

## 【深海の魔女】と戦いました。

ある夜、静矢の握る端末がメールを受信した。

次の対戦相手が決まったのだらうと興味なさげにメールを開く。そこに表示された13戦目の相手は黒鉄珠雫。彼の婚約者の名前だった。

婚約者が相手だから悲しむ様子はなかった。むしろ、強敵である珠雫と戦えることが嬉しいのか笑っていた。本来の13戦目は珠雫と東堂刀華が戦う筈だったのだ。それが改変されたことに残念に思う反面、興味のなかった試合が一気に楽しみになった。

珠雫は未だに【水牢弾】のみで勝っているため手の内を明かしていない。これでは昔と変わらない。あの黒鉄家で共に修練した頃、初めて静矢が負けを知った頃からどう成長することで強くなったかが楽しみだと、色々な手を考えることで桐原静矢のこの日は終わった。

珠雫の握る端末に表示された選抜戦の組み合わせに兄である一輝は無理してほしくないと珠雫を心配した。ステラも普段は犬猿の仲といった感じだが心配をしていた。

ステラを下した一輝を相手に圧倒的に抑えた静矢と戦って珠雫が勝つ可能性は限りなく0に近いと思っていた。

「ステラさん、今失礼なこと考えてませんか?」

心配しているステラを見て珠雫は呆れ気味に言った。

「これでも私、1度だけ静矢さんに勝っているんですよ?」

初耳だった。一輝ですら『へ?』と呆気を取られた顔をしている。ステラも一輝と同じような顔をしていた。失礼な人ですねとステラのみを糾弾し、さらに言葉を連ねる。

「勝つ可能性は0に等しいのはわかります。私は静矢さんと拮抗した勝負ができればそれでいいんです。勝敗に関係なく、静矢さんにさらに強くなったと認めてもらえればそれだけで私は満足です」

どうせなら勝ちたいですが。と小声で言うが聞かれていない。一輝は妹の決意に「無理をするな」ではなく、「頑張つて」と言った。ステラもそれだけ言えるなら緊張なんてないでしょと軽口を叩く。エールを送られ、気合を入れた珠雫は既に負けている剣客、弓使いをお願いをし、打倒桐原静矢にむけて特訓をした。「私は、最強になる静矢さんの隣に立たなければいけない。そのために……」

自分にプレッシャーを掛けていることに気づいていなかった。

『さあ始まりました本日のメインイベントと言つても過言ではないこの一戦！【深海の魔女】黒鉄珠雫選手と【七星剣王】桐原静矢選手の試合です！解説には西京先生に来てもらいました！』

『よろしく』

『今回の試合どうなると思いますか？』

『しずやんの勝ち一択っしょ。ここまですれば降参で勝つなんてないだろうから、ただ妹ちゃんがどれだけやれるか。これだけだね』

司会と解説の声を聞きながら静矢も珠雫も入場する。カナタとの試合と同じかそれ以上の闘気を身を纏って入場する静矢に会場の観客は全員それほどの相手であると認識した。対して珠雫は落ち着いた様子で出てきたように見えた。

だが、静矢や珠雫と親しい人は一目でおかしいことに気づく。

「珠雫、見ただけでわかる。そんなに気を張ってたら一瞬で終わるよ。なにをそんなに気を張ってるんだい？」

一目見た瞬間、静矢は珠雫の様子が少しおかしいと判断した。それ

を指摘したことにより、珠雫は自身が気を張っていることに気づいた。

「ありがとうございます。ただ私は静矢さんに認めてもらいたくて、いらない緊張をしていたみたいです」

「…少し勘違いがあるみたいだけど、僕はとっくに珠雫を認めているよ。この僕に一度とはいえ土をかけたんだから当たり前だよ。だから焦らずに成長した自分を僕に見せてくれ」

いつの間にか出していた木刀を向けて告げた。その言葉に珠雫も緊張が解けた。

「静矢さん。貴方の嫁の力を思い知ってください。繁吹け【宵時雨】」  
お互いが取り出したところで試合が開始される。

l i l l e t , s g o a h e a d

開始と同時に試合は動いた。

瞬きをしていればわからない程の一瞬。

静矢は珠雫の背後で水に囚われていた。

結果だけを見るなら直立したまま動いてない珠雫。そして、その後で水に囚われている静矢だ。

水の中で囚われている状態で珍しく何をされたのか分かっていないような顔をする静矢。その様子に珠雫は少し微笑む。

「私は貴方の嫁になるんですよ？行動くらい読めて当然です」

珠雫の言葉になるほど。と納得したような顔をした後に静矢は木刀を2回振った。その二振は水を切り裂き、囚われの身から脱した。「面白い。初めて僕に黒星が付いた時を思い出すよ。あの頃と違って



今の僕は水も斬れる」

「それくらい分かっていました!」

そう言つて霧を出現させる。静矢の視覚を封じられた。だが、目での認識など静矢にはどうでもよかつた。目で分からないならいらな  
いと目を瞑る。そして神経を尖らせ、次から次に迫る剣撃を全て弾  
く。防御だけでなく、隙あれば反撃をする。

観客席から見える2人の様子は別世界だ。上から眺めれば10人  
の珠雫が次々に剣を振り、静矢を斬ろうとするがそれを余裕を持つて  
捌き、隙あれば反撃をして分身を消している。まるで見えているかの  
ような対応に言葉が出なかつた。

そして戦況が、静矢が動いた。

だが、それに合わせたかのように静矢の足下が凍りつき、動けなく  
なつた。

「手の平で踊らされてるみたいだなあ……」

頭上に迫る氷塊を見て苦笑いをする。静矢にとってこのような後  
手後手に回る戦いは初めてであつた。読みの深さで圧倒的に珠雫が  
勝っている。

だが、珠雫には余裕がなかつた。

反撃を許せばすぐに倒されるということを珠雫は自覚していた。  
静矢は自分より圧倒的に強い。勝つために静矢の動きを読みとり  
次々と攻撃を仕掛けていく。だが、その全てが捌かれる。そこらの伐  
刀者ならとつくに終わっていたであろう戦術を乗り越えてくる静矢  
の強さを再認識した。

上から落ちる氷塊を難なく剣で斬る。そして足下の氷も壊すがそ  
の後氷は溶けて水場となつた。

「時雨蒼燕流特式十ノ型スコントロ・デイ・ローンデイネ」

カナタとの戦いで見せた時雨蒼燕流。それを静矢ではなく珠雫が  
使つた。水を纏い静矢に突撃していく。静矢は回避できないと判断  
し、木刀を構える。

珠雫が宵時雨を振ると同時に血が舞った。その血を見て誰もが驚く。

桐原静矢が手傷を負った。

致命傷までいかないが深い傷を刻まれていた。

「やってくれたね珠雫。まさか珠雫に教えたとはいえ時雨蒼燕流を使ってくるとは思わなかった。その小太刀の短い分を水で長くして斬るなんて良い考えだ。水に斬れないものはない」

胸を縦に斬られたことに感心する。そして回避ができないことを悟って防御した際、自分と一緒に斬られた木刀の断面を見て笑う。

「ここから、僕も珠雫に見せてない手を見せてあげよう」

瞬間、静矢の回りの空間が爆ぜた。珠雫は何が起きたか全くわかっていない。上から見ている観客ですら何をして空間が爆ぜたのかわかっていなかった。

いや、1人だけ静矢のしたことを理解した。そしてその行為で起きている現象に冷や汗を垂らす。

「桐原先輩の魔力ってどれくらいだったっけ？」

目を見開いたままステラは隣に座る一輝に問いかけた。

「確かAランクだと思うけど、ステラはあれが何かわかったの？」

「ねえ一輝。あの桐原先輩の周りに透明だけど空気の流れが明らかに違うのが何かわかる？」

「そうだね。明らかに……まさか」

ステラの言葉に答える途中で一輝は気づいてしまった。その歪みの正体が何であるかを。

「多分それで合ってるわ。あれは桐原先輩の高密度になって目視できるようになった魔力。あんなもの私の魔力でも無理かもしれないわ」  
ステラの言葉に一輝はさらに、これから静矢が行おうとしていることに気づいた。いや、気づいてしまった。

「そんな……まさか、ありえない……」

静矢が行おうとしていることをありえないと言ったが、今まであり

えないことを行い続けていることを考えればありえないことでもない。だが、一輝の思う技をするには魔力量が多すぎて体の負担がかかりすぎる。

「確かに【一刀修羅】は魔力操作が上手く鍛錬を積み魔力量が多すぎてできるかもしれない。でもあまりに危険すぎる」

信じられない物を見る目で闘技場の静矢を見る。

「黒鉄君との時は読みと身体能力。カナタ先輩の時は剣技。そして珠雫には魔力。これが僕の剣の全てだ」

「まさかそれは……」

「今見えてるのは高密度の魔力。これを全部使ったで一振りだけに絞って強化をする。いくよ珠雫、説明する暇もなく一瞬で終わらせる

【偽・一刀羅刹】！」

静矢が言う。それと同時に魔力は消え去り、風が吹き荒れる。あまりの風に観客も目を閉じる。そして目を開いた時には荒れた闘技場と倒れた珠雫。そして体中から血を流す静矢だった。

あまりに一瞬のことで会場は静まり返る。先程まで押していた珠雫がその場で倒れる現実が未だに受け入れられない人もいる。血を流していることに理解が及んでいない人もいる。

この状況で何をしたらか答えろと言われて答えられる人は一輝にか無理だろう。

静矢の中の大量の魔力をただ一度の攻撃で全てを使った。そして振るだけで激しい風が起き、衝撃波が闘技場を荒らした。それが一輝の見解だった。そしてその反動は燕返しのはずではなく、今にも倒れそうなほど血を流していた。

『しよ、勝者桐原静矢選手!!!何が起きたのか全く分からない程の一撃でした!実際何も見えてないのですがきつと一撃でしょう!今のをどう思いますか西京先生』

『いや、何が起きたかわからんし。これ避けれるやついんの?つてくらい見ることできなかったよ。でも、こんな自爆技見たくなかった』

『つまり桐原選手が人間辞めてるってことでよろしいでしょうか？』  
『妹ちゃんも頑張ったよ。深く読んで途中までは押していて、一撃を  
与えたんだから大したものさ。七星剣舞祭に出れてれば良いとこま  
で行けると思っただよ。でも、しずちゃんにはそれが通用しなかった。た  
だそれだけだね』

『ということですよ！さすが【七星剣王】桐原静矢選手！圧倒的な力で強  
敵を打ち破りました！』

静矢は無理をして痛めた体を動かし、珠雫を抱きかかえる。俗に言  
うお姫様抱っこをして闘技場から出て行った。

盗撮犯を撃退しました。

「ここは……」

「ここは病室だよ珠雫。ちゃんと覚えているかい？」

目を覚ませば見慣れない天井。しかしその横から想い人である静矢の声がした

「静矢さん……私の負けです」

「そうだね、僕の勝ちだ。でも強かった。この胸の傷が珠雫の強さの証明だよ。最後に会った時より断然に強くなったね」

服を捲り胸に刻まれた傷を見せる。その傷は治そうとしておらず見れば痛々しい。

「私は静矢さんの隣に立てるのでしょいか」

「隣に立つても何も、僕の心は常に珠雫の隣にいるよ」

静矢はクサイ言葉を言ったと自覚したからか少し顔が赤くなり、恥ずかしがった時の癖であるわざとらしい欠伸をする。そんな態度の静矢に珠雫は微笑む。

「静矢さん」

「なんだい？」

珠雫の言葉に顔を向ける。顔を向ければ一瞬で珠雫の顔が目の前に迫り、唇を奪われる。

「隙だらけですよ。そして、次こそは勝ちます」

唇を離して悪戯が成功したと微笑みながら次への闘志を燃やす。

「僕は次も勝つ。そして、誰にも負ける気はない」

「はい。私に負けるまで絶対に誰にも負けないでくださいね」

「珠雫にも負ける気はないよ。じゃあ僕は行かせてもらうよ。僕が出るのを待つてるみたいだからね」

「はい。ありがとうございます」

珠雫の微笑みを見ながら静矢は退室していく。部屋を出れば一輝とステラとアリスが扉の横で待っていた。

「わざわざ僕がいなくなるのを待つなんてしなくてもよかったのに」

「いや、ステラは入ろうとしてたんだけどアリスが止めたんだ」

一輝が苦笑いをして言う。その様子から一部始終は見られていたなど思った。ステラが顔を赤くしているということはキスされた部分は確実だ。

「じゃあ僕はいくから。珠雫によろしく」

手を振りながら去っていった。静矢を見送ったあと、一輝達は珠雫のいる部屋に入った。

闘技場ではステラが戦いの場に出ていた。相手は格下であるためステラの勝ち揺るがない。

「焼き尽くせ【妃童の罪剣】！」

ステラの声と共に炎の塊が対面する対戦相手を襲う。そして倒れる。ここまでテンプレと化したステラの試合には静矢は大した面白みを感じていなかった。今回もまた火力が上がったな程度にしか思っていない。

「ステラ選手、これで14戦14勝!!」

魔力や剣技を見ればステラの戦績は当たり前だろう。最初の一撃で倒すだけの簡単な作業だ。それでも静矢は見続けた。本戦では確実にステラと戦うことになる。本戦までに火力がどれだけ上がるのか気がかりなのだ。

「強いですね」

ステラの試合の前から静矢の隣に座る【雷切】東堂刀華が呟く。

「そうですね。けどまだ足りません。東堂先輩の方が強いですよ」

「そうですか？嬉しいこと言ってくれますね。ところで、桐原君はいつになったら弓を使うのですか？」

私、気になります。と言わんばかりに話を切り替えてきた。それに少し間を空けてしまう。

「……早くて予選最終戦ですね。学園側に僕の力を示しとかないといけませんから」

「是非とも決勝で戦いたいですね」

「僕は東堂先輩とは戦いたくないですね」

言葉とは逆に好戦的な笑みを浮かべている。

「リベンジはさせてもらいます」

「もし戦うことになってもさせません。僕は常に勝ちますよ」

2人の中で火花が散る。静矢のもう片方の隣に座る御祓は2人の様子を見て楽しそうに笑う。

「あ、僕はそろそろ行きますね。ステラさんの試合を見に來ただけなので」

「そうですか。ではまた機会があれば一緒に見ましょう」

「そうですね。御祓先輩もまた今度」

「ばいばい桐原くん」

静矢は2人に見送られながら会場から出る。

外に出れば空は綺麗な夕焼けになっており、誰に声かけられることもなく寮への道を歩いた。

そしてその道中で見てしまった。一輝とステラがキスをしている瞬間を。反射的にバレないように木々に隠れた。それが運命を少し変えることになる。

「!？」

木々に隠れる者がもう1人いた。その者は片手にカメラを持っており、いかにも怪しそうな姿をしていた。静矢に見つかる共慌てたように去っていく。静矢は悟る。カメラで撮られていれば問題となりおしまい。これは原作通りのイベントであると確信した。急いで盗撮していた男を追いかけた。

「僕から逃げるなんて不可能だよ」

静矢は【朧月】を展開し、カメラを射抜いた。男はそれに驚き、射

抜かれたカメラを落としてしまう。だがカメラを拾おうとせず逃げる。

「こんな木々に囲まれた場所で全力で走っても無駄だよ。機動力では僕の方が上だ」

射抜いたカメラを拾った後、木を避けながら逃げる男を追う。忍者の如く木を渡ればすぐに追いつき、男の前に降りて顔面を蹴り飛ばす。

「ぐう」

男は静矢の蹴りを受け、汚い声をあげながら木に止められるまで飛んだ。

「さて、誰の命令であるの2人を撮影したか吐いてもらおうか」

木を背に倒れている男に笑顔で近づく。逃げる元気がないとわかっていいるから全く焦らず、一定の速度で歩いて近づく。近づけば徐々に顔を強張らせていることからやはり命令されて動いているのかと判断した。そして、原作知識から黒鉄家の人間が黒幕であることもわかった。

「そうだね。この時期なら赤座さんが黒幕かな？」

男の目の前で見下すように言う。その言葉に男は何も答えない。答えがないなら仕方ないと肩を射抜いた。

「あぐあー！」

「言わないと風穴だらけになっていずれ死ぬよ」

嗜虐的な笑みに男は表情を青くする。

「右手」

静矢か宣言すればその通りに右手を貫いた。

「左足」

「腹」

「右太腿」

次々に宣言して射抜いていく。次第に男は殺されるのではないかと死の恐怖に怯え始める。

「怖くて震えるくらいなら言えればいいのに。黒幕がわかったところで僕から手を出すことはあまりしない。右足「あ、赤座守」へえ」



右足を射抜こうとした時声を発した。今までうめき声しかあげなかった男がしつかりとそう言った。

「知ってた。でも確信を得られた。君は帰っていいよ。動けるといいね」

先程までとは別人のように優しく笑う。そして赤座守の名前を聞いて尋問をやめて去って行く。後ろでは体を引きずって逃げて行く男もいた。逃しても問題ないと判断して帰路へと戻っていった。

弁明しました。

校外のランニングから帰ってくれば校門に大勢のマスコミが立っていた。もしや俺を取材しに来たのか……?と思うこともあったが今更であるので違うだろう。ではなぜ?と考えればこの選抜戦が終わりかけの時期でマスコミが大勢くるのは一輝君と国賓であるステラさんの熱愛報道だろう。だが、あの時熱愛報道になりえる写真は破壊したはずだが…。

「【七星剣王】の桐原静矢さんですよ?少しお話を伺いたいのですがよろしいでしょうか?」

マスコミに捕まってしまった。なぜ集まっているか聞けるしちようどいいかもしれないな。

「はい。別に大丈夫ですけど運動しながらでもいいですかね?」

「え、あの、桐原さんの運動に追いつけないので、できれば落ち着いてしたいのですが……」

冗談にマジレスするマスコミ。面白味に欠ける。

「……わかりました。一つだけ質問に答えます」

「黒鉄一輝さんとステラ・ヴァーミリオンさんが恋仲であることが本当ですか?」

やはりその話題か。因果の修正はほんとすごいな。

「僕には分かりかねます。まず、何が原因でそういう噂が立ったんですか?」

「知らないのですか?こちらの写真です」

見せられたのは解像度が悪いが一輝さんとステラさんがキスしているところが見える。この解像度を見るに携帯電話が使われていたのだろう。

「改めて、何か知りませんか?」

「この2人が恋仲であろうがなかろうが本人達が良いのであればそのままが良いでしょうね。ヴァーミリオン国王も娘の恋路の邪魔はしないでしょう。でも、黒鉄家の方は違うでしょうけどね」

あそこは一輝くんを認めない。だからこそ汚い手を使って一輝くんを陥れようとする。赤座守は本当に害悪だ。

「問題は黒鉄家ということですか？」

「それはそうでしょう。あの家は黒鉄君に厳しいですからね。もしかしたら今頃査問会を開かれているかもしれないですよ」

少し笑いながらその人から離れる。そして校門を通ろうとすれば

「桐原選手！今回の熱愛報道に関して何かありませんか!？」

「桐原選手！この件をどう思いますか!？」

「桐原選手！」

「桐原選手！」

マスコミというのは非常に面倒くさい。

「どうでもいい」

不機嫌にそう言えば何も言わずマスコミは道を作る。初めからそうしろよと思ってしまう。

「一つだけ言うなら、黒鉄一輝は真面目で優しく、努力家ですよ」

そう言って寮に戻る。チラツと後ろを見ればメモを取る人間がチラホラ見えるため一輝くんへの風評被害も少し和らぐだろう。

外交問題なのは分かる。そしてその外交問題の大元は俺だ。あの2人の部屋を一緒にしたのは原作通りしようとした俺がしたことなんだ。…つまりこの問題で最も悪いのは俺？

少し冷や汗を流しながら寮に戻る足を止める。そしてもう一度マスコミの方へ向かう。この件の原因は俺だ。だから無理でも一輝くんと学園を弁明しよう。

「取材に来た皆さん。僕にカメラを向けて下さい。ボイスレコーダーもちゃんと電源入れてますか？これから僕がこの件に対して知っていることを話しましょう」

ざわざわとマスコミが慌ただしく動く。中にはビデオカメラをこちらに向けてくる人もいる。緊張した面持ちのマスコミがちらほら見えるようになって口を開く。

「まず、ステラ・ヴァーミリオンさんがこの学園に来る前、彼女の部屋割りを考えたのは学園から依頼された僕です。では、なぜ男女を同じ部屋にしたのか。それは黒鉄一輝、ステラ・ヴァーミリオン両名のためです」

再びざわざわし出す。カメラのシャッターもかなり切られてフラッシュが眩しい。

「なぜ2人のためになるか。それは2人の実力が拮抗していると考えたからです。彼以外に彼女と実力の拮抗する新生はいないと考えたからです。確かに黒鉄一輝はFランクです。ですが彼は模擬戦でステラ・ヴァーミリオンを倒した。努力をして僕の腕を切り落とすくらいに強くなった。それは彼の兄にもできなかったことです。黒鉄一輝は取材陣がでっち上げたような悪人ではない。あえて今回の件で悪者を出すのなら僕、桐原静矢ですな」

沈黙が流れる。マスコミもカメラのシャッター切っていない。

「質問があれば何でも答えましょう」

その言葉に恐る恐る手を挙げる者が数名いた。

「今回の熱愛報道に対してどのような対処をする予定でしょうか？」

「ヴァーミリオン皇国の国王に連絡を取りましょう。少なくとも、国王には男との部屋になることを了承してもらっているのでこの件に対して色々説明しましょう」

「相部屋はヴァーミリオン国王も承諾していたのですか？」

「はい。というより承諾して貰わないとそれこそ外交問題になりますよ。娘の将来のためになると言って説き伏せました」

「ありがとうございます」

「では、他に質問は？」

もう手を挙げる者はいない。みんな早く帰ってまとめたいのかもしれない。ネタは十分揃っただろう。

「どうして桐原先輩がこんなことをしているのでしょうか？」

声が上がった方を見ればステラさんがいた。隣に一輝くんがいなるところを見ればお察しである。

「ヴァーミリオンさん。それはそうすべきだと思ったからかな」

ステラさんだけでなく珠雫とホモもいた。珠雫に睨まれている。悪役として出て行ったことを怒っているのかな。

「取材お疲れさまです。今日のごことは帰ってまとめるなりしてください。もし話した内容と違うことを書いてあれば訴えますのでご注意を」

マスコミは慌ただしく帰っていく。そこに残されたのはステラさんただだけだ。

「じゃあ僕はこれで行くよ」

そう言つてステラさん達に背を向けて歩く。

「桐原先輩！」

「何かな？」

足を止めて振り返る。するとステラさんが腰を90度曲げていた。

「ありがとうございます」

「なんのことかな。僕はしたいことをしただけだ。これで一輝くんが戻ってからはわからないよ。帰って来なければ耐えられないね」

手を振りながら寮へと戻った。おっさん達のしつこさからすれば解放されることはないだろうな。

2日後、一輝くんが解放されました。

初めて聞いた時、脳内会議が始まるレベルで驚いた。あの狸爺と黒鉄父が解放するのだ。奇跡に近い。もう直ぐ自分の試合だというのにそちらにばかり頭が考えてしまう。

「桐原君」

考え事をしていれば後ろから声がかかった。振り向けば一輝くん一行である。いつもその面子でいるけど疲れないのか不思議である。俺なんて今ボツチだぞ。

「どうしたんだい？と聞く必要もないか。僕は何もしていない」

「いや、それでも僕のために何かをしてくれたから礼を言いたいんだ」  
「そういうことなら受け取っておくよ。それにしても何故出れたのか僕には分からないな。ヴァーミリオン側が何か言ったのかな？」

「そんなことない……とは言い切れませんがからおそらく……」

「なるほどありがとう。これでスッキリしたよ。確かにヴァーミリオン国王なら言いそうだ」

謎が解けた。アニメでは一輝くんが解放された後お義父さんに電話がいった。今回は俺のインタビューを見たか、別の要因ができて電話が早まったのだろう。だから一輝くんがこんなに早く釈放されたんだ。

「そうだね。出所祝いに今日の僕の試合で面白いものを見せてあげよう」

笑顔で言ったからか、一輝くんやステラさん、珠雫もオカマも不気味に感じているような顔をしている。失礼な人たちだ。

「桐原君の言う面白いものを期待して観戦させてもらうよ」

一輝くんはすぐに反応をしてくれる。さすが主人公だ。主人公には早く成長してもらいたい。そして思い切り弓を使ってみたい。だからその成長を早めるためにも桐原静矢の本当の能力というものを見せてあげよう。そうすればステラさんも早くドラゴンへと至れるだろう。

将来をいろいろ考えながら控え室へと向かった。

能力明かしました。

俺は昔から強くなるにはどうするかを考えた。その考えで至ったのが生まれ持った魔力量を増やす。俗にいう《覚醒》をした。それも何度も《覚醒》をしているのだから《魔人》の中でも特異なものだろう。

そして魔力量が十分だと判断してしまった時、上がらなくなった。次に思い至ったのが能力の強化。だから桐原静矢の能力が何であるかを考えていた。前世のインターネットでは植物の操作とステルスみたいなことを言われていた。だがそういうわけではないと思っていた。爆発するような植物を俺は知らない。なのに爆発する矢を作ることができた。自分以外の物もステルスすることなんて普通無理だ。なのにできた。

考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて、1つの答えを得た。桐原くんの能力は植物系とステルスの2つではない。元々1つの能力であるという答えへと至った。それが去年、【七星剣舞祭】で優勝し、理事長を降した後のことだ。

自分の、桐原くんの能力を理解しきつてからただでさえチートな能力がよりチートな能力へと変化した。炎を扱うだけだと思っていたステラさんと同じだったのだ。ステラさんはドラゴンの力の行使の一部として炎を扱う。そして俺は――

『本日の最終試合はこの人だ！知らない人はこの場にいない！2年【七星剣王】桐原静矢選手！そして対するは爆裂に次ぐ爆裂、桐原選手も爆発で倒せるか！3年【爆弾魔】将監駿河選手！』

俺は戦いの舞台へと上がり、前を見る。相手はメガネに特徴的なアゴ。どこぞのボマーを思い出す風貌をした相手だ。能力は二つ名の通り物質を爆発させる能力で、前の試合の相手は未だに意識不明らしい。

「去年は偶々俺が出なかったから優勝できたただけぞ下級生。例えば前が透明になろうと広範囲を爆発させることができる俺からすれば無力だ。降参するなら今のうちだ」

よく口の回るアゴ野郎である。確かに、原作の桐原くんならこういう相手は棄権しただろう。相性が悪い。もし、能力の本質を見極めることができていなかったなら、俺は剣を使ってこの試合を秒で終わらせただろう。この先輩は速攻で終わらせなければいけない。それだけの実力があるのだ。

「なら僕は胸を借りるつもりで挑ませてもらいます」

目を研ぎ澄ませる。いつ、どこが爆発させられるかわからないため初めからアゴ野郎を見極める。

l—l—l e t , s g o a h e a d

戦いの始まりだ。俺はいつも通り【朧月】を出して植物を操り剣を生成する。ここまではいつも通り。だがここからは違う。アゴ野郎には悪いが俺の能力の実験台になってもらおう。

そう思った矢先にアゴ野郎が何かの粒子を飛ばしてきた。これが爆発の種であることは確定的に明らか。これが時限式だろうと遠隔操作式だろうと関係ない。

次の瞬間俺は消えた。いつもと同じ樹海の出現、そして——光の操作による透明化を行う。

『おおっと！桐原選手はいきなり全開！ステルス化に樹海だ！これはすぐに終わらせるといふことか!?!』

『いや、あのアゴの能力は爆発であることは周知の事実。広範囲に爆発を起こされればしずやんでもタダじゃ済まない。だからなぜ始まった瞬間に斬らなかつたのかが不思議だね。しずやん程の実力なら始まりとともに終わらせることもできたよ』

西京先生からはそう見えるのか。確かに始まった瞬間にアゴ野郎を倒すことはできた。だが一輝くんの出所祝いに能力の披露をしなければならぬからそんなつまらないことはしない。

ズドオオオオン!!!

重い音が響くとともに辺り一帯が吹き飛んだ。アゴ野郎が能力の



爆発を使ったということである。そしてずっと観察して分かったことがある。やはり粒子が爆発の種であったこと、アゴ野郎は爆風に巻き込まれても無傷であること、爆発させる時は手でスイッチを押すような動作をすること。この3つだ。

この対策として俺は能力の一部を使うことにした。

【時雨】

『これは!? 樹海が一気に吹き飛んだと思えば雨が降ってきた!? 一体これはどちらの能力なのか!?!』

『……んな!? しずやんのやつ。能力2つだけじゃ無いのか!?!』

「雨だど!? これは一体なんだ!?!」

アゴ野郎は目に見えて焦る。雨によって先程までの粒子は全て地に落ち、何度もスイッチを押す動作をしても爆発しない。確実に水に弱い能力だ。さて、この雨というか放出される水は俺の能力の一部。これだけで本当の能力がわかれば鋭いと思う。ネタバラシをしよう。

植物も光も音も気配も水も全てに共通して自然である。俺の能力は植物を操るのではなく、自然を操る。植物は自然を操る副産物だったのだ。まだ使い慣れていないから何でもはできないがいずれ極めれば自然のものなら何でも……つまり、この世のあらゆるものを操ることを可能にできるだろうと思っている。

「終わらせましょう先輩」

雨により水浸しになったアゴ野郎を見据えながら、上から雷を落とすように剣に電気を纏わせ、鞘に収める。

【雷切】

自らクロスレンジに入る距離に移動し、東堂先輩の得意とする必殺の居合いをする。斬られたアゴ野郎は感電し、その場で倒れて試合は終わった。

終わってみれば口だけの雑魚だが、実際に雨が降ってきたことに焦ることで判断力を欠いた。そして次の判断ができずやられたただけだ。俺でなければ苦戦する相手であることは間違いない。そして、能力的にも七星剣舞祭に出ているもおかしくなかった。

【時雨】

桐原君の声が聞こえて来たと思えば雨が降った。桐原君が何かをしたことは明らか。でも、何をしたのか分からない。

桐原君の能力はステルス、そして植物操作。この2つだけのはず。だけどそのどちらでもない能力が発動された。

『……んな!? しずやんのやつ。能力2つだけじゃ無いのか!?!』

西京先生の実況が聞こえた時、桐原君が会場に入る前に言っていたことを思い出した。『面白いものを見せてあげよう』彼はそう言っていた。これが面白いものであることは自明の理。次に考えるべきは、これがただの水を操る能力なのかどうかだ。

「二輝……桐原先輩の能力は一体いくつあるの……」

ステラがそう言って驚くのも分かる。伐刀者は大体が1つの能力だ。僕は身体強化、ステラは炎、珠雫は水。だが、桐原君はそういったことから逸脱している。ステルスも植物も、今回の水も共通点がない。つまり、現状では全て違う能力であると言える。

「静矢さん……貴方は何処までも先へ行くのですね……」

横で座る珠雫は悔しそうに言っていた。悔しい気持ちは僕にも分かる。今はステラと拮抗した実力だけど、もし実力にこれほど差ができれば悔しい。悔しすぎる。

桐原君との実力差はこれだけではなかった。次に桐原君は剣を上に向けて腕を上げる。何をやっているんだと思って見ていればその剣に雷が落ちてきた。

「な!?!」

雨だけでなく雷までも使い出した桐原君に思考能力が追いつかない。

一体幾つの能力を使えるというんだ。いや、違う。そうじゃない。桐原君は面白いものと言った。力を見せびらかすような人間じゃ

ない。少なくとも僕はそう思ってる。

これは力を見せびらかすのではなく、何かを伝えて、より強者と戦うという桐原君の目的を達成しようとしているのではないか。

桐原君は何を伝えようとしているんだ。今の僕にはまだ分からない。ただ、今のままでは桐原君と戦える土俵にすら上がっていないことは理解できた。七星剣舞祭本戦までにどうにかしないとこの壁は乗り越えられない。

「雷切」

東堂先輩の得意とする技を使って桐原君は試合に勝利した。桐原君はなにを伝えたいのか、予想ができない。また、差が開いたことの確認しか僕には分からなかった。

「お兄様、私は静矢さんの能力が複数とは思えなくなりました」

桐原君の能力が複数とは思えなくなった？普通は複数ある方が目がいつて気付かない。たしかに確認しただけで4つの能力があるのは流石に異端すぎる。元々1つの能力と考えることもできる。でも、1つだとしても一体何だ？雷、水、植物、ステルス、共通点が全く分らない。

「珠雫、桐原君の能力は何だと思う？」

「ステルスだけが異質すぎて全く思いつかないです」

「そう？私はステルスの種を光学迷彩、つまり光を利用してると思ってるわよ」

アリスの話にパズルのピースがハマるような感覚に陥った。光学迷彩、たしかにその発想はなかった。そう考えればまだ考えられるものがある。

「自然環境ですか…」

珠雫の言うように当てはまるのは『自然環境』に関するものだ。もしそうだとしたら……

「もしそうなら強すぎない？」

ステラの言う通り、強過ぎるのだ。自然といえば他にも色々…いや、この世のもの全てを自然と言っていいだろう。もし自然を操作する能力なら、桐原君は確実に倒せない。無敵の存在だ。

「今までの能力は全部その一部ってことですか…」

珠雫の言っている通りだと思う。そして、今桐原君の伝えたいのかがわかった。桐原君は能力と向き合えと言いたいんだ。ただ、それは僕に対してではなく、ステラに向けての方が大きいと思う。僕は魔力が少ないからこそこれまでの規模の能力ではない。でも、人類最高の魔力を持つステラなら能力の昇華があり得る。

「二輝、しばらく考えるわ。もしかしたら私も成長できるかもしれない」

「うん。そう言うと思ってたよ。僕は気にしないから大丈夫。ステラは能力と向き合った方がいいかもしれない」

僕も何かあればよかった。だけどどう頑張ったとしても身体強化から派生する望みは薄い。だから今はただ、桐原君以上の剣を身につけるしかできることはなかった。

予選最終戦しました。

今日この時、七星剣舞祭への参加が決まる。最終戦に臨む者は19戦全てに勝利した猛者ばかり。その猛者達の試合は5分おきに各会場で行われる。

俺の相手は黒木權という漆黒の西洋剣を使う3年生だった。伐刀絶技は闇を操るといふもので相手の視界を塞ぐのを基本として平衡感覚、勘、全てを鈍くする厄介なものだ。その能力だけでこの場に立っているわけではない。純粹に剣の腕が良い。さらに眼が良く、大抵の相手の技は撃ち落とされる。

予選最後の試合の相手としては十分過ぎる。何よりも、この先輩には剣術の指南を受けていた。だからどれほど強いかというのはわかる。確かに先輩は強い。だけどその程度では俺は止めれないし止まらない。次がないからといって絶対に手も抜かない。

それに、今回に限っては弓を使う予定だから負ける要素が見当たらなかった。

『出場する全員が、これまでの19戦を全て白星で飾ってきた猛者ばかり。その中でも最も気になるカードは【七星剣王】桐原静矢選手と【暗黒剣】黒木權選手の試合ですね！解説の寧々先生、これは……と聞きたかったですがないので私一人でお送りします』

いつものように実況が流れる。今日の試合に解説がないみたいだ。実況ちゃんドンマイ。

観客席にはメディアが多い。やはり【七星剣王】の試合は収めておきたいのだろう。

それよりも、観客席で最も嬉しかったのは珠雫の存在だ。いつもは勝つことが当たり前な俺の試合より、勝てるかわからない一輝くんが試合の方を優先してもらっていたが、今回の最終戦だけはこちらを優先してみたんだ。珠雫が見てるから無様は晒せない。早く終わらせて、二人で5分後の一輝くと東堂先輩の試合を見に行こうでない

か。

「權先輩、1年の頃は剣術のことでお世話になりましたが、今回ばかりは弓を使わせてもらいます」

「それは分かっているよ静矢くん。剣を交えられないのは残念だけど、今の君の本気と戦えるんだ。結果がどうであれそれを誇りに思うよ」

「はい。先輩への恩返しとして本気でいきます」

「嬉しいよ」

先輩の目が変わった。本気だ。本気で俺を倒し……殺しにきている。俺にはそれが嬉しかった。本気で立ち向かってくる相手はアゴ先輩以来だから嬉しい。

l l l l e t , s g o a h e a d

「朧月」！

「闇黒」！

同時に【固有霊装】を出現させて次の行動に移る。先輩はこちらに飛び込み、俺は先輩の間合いから逃れるべく後ろへ下がる。下がりながらステルス化、そしてステルス化させた矢を放つ。

だが、先輩は透明である矢を容易く切り落とす。それだけでなく俺のいる位置へ正確に接近してくる。何故そのようなことができるのかと観察すれば目を閉じている。つまり、全て感覚で戦っているのだ。

「静矢くん、君は透明な矢を打たれたことがないからわからないだろう。透明でも、空気を切って進んでいるんだ。それなら空気の流れが変わるのも当たり前だろう」

この先輩はやはりおかしい。空気の流れだけで矢を予測して、それだけでなく俺の位置も特定している。面倒くさいことこの上ない相手だ。そんな相手にも関わらず俺の口は笑っていた。心の底から楽しいよ。

正直、空気の流れも能力で操作することができる。だけど慣れていない力を使えば隙ができる。先輩ならその隙に俺を斬りふせることができるだろう。だから使えない。

「流石先輩です。これが最後の試合で良かった【驟雨烈光閃】」

1万の透明な矢が先輩の頭上を襲う。だがそれだけでは倒せない。去年七星の頂を賭けて戦った城ヶ崎さん同様、横からも放つ。

「【大樹崩】」

矢が降っている途中で全方位から巨大な木の矢を弓から放つ。上から透明な矢が1万、全方位から透明で巨大な矢が20という四面楚歌な一面。

だけど先輩は目を閉じながら笑っていた。

これは対処される。半ば確信を持って次の一手の準備に入る。今ある魔力の3分の1程をこの矢に込める。何をされても一撃必殺に成り得る矢。理事長からは使うなと言われた一撃の応用。それをこの場で実践する。

矢に魔力を込めていけば1万の矢も20の巨大な矢も全て闇の中に消えていた。やはりこの先輩は強い。あれら全てを斬る。それで足りない分は闇に葬る。その代償として多くの体力が持っていないのか息が少し乱れ、疲れが見えている。

それでも東堂先輩よりも強いと俺は思う。

「【崩月】」

理事長の禁技を打ち破った技を先輩に放った。圧倒的にして絶対の一撃。これを破ることは不可能に近い。勝ったと、この試合は貰ったと、確信をしたその時

先輩が消えた。

そして次に現れたのは俺の背後だった。

「なっ!?!」

一瞬のことで反応が遅れる。その反応の遅れがかすり傷とはいえ一撃をもらうことになってしまった。

そして、その一撃をもらうことで俺の視界は真っ黒、そして地面に立っているという感覚が消失した。

そんな状態になってもなお、俺は勝利を確信していた。

「な!?!」

先輩から驚きの声上がる。それもそうだろう。今頃、【崩月】が先

輩を射抜くためその刃先を向けているはずだ。

進化した【崩月】は絶対に当たるという概念を搭載することで当たるまで標的を狙い続ける必殺技だ。もちろん前まで使っていた【崩月】より威力は落ちるが他の伐刀者の伐刀絶技より威力が高い。

きっと先輩は闇の空間を多重展開して【崩月】威力を殺そうと試みているだろう。だが、俺の一撃は射れば終わる。それら全てを歯牙にも掛けず打ち破り、先輩の脇を通って地面に炸裂することだろう。

どうなるかを予想していれば視界に光が入る。それだけでなく歓声も聞こえて来た。つまり、先輩の伐刀絶技が解けたのだ。

「ほんと、敵わないなあ……」

声の下後ろを見れば脇から腹にかけて風穴を開けた先輩が立っていた。先輩の後ろにはクレーターができており、その中心には俺の射った矢が深々と刺さっていた。

「降参だよ静矢くん」

そう言っ先輩は気絶した。気絶することで地面に倒れようとする先輩を支える。

『き、きまつたああああ!!!本戦出場第1号は桐原選手だああ!!!』

湧き上がる歓声と共に医療スタッフが駆けつけてくる。そして医療スタッフが先輩を運んでいくのを見て会場の歓声を上げる観客に手を振って答える。観客席にいる珠雫にグツと親指を立て、勝ったぞとサインを出す。よく見れば涙を流している。そこまで喜んでくれるとは思ってなかったから嬉しい。

「七星剣舞祭出場おめでとうございます静矢さん」

試合が終わった後、控え室に珠雫がきた。わざわざここにきてくれるのは申し訳ない。こちらから珠雫のもとへ行こうと思っただのになあ。

「ありがとう珠雫。まさか見に来てくれるとは思っていなかったよ。本当にありがとう」



一輝くんの試合のある競技場まで二人で歩きながら話す。道行く人には俺達が手を繋いでいるから邪魔しては行けないと思つたのか避けて歩いて行くし、新聞部っぽい人も周りにいるけど話しかけにくそうにしていた。今の俺はオフモードだから話しかけられても無視するだろうけどね。

「静矢さんの大一番ですから当たり前です。静矢さんの妻ですから」「妻ですから」というワードに心が高鳴る。珠雫の中では結婚するとは確定らしい。俺の中でも結婚は考えてはいる。だけどそれは当分先のことだろう。

「妻っていうのは気が早いけど、珠雫のそういうところ、好きだよ」

「今日の静矢さんは積極的ですな」

「本戦出場が決まったから余裕ができたかな。今度二人でデートでもしようか」

「はい！ずっと静矢さんで行きたいと思つてました」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

嬉しそうにしている珠雫を見るとこっちまで嬉しくなる。やっぱり珠雫という時が一番幸せである。

「ところで、今日は苦戦していたみたいですがやはり強かったですか？」

珠雫に話題を振られて考える。今日の權先輩は原作には出ていない影に隠れた実力者。校内では最強ではないかと噂されている程だ。今後も原作の裏側にいる実力者が出てくると考えたらワクワクする。「そうだね。權先輩は強いよ。今のヴァーミリオンさんや黒鉄くんより強い。僕と当たっていなければ本戦出場はしていたね。剣術においては黒鉄くんと同じくらい強い。特殊な歩法も備えているしね。今日はその歩法に少しやられたよ」

正確には一輝くんに勝るとも劣らない程の剣術を扱う。その上相手の五感を奪う能力持ちだ。一輝くんなら第六感で戦うこともできるだろうけど最終的には触覚を奪われていることが仇となりそうだ。

「お兄様と同等の強さ……何者ですか？」

「僕の剣術の師匠だった人の一人さ」

「それなら納得できますね。ところで、静矢さんはお兄様と東堂先輩のどちらが勝つと思つていますか？」

「そういえば原作と変えても東堂先輩と一輝くんのカードは変わらなかった。いや、本来なら学園最強と一輝くんが試合になるようされたから変わったといえれば変わったか。今の学園最強は俺だしね。」

「そうだね。黒鉄くんも東堂先輩も前戦つた時とは別人のように強くなってる。勝負は一瞬で決まる。どちらが勝つかは予想がつかない」特に東堂先輩は未知数だ。俺に負けることでどれ程腕を上げたのか全くわからない。

だから今からそれを観戦して見極める。願わくば俺の脅威であらんことを。

## 予選最終戦観戦しました

黒鉄一輝と東堂刀華。二人は確実に一刀で決めるつもりだ。原作では【雷光】と【雷切】がぶつかり合って一輝くんが勝った。だけど、俺が介入することで二人とも成長させてしまったという自覚と確信がある。逆に成長していなければ期待外れだ。

「始まりますね……」

珠雫が自分の試合であるかのような緊張を顔に出す。俺の時と同じくらいだ。やっぱ好感度は一輝くんと同列くらいなのね。

観客を見てみれば有名どころが結構いる。理事長も西京先生もいるし、【闘神】南郷寅次郎もいる。そして狸……もとい赤座のおっさんも見ている。赤座が笑っているというこの対戦カードは仕組まれたものだろう。だが、結局のところ七星剣舞祭で優勝するなら乗り越えないといけない相手であるからいつ戦っても同じだとは思う。

「この戦いで注目するべき箇所は東堂先輩の【一刀修羅】への対応。もし、確実に勝つために長引かせれば黒鉄くんは負ける。でも東堂先輩の性格上、絶対に真っ向勝負をするからどちらが勝つかは予想しにくい。……もし原作通りなら興奮めだなあ」

「原作？」

「ああ、こっちの話。珠雫が東堂先輩と戦うならどうやって戦う？」

「私ですか……そうですね、第一前提として剣を交えませんが、純度100%の電気を通さない水を使って戦います」

「うん。珠雫らしい戦法だね。僕も珠雫の能力を持っていたとすればそうしてるよ。予想では今の珠雫と去年の東堂先輩であればその戦法で8割勝てると思う」

俺と戦法が同じと分かって嬉しそうな顔になるが、8割で勝てると言うと少し表情が暗くなった。珠雫の予想ではこの戦法で100%勝てると思っていたのだろうか。そうだとすれば見通しが甘いとわざわざるをえない。

「残りの2割はどうなるのですか？」

「水を掻い潜ってくるし、まず彼女には抜き足がある。これの対処ができるかどうかも考えれば2割で負ける」

原作とは違い、今の珠雫なら抜き足を攻略できると思うため2割の敗北。もし抜き足の攻略ができないなら10割負け。ちなみに去年の俺は攻め続けることで抜き足をされないようにした。今戦うとしても同じ戦法を取る気がする。

「抜き足ですか……?」

「うん。相手の無意識に自分の存在を潜り込ませて気づかなくする技術だよ」

「それは…」

珠雫があまり理解していないようなので言い終わる前に俺が抜き足をして移動し、珠雫の額にデコピンをした。

「こんな感じだよ」

「……………痛いです」

珠雫がジト目でこちらを見つめてくる。可愛い。じゃなくて力が強すぎたのかな。最近力が大きくなりすぎて加減が分からなくなってきたな。

「ごめん。それより、今のが抜き足だよ。どう感じた?」

「瞬間移動をしたかのように感じました」

「それがこの技の強みだからね。ま、もつと強い一撃をされたら本能で避けられるだろうけどね」

「そうですか…」

珠雫が何か考える素振りをしてその後目の前から消えた。それに少し驚いた背後から抱きつかれた。

「こんな感じでしょうか?」

「参ったな。説明しただけで実践するなんて……僕でも会得するのに2時間かかったのに」

抜き足をされたという事実が胸に突き刺さる。自分はどこか抜き足にかからないと慢心していた。まだ慣れない珠雫にされるようでは本家の抜き足に対処できない気がする。まだまだ修行不足だな。

「完璧だとは言えないけど抜き足になっている。少なくとも僕は回避

できなかつたから実戦で使えるかもしれない」

言いながら俺も珠雫も観客席に座り直す。今は気を抜いていたから通用しただけかもしれないから『かもしれない』と保険をかけておいた。勘ではあるが通用すると個人的には思っている。だけど伸び代があるなら曖昧にして伸ばしてもらった方がためになるだろう。

『まもなく、七星剣舞祭予選最終戦【雷切】東堂刀華選手対【無冠の剣王】黒鉄一輝選手の試合が始まります！』

実況の声が聞こえてきた。だが解説は誰もいないだろう。だって南郷寅次郎の隣に夜叉姫いるし。俺もここにいるし。と、考えていれば東堂先輩も一輝くんも出てきた。2人が出てくるだけで歓声が沸き、次第に静まる。

2人が何を話しているかは分からないがお互いが万全の状態であることを話しているのだと推測する。

l l l l e t , s g o a h e a d

戦闘が開始された。2人は固有霊装を出し、一輝くんは早速【一刀修羅】を使う。対して東堂先輩は目を閉じて息を整えるだけ。俺にはそれが不気味に思えた。嵐の前の静けさと言うに相応しいだろう。俺の直感が危険だと警報を鳴らしている。

【避雷針】

一輝くんの立つ場所付近に目を向けながら刀を地面に突き刺しそう唱えた。一体何をと思ったがその疑問はすぐに晴れることになる。

【疾風迅雷】

東堂先輩は一瞬で一輝くんの背後に回った。いや、回ったのではなく、そこに瞬間移動したと言った方がいいだろう。

【雷切】

自らクロスレンジに瞬間移動をして【雷切】を放つ。一輝くんは為すすべなくただ斬られる。というわけではなく、背後に現れてどこを斬られるか予想したのかギリギリガードが間に合った。刀と刀の打ち合う音が鳴り響いた後に一輝くんの吹き飛ばされる音が聞こえて

くる。そして吹き飛ばされた先は先ほど東堂先輩が地面に刀を突き刺した場所。

【落雷】

そう言うとき雷が地面から一輝くんを襲った。雷に身を焼かれ倒れた。

「お兄様！」

雷に直撃した一輝くんを心配した珠雫が悲痛な声をあげる。圧倒的に東堂先輩は強い。先の先まで見通していた。これは一輝くん負けるのではないだろうか。

いや、痛々しい姿をしてはいるが一輝くんの目はまだ死んでいない。すでに満身創痍であり、力の差は歴然であるのにもまだ諦めていない。諦めていない限りチャンスはある。

一体何が起きた…？

東堂先輩が後ろに現れてから全てが分からなくなった。もし、苦し紛れに【陰鉄】を出さなければ直撃して終わっていた。いや、すでに今終わりにかけている。身体中が痛い。雷に直撃したから当たり前か。こんな状態で勝てるのか？いや、疑問に思っちゃおしまいか。勝てるかどうかじゃなく勝つんだ。勝って七星剣舞祭に出て、優勝しないといけないんだ。

まずは瞬間移動のタネを考えろ。と言ってもすでにだいたい分かっている。最初の目配りの場所に微弱な電波か何かでマーキングをしてその場所に現れたんだ。事実、あの時背後に現れる前にバチッと音がした。地面からの雷は簡単だ。最初に剣を突き刺していた場所。突き刺した時に地面に雷を仕掛けていたのだろう。

おそらく東堂先輩は再び瞬間移動で接近してくるだろう。東堂先輩の性格から考えて次は真正面に来るだろう。その一瞬が勝負だ。

その一瞬で僕が打ち込める最速の技を使う。それを成功させるにはやはり……【一刀夜叉】でより短い時間強化するしかない。タイムイングを間違えれば負け。速さで負ければ負け。

「いきます」

集中することで次第に世界から色がなくなる。東堂先輩はまだ動かない。まだ……まだ……まだ……動いた!!!

ピクリと動いたと思えば消えた。

予想通り真正面に現れた。

この1秒……いや、0.1秒間だけに全てを集約させる!!! 気力も魔力も根気も全てこの0.1秒に詰め込んだ。

東堂先輩も【雷切】を使つて来ようとしている。それを避けて仕舞えばチャンスはない。真つ向から打ち砕くことでしか道は開かない。いつだったか、桐原くんが使っていた【秘剣・燕返し】を練習していたら偶然作れた最速の技。その名を……

「……【零閃】！」

【雷切】！」

音を置き去りにした一撃。音速を超えた一撃。自分の技の中で最も速く、桐原くんの剣技に近づけた技。斬った手応えはあった。

だが、それと同時に斬られた感覚もある。

「カハッ」

口から血を吐き出し跪く。胸の辺りを触れば血がべつとりと手に着く。これは致命傷と言われてもおかしくない傷だ。

それより、東堂先輩はどうなった……。

後ろをボヤける視界の中、どうにかして見れば東堂先輩は立っていた。対して僕は跪いて血を吐き出すしかできない。魔力も気力も空っぽでいた気絶してもおかしくない状態。僕の負けだ。ごめん、ステラ……。

『試合終了!!! 東堂選手の気絶により、勝者【無冠の剣王】黒鉄一輝選手

!!!!  
内容を理解できないアナウンスが流れると同時に僕は意識を手放し、倒れ込んだ。

壮絶な結末だった。一輝くんの目の前に東堂先輩が現れると同時に一輝くんも東堂先輩も居合で勝負が決まった。一輝くんはただでさえ満身創痍だったのに胸まで切られてまさに死にかけ。でも意識がある。

対して東堂先輩は一輝くんと同じように肩から横腹まで綺麗に斬られて、「鳴神」を持って立ったまま気絶していた。とりあえず原作とは違った形で試合が終わったことに歓喜する。ちゃんと2人とも強くなっている。それも予想以上にだ。

試合が終わり、2人の成長に喜んでいたら赤座という狸親父の様子がおかしくなっていた。一輝くんが勝ったと分かれば狸親父の顔色が青く染まる。そして顔色が少し戻ったと思えば一輝くんの倒れている場所へと一直線に向かう。それも斧型の【固有霊装】を展開して向かっている。それだけで何をしようとしているか分かるだろう。

勝者に対してそんな横槍を入れられるのは伐刀者として不快だ。狸親父が黒鉄家からの刺客だとしてもこれ以上何かしようとするなら俺が許さない。東堂先輩の敗北、一輝くんの勝利を汚すのは絶対に許さない。

【朧月】

一本の矢を、猪のように一直線で向かう赤座を狙って放った。

放った矢は狸親父に当たるとその場から蔦が生えてきて狸親父を覆っていく。結果、マリモのような緑の丸い物体が出来上がった。この状態では狸親父も動けないだろうし、ステラさんも一輝くんの元に駆けつけているし、これ以上は無粋だろう。俺は大人しく珠雫と一緒



に帰るとしよう。  
桐原静矢はクールに去るぜってね。

団長押し付けました。

静矢は理事長にいつものように呼ばれ、いつものように理事長室に入った。もう慣れたことだから何を考えることもなく入り、要件を聞く。

「来たか桐原。お前に学園の団長になって貰いたい」

理事長である黒乃は要件を聞けばすぐに口を開いた。団長になれ。それはつまり、複数人いる七星剣武祭本戦出場者の中で一番目立つ。そうなれば静矢の返答は考えるまでも無い。

「丁重にお断りさせていただきます」

「ほう。理由は？」

予想していたのだろう。静矢の即答に驚きもせず淡々と言う。分かっていたら呼ばないでくれよと思いつながら理由を述べる。

「僕はすでに【七星剣王】の称号があり、注目されています。ここはその【七星剣王】を押しつけてまで代表になった猛者。というのを目立たせて破軍には桐原静矢以外にもいる。ということを表に出していきましよう」

「注目を分散させたいだけじゃないのか？」

「本音を言えばそうです。1人だけ目立つなんて嫌です」

「初めから素直にそう言え。なら、桐原は誰を推薦する？」

「そうですね。ステラ・ヴァーミリオンはすでに目立っているので除きます。有栖院はよく分かりません。葉暮姉妹は良い線をいってますね。ですが彼女達は勝ちあがれる程強いとは思えない」

「酷い言い草だな。試合では全勝してるぞ」

「運が良かったとしか思えません。運も実力の内ですが、黒木先輩や東堂先輩の方が圧倒的に強いと思います。葉暮姉妹には悪いとは思いますが」

これは紛れも無い事実だった。葉暮姉妹の實力は東堂刀華に1・2歩も劣る。そんなことは昨年の七星剣武祭の結果を見れば一目瞭然だ。それに加えて静矢は2人の試合を一度だけ見たことがある。そ

の結果、やはり実力不足であると判断した。非情であるが仕方ない。「なら誰が団長を努めるんだ？」

「黒鉄一輝しかないでしょう。理事長も心の隅では彼を代表にしようと思っただけでしょう」

「そうだな。桐原が言うのならそうするか」

「理事長も最初からその気でいたんじゃないですか？もし七星剣武祭で優勝できなくても進級できるように箔を付けたんじゃないですか？」

「そこまで考えていない。買い被りすぎだ」

肩を竦めて言う黒乃に静矢は確信する。現時点では黒鉄一輝の七星剣武祭優勝は桐原静矢という絶対強者がいる時点で確実にありえない。だが、伸び代はある。静矢が卒業した後であれば優勝することも可能だと思われるし、今年の七星剣武祭でも良いところまでいける実力はあるだろう。

「理事長がそう言うならそうなんでしょうね。それだけが用なら僕は帰らせてもらいます」

「用はそれだけではない。お前は合宿に参加するのか？」

「当たり前ですよ。僕も本戦出場の決まった破軍学園の生徒です。行くのは義務に等しいですよ」

「こう言っただけなんだがお前に得があるとは約束できないぞ」

「約束できないということは、得ができる動きはしてくるんですね。ありがとうございます。正直、他の本戦出場選手の育成に回されると思っていました」

「それは黒鉄と激闘を繰り広げた東堂やお前と良い勝負をした黒木に任せる。二人はそういった点でも優秀だ」

「そうですね。東堂先輩は知らないですけど權先輩からは剣術を教わりましたから指導の腕は保証しますよ」

「そうか。こちらからはお前に指導ができる者を探しておく」

「まだまだ強くなれるのなら嬉しいですね」

「お前は強くなって何をしたいんだ？」

「やりたいことなんて何もありませんよ。ただ、歴代最強の伐刀者にな

りたいだけです。その為なら何を犠牲にしても構わない。ただ僕はこの世界にいた証拠を残したいだけですから」

静矢の紛れも無い本心であることを黒乃は目を見て分かった。『この世界にいた証拠』まるでもうすぐ死ぬ人間が言うような台詞を吐く静矢に黒乃はため息を吐く。

「あまり生き急ぐなよ。すぐ死んでしまうぞ」

「僕は死にません。目的を達成しない限り止まりませんよ」

「そうか。私が何を言っても無駄なようだ。行っればいいぞ」

「わかりました。それでは失礼しました」

そう言っただけで静矢は部屋から出て行った。黒乃は出て行った静矢のことを考える。『この世界にいた証拠を残したい』と言った時の目に少し狂気が垣間見れた。

「間違った方法で歴史に名を残そうとするなよ桐原」

黒乃の声は出て行った静矢に届くはずもなく、ただ虚空に消えて行った。

なんか理事長に呼ばれて妙な問答をしたけど適当に言いすぎた。もしかしたらヤバイやつだと思われたかもしれない。だけど俺は悪くないんだ。昨日徹夜で見たアニメで、同じような質問を主人公がされてきた。そして少し狂った目をして『歴史に名を刻みたい』って言っていた。その後ダークサイドに墜ちただけだね。それを少しかっこいいと思った俺は精神年齢40くらいなのについて同じようなことを言ってしまった。恥ずかしい。でも中二病関係なしにこういう時ってあるよね。返答を考えるのが面倒で既知の答えを適当に言う。俺は十分にあると思う。というわけで反省終わり。まあ一応は嘘ではない。歴史に名を残せるのなら名を残して見たい。そし

て後にすげーやつだったと語り継がれたら少し恥ずかしいがそれ以上嬉しい。

「その為には最強になるのが一番だよなあ」

「静矢さんは最強になりたいのですか？」

「ま、男に生まれて伐刀者であれば一度は思うことだしね」

「私はなれると思いますよ」

「……ん？独り言じゃなくなってる？」

そう思い、隣を見ればいつの間にか珠雫が隣を歩いていた。珠雫になら聞かれてもいいか。最強になりたいことを茶化してこないしね。しかも最強になれると仰っている。どれだけいい子なんだ。

「まだまだ果てし無く遠い道のりだけどね」

「結構近い気がしますけど……それでも静矢さんは歩むのでしょうか？」

「当たり前だよ。珠雫はそんな俺の隣に立つんでしょ？」

「当たり前です。私は静矢さんの隣に立ち続けます。妻ですから」

「そうか……。ま、まだ妻ではないけどね」

「む、いずれはそうなります。こんなにラブラブなんですから」

そう言って珠雫は俺に抱きつく。腕に控えめな胸が当たっているのを感じる。これが俗に言う当ててるのよってやつかな。

「そうだね。お互い気が変わらないといいね」

「私は絶対に、何があろうとも想いが変わることはありません。そして、静矢さんの気持ちを私から離す気なんて微塵もありません。泥棒猫には正妻の鉄槌を下します」

正妻の鉄槌ってなんだよ。というか目が怖い。もしかして殺っちゃうのか？殺るつもりなのか？まー、俺について来ようとする女の子なんて珠雫以外にはいないだろうから大丈夫か。

「帰ろうか。珠雫」

「はい。2人の愛の巢へ」

「いや、珠雫はちゃんと自分の部屋に戻ってね。まだ結婚していない男女が同居は認めません！」

「考えが古いですよ静矢さん！」

「そうかな？でも、珠雫のお父さんは僕と同じことを言いそうだけだね」

「……そうですね。では帰りましょう」

父親のことを出したらあっさり引き下がった。良かった俺の貞操はまだ無事だ。今生の初めては結婚してからと決めているから決して同居するわけにはいかない。同居なんてしたら初日で襲われるに決まってる。いや、理性が蒸発して襲っているかもしれない。

「そんな捨てられた子犬のような顔しないでよ。僕は珠雫を捨てたりはしないからさ」

「その言葉、一生忘れないでくださいね。何があってもずっとそばにいます」

こういうことを女の子に言われると嬉しいと思う。

でもそれ以上に

珠雫の愛が重すぎで怖いです。

## 任命式に出るだけ出ました

この日、破軍学園の生徒は全員体育館に集められた。何か不祥事があつたから集められたのではない。ただの全校集会：七星剣武祭任命式である。そして壇上には既に生徒達と向き合うように5名立っている。一輝くん、ステラさん、葉暮姉妹、俺である。一応有栖院風も出場者であるが所用で席を外している。正直俺もサボりたかつた。「では次に代表選手団の団長を発表する。名前を呼ばれた者は前へ出ろ」

マイクの前に立つ理事長が静まっている会場の中で話し出す。今年の団長の発表を前に静かな会場の中、唾を飲み込む音が聴こえる。誰が団長になるのか。それは誰にも予想ができていない。

ヴァーミリオン皇国の皇女であり、人類最高の魔力を持つ【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオンになると予想する者。

【七星剣王】である俺、桐原静矢になると予想する者。

年長者で年齢に伴う経験のある葉暮姉妹のどちらかになると予想する者。

どんな相手に対しても戦略で圧倒していた【黒い茨】有栖院風になると予想する者。

魔力が少なく、落第騎士と馬鹿にしていたが努力で【雷切】東堂刀華という天才を倒した【無冠の剣王】黒鉄一輝になると予想する者。

全員が個々の予想を立てる中、団長となる者の名がその口から放たれる。

「団長は、1年Fクラス黒鉄一輝」

【無冠の剣王】黒鉄一輝が破軍学園団長とわかった瞬間、先程までの静さが嘘のように歓声に包まれる。一輝であれば任せられると全員が納得していた。

名を言われた一輝君は内心戸惑っていた。本人は確実に俺が団長になると思っていただろう。残念、俺は辞退した。

「えっ、僕が…団長…どうして……っ？」

「君がこの中で最も成長したからだよ。ほら、みんな納得して、期待もしている。胸を張ってくれ」

隣にいる一輝君の背中を押す。俺に背中を押されたからか俺の言葉に納得したからか堂々と前に出た。

「それでは、これより団長に校旗の預託を行う」

理事長がそういえば裏でスタンバってた東堂先輩が旗を持って歩いてきた。

「黒鉄一輝くん。勝つというのは背負うということですよ。負けていった者たちの思いを受け継ぐということですよ。この旗には代表になりたくてもなれなかった者を初めとする沢山の人達の想いと願いが籠っています。ですからどうかこの旗と一緒に私達を連れて行ってくださいー！ー！七星の頂へ」

東堂先輩はそう言つて旗を一輝君へと渡す。その旗の重みを一輝君は実感していることだろう。この旗には生徒達全員の思いがこもっている。七星剣武祭本戦では、その全てを背負って戦わなければいけない。信じられない程に重い。だが、その想いを背負わないわけにはいかない。その重圧が俺にとっては鎖になるだろうだから団長をやりたくなかったんだ。俺には乗り越えることができないであろう重圧だ。

「必ず、約束します」

一輝君の言葉でさらに会場は盛り上がる。というか『頑張れよ』などの鼓舞が飛ぶそして一輝は全員の想いをのせた旗を持ちながら元の場所へ戻る。

「ステラ：僕は、他人の評価はどうでもいいと思ってた。自分が納得できればそれでいいって……だけど、人に認められるって嬉しいものなんだね」

「ええー！」

まるで最終回みたいなのを言う二人を横目に理事長の閉会の言葉を聞く。終われば即帰る。これ以上いても得られるものはない。

「桐原くん」

帰ろうとすれば後ろから一輝くん呼び止められた。仕方なく振



り返るとまるでこれからラスボス戦に行く勇者のような覚悟を決めた表情の一輝くんがこちらを真つ直ぐ見ていた。

「本戦までには仕上げる」

この言葉に意味はすぐに理解した。一輝君は本戦までに僕と戦えるようになるつもりらしい。僕の実力を知った上でのこの言葉。流石主人公だ。だから俺はこう返す。

「楽しみにしているよ。だけど待つつもりは少しもない。より先へ行った所で僕はいる」

カッコつけながらその場から去る。ちよつとカッコつけすぎたかもしれないと後悔した。だけど本当のことだ。俺が目指すものは世界最強。この程度ではまだインフレするこの世界で最強は名乗れない。

「もう超えることができないと思っていた限界を超えるしかないか」

ここにきての修行編突入である。もうすぐ合宿があるけど無視。理事長がコーチを用意する云々言ってたけど無視。合宿なんかで俺の魔力は伸びることはない。魔力を出洩らしになるまで使い果たし、それでもまだ足りない。寄越せという魔力への渴望が覚醒への近道だ。既に何度もそれに成功し、死にかけている。

「とりあえずしばらく破軍学園とはさよならだ」

この日、破軍学園2年Aクラス桐原静矢は失踪した。

学園が襲撃されてました。

修行はやはり疲れるし辛い。身体ズタボロだし血塗れだし。現在進行形で死にかけ。でも保有魔力量は大幅に上がった実感がある。覚醒チャレンジ大成功である。こんな状態で誰かと戦えば死ぬるね。間違いない。誰だよこんな修行企画して実行したやつ。訴えるぞこの野郎！

「…って企画も実行も俺じゃん」

バカなことを言っていれば魔力がある程度回復したため、能力で自然治癒力を極限まで上げる。その効果は絶大で、傷口が全て煙を上げて完治する。それだけでなく折れた骨も、砕けた骨もすべて治る。自然を操る能力強すぎないですかね。ただ、疲れは残る。今の魔力残量のここままでが限界だった。

「歩きやすくなったただけまだマシか。いや、今回の修行は中々ハードだったからほんと効果でかかった。ただ、体の一部が木になった時は本気で焦ったなあ…」

今回の修行を思い返しながら帰っていればようやく学園が見えた。だが、その姿は見るも無残な姿だった。校舎は燃えており、校庭の木々もついでに焼かれている。なんだこれ!?!と急いで現場に向かう。

学園内に入れば生徒や教師が地面に寝そべっていた。血が出ていないところを見れば幻想形態で潰されたのだろう。考えていけば着信が入った。というか先程まで圏外だったからいっぱい着信が来ていた。クラスメイトや理事長からだ。メールに残されたクラスメイトからの『助けて』という文字を見て、俺の中の何かが切れた。

一度落ち着いて理事長に電話をかける。かければワンコールで出てくれた。流石である。

「理事長。今どこですか?」

『ヒュルルルルこそヒュルルルルにいる!?!』

風切り音がうるさくて聞こえない。どうやら理事長は全力で移動しているようだ。どうせ聞こえないならこちらから一方的に言うだ

け言おう。

「今、破軍学園にいます。生徒や教師が倒れていて、血が出ていないところを見れば幻想形態でやられたのでしよう。だから生きてます。しかし、これからこの場にいる……目の前にいる襲撃者に状況聞いてみますね」

いつのまにか目の前に6人と1匹が集まっていた。ピエロとライオンに目がいつって仕方がない。なんでその格好なんだ。ふぎけているようで無性に苛立つ。しかもそれが『傀儡王』の端末の一つという事実が最も腹立つ。

「君たちが襲撃者でいいよね。状況説明してくれる？」

「ボク達は『暁学園』です。名高き桐原静矢さんにお会いできて感激です」

「御託はいい。何をしてるのかを聞いてるんだ塵芥共」

知り合いを傷つけられて怒らないほど温厚ではない。

「貴方達『破軍』を踏み台に『暁』が七星剣舞武祭に出場する為襲撃させていただきました」

「らしいですよ理事長。では『俺』は自由にやりますんで切ります」

一方的に話して通話を切る。残り魔力は半分以下。それでも十分だ。塵芥共の掃除など、多少の魔力さえあれば楽に行える。

「二応名乗っておこう。2年Aクラス桐原静矢。名前だけでも覚えて消えてくれ」

言うと同時に襲撃者が消えた。なんてことはない。ただ襲撃者のいた空間を削り取っただけだ。偽物共には用はない。本物は消えている。しかも風を使つて光の屈折を起こして姿を消している。この能力を使う人を俺は1人しか知らない。そいつは俺の真似事をしてるだけだ。

「朧月」

霊装を取り出し矢を射出する。同じステルス使いなんだ。攻略法はわかる。特に、風を操って姿だけを隠すタイプなんて簡単だ。風の出所が敵の居場所だ。

「流石だな。桐原静矢」

出てきたのは7人と1匹。先ほどの襲撃者プラス1人、黒鉄王馬が出てきた。

俺の放った矢は7本。その全てが王馬くん叩き落とされていた。「第2ラウンドといきましょうか」

ピエロが腕を広げて楽しそうに言う。最初の一撃はこいつに当たることを決めた。

「黙れ。ピエロ如きが喋るな」

瞬間、叩き落とされていた7本の矢が全て矛先をピエロに向け、飛んでいきピエロに刺さる。幻想形態ではない矢はピエロを貫き、絶命させる。

「1人目」

一瞬で1人を殺されたというのに、6人は少しも恐怖せず、俺に襲いかかってきた。最初にライオンが腕を振り上げその豪腕が俺にせまる。だが、その一撃をライオンの腕を切り落とすことで避け、そのままに乗っている少女を殺そうと剣を突き出せば黒鉄王馬に弾かれた。

その後俺によく似た人形が背後から現れ、横薙ぎを加えてきた。弾かれたせいで剣を振ることはできない。だからその一撃を手を蹴って木刀を落とさせようとした。だが、それを人形に見抜かれて剣を離し、落ちた先に待機していた左手が木刀を掴み、俺を切りつける。これは避けられない。魔力の出し惜しみをしていればこの一撃で倒されることは明白。だから魔力を解放する。

解放された魔力の圧に俺の周りにいた人は全て吹き飛ばされる。

「王馬くんが連携してくるとは微塵も思わなかったし、俺の動きを模倣する人形を生み出せるとは思わなかった。だけど簡単には獲られない」

「すごいな。シズヤ君は本当に思い通りにならない。全く干渉されないんだね」

「お前のことは知っている。【凶運】紫乃宮天音。望んだものがなんでも叶う能力を持つある意味最強の男。俺が最も警戒し、対策した男だ」

「すごいな。僕のことをよく知っている。もしかしてストーカー?」

「ある意味そうだな」

「気持ち悪い。死んじやえ」

紫乃宮天音がそう言えばなぜか建物の上から剣が落ちてきていた。俺に干渉できないから他に干渉してきたのだ。避けようとすればいつのまにか前からも剣が迫ってきていた。運がいい。それも行き過ぎれば気持ち悪さがある。

「気持ち悪いのはお前だ」

一瞬で紫乃宮天音に肉薄し、殺意を持って上段から斬りつける。紫乃宮天音はそれを避けようとしなかった。なのに突然強風が吹き、紫乃宮天音自身を吹き飛ばした。吹き飛ばされたおかげで俺の一撃は外れた。それだけでなく俺に隙を生んだ。その隙を見逃す黒鉄王馬、俺のコピーではない。

「月輪割り断つ天龍の大爪!」

俺に向かって暴風が飛んでくる。それだけではない。俺のコピーが何も言わずに「崩月」と思われる技を飛ばしてくる。容赦のない一撃を今の残存魔力では受け切れない。だから離脱する。

離脱しようと足に力を入れると地盤が砕かれうまく力が入らなかった。ここでも「凶運」の力が働いていた。それだけではない。

「王者の威圧!」

ライオンから放たれる威圧に体が重くなり、確実に避けられなくなった。

絶望的状况。魔力が一割もない状況でなければ余裕を持って対処できただろう。こんな極限状態でもいつも主人公は戦っているんだ。なら俺は慢心を捨て、主人公と同じことをしてやる。

『俺の最強を以ってお前達の最強を打ち破る』ってね」

「二刀修羅」もどきを発動。これではまだ受け切れないことを瞬時に理解した。それなら「二刀羅刹」もどきを発動するまでだ。残りの魔力全てをくれてやる。後のことなど考えない。1秒間で…否、コンマ1秒で窮地を抜け出し、全員を斬り伏せる。

0.01秒：初めて自然から…俺の血液を元手に鉄の刀を生成。

0. 02秒：模造品の【崩月】を【雷切】で打ち破る。代償に刀が粉々になったがもう一度作り出す。

0. 03秒：黒鉄王馬の【月輪割り断つ天龍の大爪】を【秘剣・燕返し】で霧散させる。

0. 04秒：身体能力強化を生かして模造品と黒鉄王馬の間に移動する。

0. 05秒：反応してきた模造品の木刀と刀を打ち合わせ共に粉々にし、懐にいつも入れているナイフで模造品を【十七分割】する。

0. 06秒：模造品に遅れて反応した黒鉄王馬にナイフを突き刺す。が、薄皮一枚分しか突き刺さらない。そんなことは分かっていた。

0. 07秒：ナイフの柄を思い切り蹴り、しっかりと突き刺さったのを確認してそのまま蹴り飛ばす。黒鉄王馬は血を出しながら飛んで行った。

0. 08秒：全く反応できていないライオンと眼帯少女とメイドを相手に魔力が足りず実体化させるに至らなかったため、幻想形態の【朧月】の矢で貫く。

0. 09秒：チェーンソーを持つ少女に接近。そのまま【閃走・六兔】で瞬時に同じ箇所へ蹴りを6回叩き込み、飛ばす。

0. 1秒：紫乃宮天音に再度肉薄し、首を掴み投げようとする。だが、腕が首に負け、変な方向に曲がっていた。時間切れだ。思ったより早かった。これも【凶運】……いや、見誤っただけか。

だけど、これで『破軍学園選手団』の勝ちだ。

「これは?」

合宿に行っていた破軍学園選手団が戻ってきた第一声は刀華だった。辺りに倒れている生徒、教師を見る。他にもライオンや眼帯をつけた少女、謎のメイド。チエーンソーを持った少女も倒れていた。そして体にナイフが刺さりながらも立ち上がる王馬と、普通に立っている紫乃宮天音とサラ・ブラッドリリーに目を向ける。

そして、信じられないことに血まみれで倒れている静矢を捉えた。

「あーあ、半壊で『破軍学園選手団』が来ちゃった。予定通り弱った状態でシズヤ君が来てくれたのに、弱っていてもこれだけやるなんて上を行かれたな。気に入らない」

『暁学園』側は余裕を持って立っているのはサラ・ブラッドリリーと紫乃宮天音だけ。黒鉄王馬は目に見えて負傷している。対して選手団は全員万全の状態であり、数が多い。どちらが有利かなど誰の目を見ても明らか。

「死んじゃえ」

だから天音は手に持つアズールで静矢の体を貫いた。計画をめちゃくちゃにした静矢に致命傷を与えた。

「な!?!」

目の前の選手団より優先して静矢を狙ったことに驚愕する。選手団の全員はこの襲撃の目的をアリスから話されている。だから代表選手複数より、再起不能なまでにボロボロな1人を狙ったことに驚いた。

「時間稼ぎは終わりだ」

天音がそう言えばサラは絵を描き上げていた。そして生まれてくるのは静矢が3人。一人一人が本物に劣らない実力を持つそれは容赦なく選手団を襲う。

「桐原君が3人!?!」

一輝が驚けば瞬時に3人とも選手団の目の前に移動し、各々木刀を振っていた。並の伐刀者であれば反応できないそれに反応したのは6人。

桐原静矢Aの一撃を静矢に決勝で負けた黒木權が受け止める。そして去年の七星剣武祭で静矢に負けた東堂刀華が【雷切】で斬る。だがその一撃は通らない。桐原静矢Bが受け止めた。その隙に桐原静矢Cが他を襲うがそちらも一輝が受け止め、珠雫が水で拘束する。そして珠雫の後ろからステラが炎でCを焼く。だがこの程度で桐原静矢が倒れるわけがない。そのまま拘束を魔力放出で消しとばし、一輝を斬ろうとする。

「【影縫い】」

アリスが桐原静矢ABC全員の影にナイフを突き刺す。影を刺されることで桐原静矢ABCは動けなくなった。

「やっぱり裏切るのですね。保険をかけて最高でしたね」

天音が笑うと選手団の背後から殺気を感じた。振り返った時には既に手遅れ。桐原静矢Dがアリスを斬っていた。アリスがやられることで3人も動けるようになり襲撃が再開。3人の対処に追われているうちにDがアリスを抱えて戦線を離脱していく。

「待てー！」

一輝がアリスを抱えて立ち去るDを追おうとするがそこに黒鉄王馬が立ちはだかる。

「王馬兄さん!?!」

ナイフで抉られた傷口から血を流しながらも一輝に向けて刀を振る。

「散れ」

その一撃をステラが受け止めた。

「行ってイツキ! シズクがアリスを追って行ったわ! こいつらシズクを素通りさせた! 行った先に罠があるんだわ! いいえ、罠がなかったとしてもシズク先輩と同じくらい強い偽物がいる。シズク1人じゃ危険よ! 行って!」

「わかった! ここは任せた!」

アリスと珠雫を追って一輝は走っていく。背後の3人の静矢と王馬に目もやらず立ち去った。

「ええ、手負いのオウマ・クロガネなんてすぐ倒して追いかけるわ」



手負いとは言え、同じAランクであるため余裕はなかった。だからステラは最初から全力。今自分が放てる一番の技を繰り出す。

「フツ、俺はもう負けられない。手負いであつても負けられない！【月輪割り断つ天龍の大爪】!!!」

「【天壤焼き焦がす竜王の焰】!!!」

風と炎。2つの技がお互いにぶつかり合う。王馬は一度静矢相手に打ち、さらに負傷している。だから威力は静矢に放った一撃より威力は劣る。

だが、それでもステラの【天壤焼き焦がす竜王の焰】は押されていた。負傷している王馬相手に自分が力負けしていることに驚愕する。今まで真つ向から挑み、それを押し返した人など誰一人いない。押し返される。それも手負いの同ランク相手にだ。その事実がステラを追い込む。

そしてついには剣が折れた。剣が折れば後は王馬の放つ暴風に飲み込まれるのみ。死を覚悟した。だが暴風に飲み込まれる前に刀華が割込み、ステラを抱えて離脱した。

ステラは王馬の放った暴風の爪痕を確認して愕然とする。もし刀華が助けに入っていなければ自分は死んでいた。今回は運が良かっただけだと理解した。

「ありがとう。助かったわトーカー！ぶっ!!」

助かったと安心すれば首筋に電撃を加えられ、ステラは意識が遠のいていく。

「どう…して…」

「ごめんなさい。ステラさん、私相手にギリギリ勝てる。その程度では彼には勝てない。少なくとも黒木さんに引き分けるくらいでない」と傷すらつけられない。そんな貴女をこれ以上戦わせるわけにはいかない」

遠のいていく意識の中ステラは悔しそうに語る刀華の声を後に意識が飛んだ。

「牡丹さん！桔梗さん！彼女を連れて逃げてください！できるだけ遠くへ！」

刀華はステラを葉暮姉妹へ投げ、叫ぶ。この場の最善手を模索した結果からしか出てこなかった。珠雫と一輝がおらず、静矢が戦闘不能。この状況で静矢の人形3人と黒鉄王馬を相手に勝てるなんて妄想はできない。全滅が見えている。

「今ここで貴方達七星剣武祭代表者は絶対に負けてはいけません！」

葉暮姉妹はステラを抱えて離脱する。

「逃すと思うか？」

3人の静矢人形が葉暮姉妹を狙って矢放つ。

【暗黒雲】

矢は闇に飲まれ消えた。破軍学園の反撃はそれだけではない。3人ならまだ追うことのできる範囲内であるため追撃をする。

【マツハグリード】！

【クレッシェンドアックス】！

【星屑の剣】！

生徒会3人が静矢人形に葉暮姉妹を追うことができなくなるまで足止めをする。

「追わせると思いますか？」

「捨てがまりで代表生を逃すか。冷静な判断だ。だが、桐原静矢が敗れた時点でお前達は詰みだ」

「そうですね。【七星剣王】が敗れた時点で終わりかもしれません。しかし、これ以上の成果を与える理由にはなりません」

【七星剣王】：それも歴代最強と言わせた桐原静矢が敗れた時点で『暁』の出場はほぼ決まったようなものだろう。だが、もしかしたらの小さな可能性のために代表者を守る為に戦う。それが今の最善。

「やられっぱなしでは破軍学園生徒会の名折れです。この借りは倍にして返しますよ！」

「僕は生徒会と違うんですけどね生徒会長」

緊張している生徒会の面々の緊張を解す為に唯一生徒会ではない權が茶々を入れる。

「こういうのは雰囲気的大事なんですよ。黒木君、力を貸してください」

全員の緊張が良い感じに解れたのを確認して權が得物を持つ手に力を入れる。

「生徒や教師がやられているのを見て黙っているやつはただのクズだ。僕はそんなクズではない。倍返しじゃ収まりがつかない。十倍返しだ！」

「「「おうっ！」「」」」

『破軍学園生徒会+α』と『暁』の戦いが始まった。